レインキス

七瀬 夏葵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

レインキス

【Nコード】

N5645N

【作者名】

七瀬 夏葵

【あらすじ】

雨が俺達を、もう戻れない場所へと、誘う……。雨の日に出会った変な女、沙織。彼女を知る度、心が揺れていく。一年前の“あの日”から、もう人を好きになんてなれない。そう思っていたのに……。だめ、だめなんだよ、だって、あたしは……。震える小さな身体を抱きしめ、その唇を塞いだ。目の前には雨の檻。戻る気はもう、なかった……。

プロローグ（前書き）

この小説には一部性描写、暴力に関する描写が含まれる危険性がございます。

また、リストカット、薬物過剰摂取、家庭内暴力、いじめなど、一部心理的外傷を 刺激する描写が含まれている危険性がございます。

十分ご注意の上閲覧頂けますよう、宜しくお願い致します。

閲覧中に気分を害された方は即刻閲覧を中止頂けますようお願い申し上げます。

病気・医療に関する描写については、事実と異なる場合がございます。御容赦下さい。

追記：作中での主人公の言動や行動が現実ではあり得ない夢物語と思っても笑って許してやって下さい。作者はせめて物語の中だけでも、ヒロインの彼女に幸せになってほしい。そんな思いで書いてます。世の中の、彼女と同じような境遇の人が、少しでも救われる事を願ってやみません。

プロローグ

空を見てた。

紺碧の中にちらりと見える雲の白さがまた美しい、紛れもない夏の晴れ空。

けれど俺は、この空が曇る事を望んでる。

あいつに、会える気がするから。

「雨の降る日に逢ったやつとは、大概いつも長い付き合いになるんだ。

だからきつと、あんたともそうだな」

初めて逢ったあの日の声が、今でも耳に残ってる。

何しろ雨に縁のある二人だった。

あいつが雨女なのか、それとも俺が雨男なのか、二人で会う日は不思議なくらい雨が多くて。

約束の日はいつも、故郷と同じ水と土の匂いがした。

だから今日も、俺は空を見てた。

俺にとってそれは、あいつと繋がってる証明だから。

雨が降ればきつと会える。

そんな気がしてた。

人に話したら、

「よっぽど湿っぽい仲なんじゃねえの」

と笑われたけど。

それでも俺は空を見る。

いつか降る雨を待って……。

Act・1「始まりの雨」

あの頃の俺は、まだまだ青くて、人生の機微なんてものを楽しむ余裕もなく、ただ忙しく毎日を過ごすだけで精一杯だった。

表向き社交家で、誰とでも笑い合えるように振る舞ってる俺だけど、本当は毎日が辛くて苦しくて、どうしようもないくらい孤独だった。あいつと会ったのは、そんな時期だった。

めんどくさい会社の行事。

单身寮の役員が集まるレクリエーションで、今日は市の体育館へ集合をかけられていた。

内心めんどくさいと思いつつも、そんなことちらりとも窺わず、ニコニコといつものように参加を快諾した自分がちよつとうらめしかった。

何しろ今日は朝から鬱陶しい雨が降り続けている。

(話には聞いてたけど、こんなに鬱陶しいとはね)

じめじめとまとわりつく湿気に、降り続く雨。

おまけにこの時期じゃ考えられなかったこの暑さ。

ああ、こればかりは地元が良かったと思わざるを得ない。

それでも選んだのは自分だ。

この気持ち悪さを差し引いても、こっちへ出て来た甲斐はいくらでもあったのだから。

この鬱陶しい湿気もめんどくさい付き合ひも、あの田舎で腐ってく事を思えば、遥かにましに思えるのだった。

俺はもう田舎くさい田舎者じゃない。

それが俺の誇りだった。

「ちょっと遅くなっちゃったな」

仕事がなかなか片付かなかったせいで、着いた時には開始時間を10分ほど過ぎていた。

まあ、連中の事だからこのくらいは許容範囲だろうけど。

取り敢えず申し訳なさそうな顔を作ってから会場に入ろうとしたその時、ふっと一人の女が目に入った。

そいつは、体育館横に植えられた樹木の傍らで、濡れる事も構わない様子で空を見上げていた。

長いポニーテールの黒髪。

けして細くない身体なのに、Tシャツの袖から伸びた白い腕のせいなのか、触れたら消えてしまいそうな儂さを感じさせられた。

よく見れば、何処かで見た事があるような……。

記憶を探るとある事に思い当たり、俺は笑いそうになりながら声をかけてみた。

「あの、技術開発部の樹本きせとさんですよね？」

いきなり声を掛けられて、女は相当に驚いたようだった。

「は？そ、そうですね……」

あなたは？

と問いかけるような怪訝な顔をしている。
俺は可笑しさをこらえて答える。

「失礼。毎朝凄い勢いで走っていくのを見てたもので」

部署は違うが、ごく近い職場である事を伝えた途端、女は恥ずかしそうに顔を赤らめた。

「嫌だなあ。あんなどこ見られてたなんて恥ずかしい」

しきりに恥ずかしがるその姿は、妙に可愛く見えた。

「あはは。まあ、渋滞してる車から見たら、貴方の自転車の方がよっぽど速いですから」

彼女の自転車の速さは、会社の寮生の間でも有名だったので、俺にも名前が伝わってきていたというわけだ。

それを知ってますます顔を赤くするこの子を見るのは面白いけど、あんまりからかつのも可哀想だな。

そう思った俺は笑いを抑え、変わりに微笑みを浮かべた。

「紹介が遅くなりました。私は笹宮ささみや一いち。確か貴方とは同郷ですよ。よろしく」

すると彼女は、さっきまでの恥ずけらいが嘘のように豪快に笑い出した。

「なあんだ。あんたもあそこの出身なわけ？かしこまった言葉使いしてるから何処の人かと思ったけど」

(これがあの儂ささえ感じさせた女と同一人物なのか!?)

バンバン肩を叩きながら大笑いする様は、まるっきりさっきまでとは別人のようで、俺は若干不快感を覚えた。

「悪かったな。こつちじゃああやってんのが普通なんだよ」

思わずムツとしながら、女につられて口調を崩した。すると女はくっくつと笑いをこらえながら。言った。

「ごめんごめん。笑い過ぎたわ」

手を差し出してきた。

「でも、これでおあいこだね」

あらためてよろしく。

と、差し出された手は、思いの外小さかった。

これが、あいつとの出会いだった。

Act・2「再会」

彼女と再会したのは、やっぱり雨の朝だった。

「お？」

愛車のハイエースを走らせる俺の前に、傘片手に爆走する自転車が目に入った。

その主が誰か、後ろ姿からでもばっちりわかる。

俺はクラクションに手を伸ばした。

ププッ！

ふいに響いた音にびっくりして振り向いたのは、やっぱり彼女だった。

「こら、傘さして何爆走してんだよ」

「あんたっ！？最悪ー、急いでるのに変なのに会っちゃったよ」

なんだかむかつく反応を返された。

「変なのって、失礼だなー。せつかく乗せてやると思ったのに」

え、ほんと！？

と、何やら打って変って好感触になる彼女。
現金なやつ。

でも、不思議と嫌な感じはしない。

「ほら、貸せよ」

自転車をかっぱらって、さっさと後ろのスペースに積み込んだ。

「どうぞ、お嬢さん」

助手席のドアを開け、エスコートしてみる。

「あ、ありがと……」

あ、照れてる？

意外な反応。ちょっとびつくりだ。

運転席に乗り込んで、車を発進させた俺は、ちょっとつつむき加減な彼女をちらりと見て声をかけた。

「お前って、意外と可愛いのかな」

すると彼女は、顔を真っ赤にしてこっちを睨む。

「な、何言ってるのよ！？ああ、あたしがかか、可愛いだなんて！」

動揺丸出し。

すごい。こんな反応するとは。予想外だ。

「あはは！ばーか。何動揺してんだよ」

むしろ動揺してるのは俺だよ、と思いつつからかい口調でつつこん

だ。

「なっ！？か、からかったのね！！」

ミラー越しに憤慨する彼女を見て、俺はぷつと吹き出す。

「悪い悪い、お前、からかいがあるからつい」

げらげら笑う俺に、ぶんぶん怒る彼女。ついこの間まで赤の他人だったのに、こんなふうにからかえるなんて。近頃なかった、気安い空気。昔からの知り合いみたいに、楽に話せる。こんなの、初めてだ。

「悪かったよ。お詫びに今度どっか連れてくから」

口について出た誘いの言葉。ドキリしたのは、彼女じゃなくて自分俺。

「ほんと？絶対だからね！」

YESの返事。瞬間、やつほう！と思ってる俺がいた。顔には、出てないよな？

「ほんとだよ。日曜あたり、どうだ？」

さらりと続ける内側で、跳ねる心臓。

「ん、日曜？いいよ、別に」

よっしやー！

心の中でガッツポーズ！

「じゃ、日曜、10時に寮の駐車場でどうだ？」

「了解。遅れないでよね」

遅れるわけないだろう。思いながら適当に相槌を打つ。

早く来い！日曜！

いつもより切実に思う、雨の日曜日だった。

Act・3「その日も雨は降っていた」

待ちに待った日曜日。外はやっぱり雨が降っていた。

「また雨かよ。まったく……」

俺は今日ほど梅雨ってやつを恨んだ事はない。せつかくアイツとのデートだったのに。

あの雨の日の再会から、俺は会社のメールを使って何度もアイツとやりとりをしていた。

今日のプランは山にでも行ってピクニックの予定だった。

しかし、期待に反して朝からこの雨である。

「さて。どうするかな」

彼女は、雨天の場合はその場でどうするか決めよう、と言っていた。最悪『今日は出かけるのやめよう』などと言われかねない。

どうしようかと作戦をあれこれ考えていたところ、気がつけば約束の時間が迫っていた。

「仕方ない。とりあえず出かけるか」

中止と言われたらその時はその時だ。

俺はとりあえず彼女との待ち合わせ場所に向かう事にした。

「来てねえし……」

待ち合わせ時間きっかりに着いた俺は、そこに彼女どころか人っ子

一人いない事に気付いて愕然としていた。

「何やってんのアイツ？」

彼女は電話を持っていない。

携帯電話はおろか、寮の自室にさえ電話がついていないという。つまり、連絡をとるには寮の受付窓口に電話して取り次いで貰うしかない。

降りしきる雨の中、俺は仕方なく彼女の寮に電話する事にした。

『はい。第3本山寮ですが』

電話口に受付の女性が出た。

「すみません、笹宮と申しますが、401号室の樹本 沙織さんをお願いしたいんですが」

少々お待ち下さい、との言葉の後、保留音が流れた。しばらくしてガチャリと再び電話が繋がった。

『お待たせしました。樹本さん、今外出中みたいですよ』

「そうですね。ありがとうございます。失礼します」

電話を切った後、俺はしばし考えた。

この状況が示す答えは多分この3つだ。

？彼女は電話を拒否した

？彼女は約束を忘れて出かけた

？彼女は今こっちに向かっている

正解はどれだ？

？だったらシヨックだな。しかし、それなら『御取次出来ません』と返答されるだろう。

次に？。これはちよつと考えにくい。2日前の金曜日。俺は確かに彼女と約束の時間と場所を確認しあっている。たつた2日で忘れるつてのはいくらなんでも無いだろう。

とすると残りは？？などと俺が考えを巡らせていた時だった。

「はあ、はあ……。ごめん、遅れた……。」

約束の時間から10分遅れで彼女がそこに現れた。

「お前っ！この雨の中自転車って何考えてんだ！？」

彼女は雨の中、傘もささずに自転車で爆走して来たのだ。

「あは……は。ちよつと、寝坊しちゃって……。待たせちゃ……悪いと……思つて、急いで……来たん……だけど」

途切れ途切れ、息を切らせながら話す彼女に、俺はとりあえず傘をさし出した。

「アホ！風邪ひいたらどうすんだ！まったく……。」

「アホは酷いなあ。せつかく一生懸命走つて来たのにさ」

苦笑いする彼女に、俺は何だか顔が熱くなるのを感じた。

「ほら、とつとと貸せ。積んでやるから」

俺は彼女から自転車を奪い取ると、サツと後部座席に積み込んだ。

「何してんだよ、早く乗れ」

やや無愛想に助手席のドアを開けて彼女を促した。

「ん、ありがとう」

彼女は短く礼を言い、俺のハイエースの助手席へと乗り込んだ。

俺も運転席へ乗り込み、シートベルトを締めると車を発進させた。

「とりあえずお前、その格好何とかしろ。ずぶ濡れじゃ風邪ひくだ
ろ」

「んー、いいよ。着替えに帰る時間勿体ないじゃない？」

などと言う彼女に、俺の口をついて出た言葉はこうだった。

「なら、俺の部屋来いよ。風呂と着替え貸してやるから」

「ホント？じゃあそうしようかな」

その彼女の返答に、俺は一瞬ドキリとして、でも顔には出さずに言
った。

「おう。じゃあ決まりな。狭い部屋だけど、我慢しろよ？」

冷静な口調とは裏腹に、俺の頭の中は若干パニックだった。

おいおい、マジかよ？いきなり部屋に来るって、しかも風呂って、意味わかってんのか？

何しろ相手はまだ19歳。未成年だ。男の部屋に行くって意味もわかっちゃいない危険性だってある。

とりあえずだ。何かすると決まった訳じゃない。ここは意識しないようにしとかなないとマズイだろう。冷静さを保つ為、俺は何とか運転に集中しようと試みるのだった。

Act・4「雨のドライブ」

車内には降りしきる雨が叩きつける音がこだましていた。

ずぶ濡れな彼女にタオルを手渡した俺は、ただひたすら運転に従事していた。

そうしてないと、今にも邪な考えに頭を支配されてしまいそうだった。

「ねえ、部屋って遠いの？」

彼女がタオルで頭をふきながら話しかけて来た。

「ん？そうだな。ここから15分くらいかな」

俺は彼女を見ず、視線を正面から外さずに答えた。

降りしきる雨の所為で視界はすこぶる悪い。顔を見なくても不自然とは思われないだろう。

「そっか。それにしても雨、凄いな」

呟くように言った彼女に、俺は少し溜息まじりに答えた。

「そうだな。梅雨って言ってもたまにこういう激しいやつも来るからな」

「そっいや、あつちは梅雨ってないもんね。話には聞いてたけど、本当に雨ばかりでちよつとびっくりした。アンタはもう慣れた？」

俺達の故郷は、一般的に言う梅雨が無い地域だ。

こつちに来た当初は戸惑っていた事を思い出してちよつと懐かしくなつた。

「まあな。でも鬱陶しい事に変わりはないけど。洗濯物乾かないしな」

「あ、そうそう！困るよねー。じめじめじめしてさー」

彼女は嬉しそうに同意した。

こつちの時、やっぱり同郷っていうのはいいなと思つてしまつ。

「だな。まあ、それでもあつちにいるより生活は便利だからいいんだけどさ」

「だよね。あつちつて本当に田舎だもん」

俺の脳裏に、地元のさびれた商店街がよぎつた。

買い物は専ら車で20分以上かかる隣の市まで出なきゃいけない、不便な土地だつた。

豊かな自然に囲まれた長閑な街、と言えば聞こえはいいが、実際には外界から遮断された小さなコミュニティで、人の噂話ばかりしているような連中と暮らさなければならぬ窮屈さが付きまとう。

ある意味都会暮らしなんかよりよっぽど人間関係で苦労する事請け合いだ。

その窮屈さから抜け出す為に、俺はわざわざ海を越え、地元から遠く離れたこの街へと就職を決めた。

恐らく彼女も似たような理由でここに来たのだろつと思つ。

あそこは、それくらい息が詰まる場所だつたから。

「なあ、お前さ、帰りたくなることつてあるか？」

ふいに問いかけた俺に、彼女は一瞬间を置いて答えた。

「……そうだね。山には、帰りたいと思うよ。でも、家に帰りたいとは思えない」

それは、妙にきっぱりした答えだった。

思わずどうして、という疑問が口をついて出そうになり、けれどすぐにやめた。

触れてはいけない。そんな気がした。

「そっか。まあ、そうだよな。田舎だし」

俺は曖昧に言葉を濁し、彼女は何も言わなかった。

車はトンネルに入り、雨音の無くなった車内には走る車の音だけが響いていた。

チラリ、と見やった彼女の顔は、いつもの元気が嘘のように、酷く凍りついて見えた。

(家……か)

どこの家でも何かしら事情はある。

多分、彼女の家にも何かあるのだろう。

俺と同じように……。

やがて車はトンネルを抜け、車内は再び叩きつける雨の音に支配された。

それを合図にするように、彼女が再び口を開いた。

「ね、そういえばさ、アンタ、一人暮らし？」

唐突に尋ねて来た彼女の声は、もうすっかりいつもの明るさを取り戻していた。

俺はその声に合わせてるようにごく普通のトーンで答えた。

「ん？そうだけど」

彼女は悪戯を思いついた子供みたいに手を叩き、はしゃいだ声で言った。

「じゃあ決まり！あのさ、あたし、料理作ってあげる！」

「はあ！？料理？」

思わず素っ頓狂な声をあげた俺に、彼女は嬉々として続けた。

「せっかく友達の家に行くんだもん。何か作ってあげる！こう見えても料理得意なんだからね！」

いかにも嬉しそうな彼女に押し切られる形で、俺はその提案を承諾した。

目指すはスーパー。さて。どうなる事やら……………。

Act・5「雨のち赤面」

俺の部屋の近所にあるスーパーはハイウェイ近くの大型スーパーだ。いつもは混み合っているここも、今日は激しい雨のせいか若干駐車場も空いている。

俺は店舗の近くに車を止め、車外へと出た。

「おい、傘！」

そのまま走りだした彼女に、俺は車に積んでいたビニール傘を手に叫んだ。

「いいよ別に。もう濡れてんだし。それより早く行き！」

そう言うと、彼女はあっという間に店の入り口へと駆けて行った。

「ったく。仕方ねえな」

俺は軽く溜息を吐くと、彼女を追いかけて走った。

店内に入ると、買い物カゴを手に入口近くの野菜売り場にいる彼女が目に入った。

「あ、ねえねえ、ポテトサラダ好き？」

近づいた俺に、大きな男爵いもの入った袋を手にした彼女が尋ねた。

「ポテトサラダ？ああ、嫌いじゃないけど」

「じゃ、決まり」

彼女はそれをぽいっとかごに放り込んだ。

「あとは玉ねぎっど……」

彼女は目ざとく玉ねぎのコーナーを見つけ、何やら品定めを始めた。山と積まれた1個35円、3個100円の玉ねぎを、1つ1つ手にとって、うーん、などと唸っている。その様はまるで熟練の主婦のようだった。

「お前、意外と主婦くさいのな」

俺の言葉に、彼女は得意げに言った。

「ふふん。こつ見えてもあたし、小学生の時から家事してんのよ。底値だつて研究してんだから」

意外だ。てつきり家事はしないタイプかと思つてた。

「あ、でも料理洗濯だけよ。掃除はすつこい苦手だから」

「ふうん」

なんとなく納得。大雑把そうだもんな、こいつ。

「うん、これとこれとこれ！」

彼女は目の前の山から玉ねぎ3つを選び出してビニール袋に入れ、カゴに放り込んだ。

「さて、次は三つ葉っと」

彼女はスタスタと三つ葉の置かれたチルドの商品棚へと向かった。そのままポイツとビニールに包まれた三つ葉をカゴに放り込んだ。

「あ、三つ葉大丈夫？」

「ああ、別に平気」

「そう。良かった。じゃあ、なめこは？」

「それも平気。むしろ好物だな」

すると彼女はスタスタと近くにあるキノコ売り場へ歩いていき、ポイツとなめこの袋をカゴに放り込んだ。

「それじゃ、次は肉ね肉!!!」

キラキラ目を輝かせて言う彼女に、俺はサッとカゴを奪いとった。

「あ……」

「「うづいづの、男が持つもんだろ」

すると彼女はポツと頬を染め、小さく呟いた。

「……ありがとう」

何その反応！めちゃくちゃ可愛いんですけど!!!

「さ、肉コーナーはあっちだ。行くぞ」

直視出来なくて、俺は思わずスタスタと肉コーナーへ歩き出した。

「あ、待ってよ」

慌てて追って来る彼女をよそに、俺はひたすら歩を進めた。

今振り向いたらダメだ。だって俺、今絶対ヤバイ。

顔の熱をごまかすように、俺は必死で彼女の前を歩くのだった。

Act・6 「雨と彼女と買い物と」

ああもう。何だってこんなに顔が熱いんだよ！

アイツに顔見られたら、絶対変に思われる。

ここで警戒されたら部屋になんか来てくれないかもしれない。

そんな思いが頭をよぎる。

正直、どうしようもない。

いや、ちよっとはあるけど、そんな事よりアイツの手料理の方がず

っと大事で。

それ以前にこんなところで気付かれたくない。そんな考えが次々によぎった。

「ねー、待っててば！」

速足で歩く俺に追いつけない彼女を置いて行く形で、俺はそのまま肉売り場に直行した。

早く治まれ、俺の顔！

何とか平静を取り戻そうと、速足に歩きながら深呼吸してみた。

やりにくい事この上なかったが、それでも何とか顔の熱がひいたようだった。

「ねえってば！」

ついに追いついた彼女が俺の後ろからシャツを掴んだ。

「足、速い！！」

「掴むな！シャツ伸びる！！」

口をついて出たのは、そんなアホな台詞だった。

「えー、だってアンタ、止まってくれないんだもん」

口をとがらす彼女に、俺は仕方ないというように大袈裟に溜め息を吐いた。

「悪かったよ。ほら、肉売り場、ここだから」

ショーケースに並んだ肉はどれもグラム単位の量り売りだ。俺は彼女に問いかけた。

「肉、どれをどのくらい使うんだ？」

「鶏モモ肉。300gくらいかな」

俺はショーケースの向こう側にいる店員に向かって注文をし、肉を受け取った。

ビニールに入れられ、値札の貼られたそれをカゴに放りこむ。

「これでいいか？後は？」

「ん、調味料。アンタんとこ、みりん、酒、醤油、砂糖、味噌はある？」

問われて俺は、部屋にある調味料を思い浮かべた。

「えーと、たしか、砂糖はきれかかってたな」

「じゃ、砂糖買おう。あと、ダシの素材なんだけど、何かある？」

「粉末のやつ」

俺の返答に、彼女はあちゃー、というような表情を浮かべた。

「それじゃダメだね。せめてカツオ節とか買わないと」

という訳で、俺達は調味料のコーナーへとやって来た。

まずは砂糖をカゴに放りこむ。後はダシなんだが……。

「ん？何だそれ？」

彼女が手に持つてる物を見て、俺は尋ねた。

それは、麦茶のような白い幾つかのフィルターパックが入った物だった。

「あ、これ？お徳用だしパック。これ一つでカツオ節も煮干しも色々入ってるの」

彼女いわく、粉末よりきちんとダシがとれるらしい。

「ふうん。お前、よくそんなの知ってるな」

「まあね。よく使ってるから」

だろうな。ちなみに俺は見た事も聞いた事も無かったぞ。

「さて。後は卵と魚肉ソーセージかな」

「じゃ、あつちだ」

俺は彼女を連れ、再びスーパー内を歩き出した。

俺達はおひとり様1パック限定77円の卵Mサイズ10個入りをカゴに入れ、最後に魚肉ソーセージをカゴに放りこむとレジへと向かった。

レジは空いていて、俺達はあっさり会計を終えると、せっせとカゴの中身をビニール袋に詰め込んだ。

「よしっと。さ、行こう」

袋詰めを終えた俺は、彼女を連れて店外へ出た。

雨はもう小降りになっていた。

「走るぞ！」

俺は両手に袋を提げ、車へと走り出した。

「あ、待ってよ！」

彼女が俺の後ろから走って来た。

荷物を持っている俺の方が遅そうなのに、いかんせん彼女の方が足が絶望的に遅いようだ。

俺はあっさり車にたどり着き、キーを開けて袋を後部座席に積み込んだ。

「はあはあ……。足、速いね」

ちよつと走つただけなのに息を切らしている彼女を見て、俺は皮肉まじりに笑顔で言った。

「お前、自転車はあんなに早いのに足は遅いんだな」

「ひどいなあ。まあ、事実だからしょうがないけど」

小さく溜め息を吐いて、彼女は助手席に乗り込んだ。俺も運転席に乗り込み、シートベルトを締めると車を発進させた。

Act・7「雨のち風呂の料理予報」

やがて車はハイウェイ高架下にある小さな二階建てのマンションにたどり着き、俺は駐車場に車を停めた。

「着いたよ」

俺は運転席から降りると後部座席に積んだビニール袋を取り出し、彼女を先導して歩き出した。

「けっこういいマンションね。新しいんじゃない？」

「んー、それほどでもないよ。不動産屋は築3年って言ってた」

カンカンと鉄製の階段を昇り、二階の真ん中にある俺の部屋の前へ辿り着いた。

ビニール袋を提げたまま、俺は手に持った鍵束にある鍵の一つをドアの鍵穴に差し込む。

ガチャツと音がしたのを確認して、俺はドアノブを開けた。

「どうぞ。狭いし散らかってるけど」

「ありがと。お邪魔します」

彼女が入った後に続き、俺は中へと入り、ドアを閉めた。

ガチャリと鍵を閉めると、玄関前に佇んでいる彼女に声をかけた。

「ほら。狭いんだから遠慮しないで早くあがってよ」

「あ、うん……」

彼女はおそろおそろ靴を脱ぎ、室内へと足を踏み入れた。俺もそれに続いて狭い廊下にあがった。

「そのドア開けて中入ってて。コレ、冷蔵庫にしまっちゃうから
「ん、わかった」

彼女は頷いて正面に見えるドアを開け、その向こうにある俺の部屋へと入って行った。

「適当にくつろいでて」

俺はそう声をかけると、玄関から見えるシンクの横に設置した冷蔵庫に食品をしまい込む。

すっかり冷蔵庫にしまい終えた俺は、そのまますぐそばにある風呂場の扉を開けた。

バスタブの栓をして、お湯のコックをひねると、ジャバジャバと音をたててお湯が溜まり始める。

俺は風呂場を出ると、彼女が待つ俺のメインルームへと向かった。

「お待たせ。今風呂にお湯はってるから、もう少し待ってる」

「ありがと。いい部屋だね」

「そうか？まあ、何にもないけど、とりあえずテレビでも見る？」

俺はとりあえずテレビをつけた。日曜の昼間だけあって、大した番組はやってないようだ。

「あ、そうだ。お湯がたまるまで、とりあえずタオルで身体拭いて着替えてきたら？ほら、これ貸すから」

俺は衣装ケースからTシャツとジャージを取り出し、干してあったタオルと一緒に彼女に手渡した。

「玄関からすぐ右手の扉開ければ洗面所だから、そこで着替えなよ。濡れた服とタオルは、とりあえず脱衣かごに入れておいていいからさ」

「あ、ありがと……」

彼女はためらいがちにそれを受け取り、扉を開けて洗面所へと入って行った。

残された俺はとりあえず大して面白くないテレビを見て気を紛らわせようと試みた。

覚悟していたとはいえ、やっぱり彼女とこの部屋に二人きりというシチュエーションはかなり緊張する。別にどうこうするつもりはないが、ここに人を入れた事自体随分久しぶりなのだ。

そうだ。考えたら、最後に俺以外の人間がここに入ったのは、もう一年以上前になるんじゃないか？

“あの時”以来、誰かをここに入れた事は無かった。

俺がそんな事を考えてちよつとだけ感傷的な気分になっていた時だった。

「着替え、ありがと」

俺の渡した服を着た彼女が部屋に戻って来た。
俺のぞかいTシャツとジャージで、元々小さい彼女の身体が余計に
小さく見える。

「やっぱり俺のだとぞかいな」

「ん、そうだね。でもいいよ。小さいより大きい方が楽し」

彼女はそう言って、はにかむように笑った。

ヤバイ。今の表情、俺的にかなりヤバイ。

こいつ、普段はガサツっぱいくせに、たまにこう、ドキッとさせる
ような表情するんだよな。

「どうしたの？」

黙り込んだ俺に、彼女が不思議そうに尋ねて来た。

「あ、いや、何でもない」

「そう？あ、そうだ。お風呂のお湯たまるまで時間あるよね。その
間に料理やっちゃうね。台所、借りるよ」

彼女はそう言うと台所へと出て行った。

「ねえ、包丁とか鍋とかってどこにしまってるの？」

「ああ、ちよっと待って」

俺は台所へ行き、一通りのキッチン用品、調味料の場所を彼女に教

えた。

「あと、冷蔵庫の中の物は適当に使っていいから」

「わかった。じゃ、待ってて。すぐ作っちゃうから」

彼女が言い、俺は再び部屋へと戻った。

さて。一体何を作ってくれるのやら……。

やがてキッチンからジュージューと何かを炒める音が響き始めた。漂って来るいい匂いに、お腹がなり始める。

「ふう〜……」

キッチンから彼女が戻って来た。

「お、もう出来たの？」

「ん、まだ。今煮込んでるから、味染みるまで一休み」

「そっか。あ、ちょっとそこ座って待ってて。風呂見て来る」

目の前のクッションに彼女を促し、俺は風呂場へ向かった。

湯はいい具合にたまっていて、温度も丁度いいくらいだった。

俺はメインルームへ戻ると、彼女に声をかけた。

「お待たせ。もう入れるよ」

「ありがと。料理が出来たら入らせてもらっね」

そう言って彼女は再びキッチンへ行ってしまった。

うーん、本当に一体何が出てくるのやら……。

Act・8 「いただきますの前に」

やがて彼女が戻って来た。

「出来たよ。ご飯よそつてくれる？」

彼女の手には丼が一つ。

「あれ？一つだけ？お前のは？」

「あたしはお風呂入るから、その間に食べてもらおうと思って」

「そうか。わかった。じゃあ、お言葉に甘えるよ」

俺は丼を受け取り、ご飯をよそった。

「運ぶのってそのテーブルでいいの？」

彼女はテレビの前に置かれた小さなテーブルを指して尋ねた。

「ああ、そこ置いて」

ガラスの器に盛られたポテトサラダと、木の器に入ったみそ汁が運ばれて来た。

「へー、けっこう美味しそうだな」

ポテトサラダはゆで卵の黄身を潰したものだろっか、黄色の粒状の物が上にかかっついていて、まるで市販のやつみたいだった。

「ふふーん。あ、丼貸して。具入れて来るから」

俺は彼女にご飯の入った丼を手渡した。キッチンから戻って来た彼女が持つて来た丼には、卵でとじられた具が入っていた。

「おお、親子丼か」

「そうだよ。ふふふ。けっこう自信作なんだから。見てよこの半熟具合」

テーブルに置かれたそれは、確かにぷるぷるの半熟具合が見て取れた。三つ葉のアクセントが美しい、まるで食堂で出て来るようなちゃんとした親子丼だ。

「うん、見た目はスゴイ美味そうだ。味はどうかかな？」

「あはは。食べて驚きなさい。あたしはお風呂入って来るから」

「おう。入って来い。タオル、これ使つていいから」

俺は彼女にバスタオルを手渡した。

「ありがと。じゃあお風呂借りるね」

扉の向こうへと消える彼女を見送り、俺はテーブルに並んだ料理を前に座った。

Act・9「そして歯車は動きだす」

ダシのきいた、なめこと三つ葉の味噌汁。ざっくり潰したポテトとゆで卵の入った濃い味のポテトサラダ。見事な半熟具合の卵に三つ葉の緑が綺麗な親子丼。

彼女が用意してくれた親子丼定食は、見た目だけでなく味もなかなかのものだった。

「うーん、これは確かにイケるな」

俺は感心しながら箸を動かし、あっという間に全てを食べ終えていた。

「うちそうさま」

まだ戻って来ない料理の作り主に感謝を込めて言った。

食後の満腹感でいっぱいの至福の時を味わいながら俺は、微かに聞こえて来るシャワーの音に、ふとこの後の事を考えた。

食べている間は気にしないで済んだが、この後彼女が風呂からあがって来たら、俺は一体どうするつもりなんだ？

そもそもこうなったきっかけは、ずぶ濡れになった彼女をそのままにしておけなかった、ただそれだけの事だった。

しかし、本音を言ってしまうえば、あわよくば彼女とどうこうなりたい、という気持ちがない訳ではない。俺だって健全な若い男なのである。狭い部屋に二人きりっていうのは、やっぱりそれなりに期待してしまうのが自然というものだろう。

とはいえ、彼女はまだ未成年で、俺は一応20歳を超えた成人男子。彼女自身にその気がないのに手を出すのは、大人の男として卑怯ではないだろうか。

じゃあ、彼女にもしその気があったら？その時は一体どうするつもりなんだ？

俺は自分自身に問いかけた。

俺は彼女を、どうしたいと思ってるんだ？彼女と、一体どうなりたいと思ってるんだ？

考えてみたが、答えは出なかった。よく、わからない。それが今の本音なのだ。

“アイツ”以外の誰か、を想う事。それが、今の俺に出来るのか？

彼女に惹かれているらしい事は確かだ。でなきゃデートに誘ったりしない。

だけど、それとこれとはやっぱり別だ。

俺の中に未だ居続ける“アイツ”。その想いを凌駕する事なんて、今はまだ考えられない。

中途半端にどうこうしても、彼女を傷付ける事になりかねない。

「ふう……」

小さく溜め息を吐いたその時だった。

「お風呂ありがとね」

彼女がお風呂から戻って来た。

「どうだった、味？」

尋ねられて、俺はすぐに笑顔を浮かべて答えた。

「おう。美味かった。お前、意外と料理上手いな」

その答えに、何故か彼女は表情を曇らせた。

「そう？なら、いいんだけど・・・」

「ん？どうした？」

尋ねた俺に、彼女は微妙な表情を浮かべた。

「え？」

「え、じゃないだろ。何でそんな顔してんだ？」

俺の問いかけに、彼女はためらうような表情を浮かべて口を開きかけ、すぐにいつもの明るい表情に戻った。

「何でもない。それより、作ってあげたんだから、当然後片付けはあんたがやってくれるのよね？」

「仕方ないな。まあ、洗い物は得意だし、やってあげてもいいぞ」

「あはは。得意なんだ？じゃあよろしく」

いつものようにカラカラと笑う彼女の声は、もうすっかりいつもの明るさを取り戻していて、俺はそんな彼女をメインルームに残し、

キッチンで一人洗い物を始めた。

この時俺は気づいてなかった。いつものように笑う彼女の中に、どんな想いが隠されていたのか。鈍感な俺は、ちっとも解ろうととしてなかったんだ。いや、気付いてて見ないふりをしたかったのかもしれない。

カチリ。

運命の歯車が音をたてて廻り始めた事に、俺はまだ、気付く由も無かった。

Act・10「誘い？」

梅雨が終わった。

降り続けていた雨が嘘みたいに、窓の外には馬鹿みたくよく晴れた青空ばかりが見える。

照り付ける日差しは熱くて、季節はもうすっかり夏なのだと嫌になるくらい思い知る。

外はあんなにも晴れているのに、俺の心の中は未だに梅雨の最中にあるかのようにどんよりしていた。

「ふう……」

小さく溜め息を吐き、俺はまた思い出していた。あの雨の日にあった、あの出来事を……。

「ねえ、ドライヤー借りていい？」

洗い物をしている俺に、タオルで髪を拭きながら彼女が尋ねて来た。

「ああ。ちょっと待って」

俺はサツと手に付いた泡を水で洗い流すと、キッチンからメインルームへと戻った。部屋の隅の方に放置してあるドライヤーを取り、彼女に手渡した。

「ほいこれ。あ、コンセントはそこな」

すぐそばに見えるタコ足配線を示した。

「ん、ありがとう」

短くお礼を述べてドライヤーを使い始めた彼女を残し、俺は再びキツチンへと戻った。やがて洗い物を終えて戻ると、ちょうど彼女がドライヤーを使い終わったところだった。

「これ、ありがとね。アンタもお風呂入って来たら？さっき買い物でちょっと雨に濡れてたでしょ？早めにあったまっという方がいよ。風邪ひくから」

「そうだな。じゃあ俺も入って来るか。あ、お前はテレビでも見にくつろいでてくれよ」

「うん。ありがとう」

テレビを見始めた彼女を背に、俺はタオルを手に風呂へと向かった。若干ぬるいが、熱いのが苦手な俺には丁度いい湯加減だった。俺は風呂場の椅子に腰かけ、頭をガシガシと洗いながら考える。

彼女が風呂に入って、俺も風呂に入るよう促されて。

これは、もしかしなくてもそついう意図なのか？

いやいや、いくらなんでも安直すぎだろう。

何しろ彼女とは実際に知り合いになってまだ少ししか経ってないのだ。

それがいきなりそついう関係に、とか、いくら何でもないだろう。

単純に、濡れた俺を気遣って、と考えるのが自然だろう。

そう考え、俺は変な期待を心の奥へと強引に押しやった。

色々と考えてしまったが、とりあえず俺は風呂をあがって服を着替

え、彼女の待つメインルームへと戻った。

「……………!?!?」

そこで俺が見たのは、実に意外な光景だった。

Act・12「同類」

外ではまた強い雨が降り出していた。

テレビすらついていない室内には、窓に叩きつける雨の音だけがやけに大きく響いている。

そんな中で、彼女はまるで抜け殻のように固い床に身体を投げ出していた。

「寝てる……のか？」

「ううん……起きてる……」

彼女のその声は、いつもの明るさが嘘のように無機質だった。

俺は驚いて彼女に近付いてその顔を覗き込んだ。

「……！！」

その表情を見て、俺は思わず凍りついた。

それはもう、まるで別人。冷たくて、無機質な……。

いつもの彼女からは想像もつかないその様子に、俺は思わずたじろいだ。

「お前……どうしたんだよ、一体！？」

「別に……。ちょっと、思い出しただけ」

「思い出した？何をだ？」

尋ねた俺に、彼女は答えた。

「言えない……」

それは、明らかな拒絶だった。

「……何で、そんな……。俺、何かしたか？」

途切れ途切れの俺の問いに、彼女は無機質な声のまま答えた。

「違う。ただ、思い出しちゃうただけ。あるでしょ、そういう、どうしようもない時って」

彼女のその答えに、俺は戸惑いながらも自分にも同じような事があった事を思い出した。

“そういう時”は唐突にやって来て、あっという間に心を浸食していく。

それは、“そういう記憶”を抱えた者にしか解らないだろう特有の感覚なのだと思う。

「……そうか。でも、俺の前でそんな顔するな。どうにかしたくなる」

胸を掻きむしられるような痛みに襲われて、俺は彼女を見つめた。

「……そう。ごめん。今は、どうしようもない……」

無機質なままの声で答えた彼女が、もう耐えられなくて、思わず彼女の上に覆いかぶさった。

「……襲っただけ？」

すると彼女は、表情一つ変えず、無機質なまま答えた。

「あなたはそんな事しないわ。友達なもの……ね」

その言葉に、俺は心臓を掴まれたような思いがした。

「信用……してるんだ？」

「ええ」

無機質な、けれどきつぱりとした答えだった。それはもう、どうしようもないくらいの。

俺はそれ以上何も出来なくて、身体を起こした。

「……悪い。ちょっと、外す」

俺は逃げるようにメインルームを出ると、急いで風呂場へ向かった。身体が熱くて、頭がどうにかなくなってしまいそうだった。

頭をよぎるのは、彼女のあの姿。無機質なあの声と、あの、瞳……。

彼女の中には闇がある。それは多分、俺と同種の物。

俺と彼女は、間違いなく“同類”なのだ。嫌になるくらい、思い知った。

俺は彼女に、何が出来るんだろう？

冷たいシャワーを頭から浴びてみた。それでも、俺の身体を侵す熱

は、なかなか引いてくれそうになかった。

Act・12「お兄ちゃんと携帯電話」

シャワーからあがって来ると、彼女は窓に手をついて立っていた。

「もう大丈夫なのか？」

窓の外を見ていた彼女は振り返り、ぎこちない笑みで答えた。

「ん、ごめん。心配かけたね」

先程までの無機質さはもうない。

けれど、どこか悲しさを含んだ声だった。

俺は思わず抱きしめてやりたい衝動に駆られて、それをぐっと抑え込んだ。

「そっか。あんまり無理、すんなよ」

くしゃり。

彼女の頭を撫でると、彼女は困惑したような声で俺の腕を掴んだ。

「ちよっ……子供じゃないんだから」

「はは。子供だよ、お前は」

そのままくしゃくしゃと頭を撫でてやった。

俺の腕を掴む彼女の手から力が抜けて、するりと下に落ちた。ぽたり。

滴が、フローリングの床に落ちたのが見えた。

「……………!!」

瞬間、俺は彼女を、抱きしめていた。

「泣けよ。俺が、いてやる」

雨の音が、妙に耳に付く。

静かな部屋の中。

俺のシャツが、濡れていく。

腕の中にいる、小さな彼女の、体温。

震える小さな身体を抱きしめながら、俺はただ、守りたいと思った。何があつたかもわからない。

どうしていいかもわからない。

けど、こんなふう泣くコイツを、どうして見ないフリ出来るだろう？

どれくらいそうしていたのだろう。

しばらくして、彼女はそつと身体を離れた。

「もう大丈夫。ごめんね」

「気にするな。俺でいいなら、いつでも胸貸してやる」

「でも、そんなの悪いよ。赤の他人にそんな……………」

赤の他人。

その言葉がグサリと胸を刺す。

俺は、胸の痛みなど素知らぬ顔で笑って言った。

「いいって。他人で気が引けるならさ、今から俺の事、兄貴だと思

えばいい」

「兄貴？」

「そう。兄貴。言ってみな。“お兄ちゃん”て

すると彼女は、戸惑いながら口を開いた。

「お、お兄・・・ちゃん・・・」

「よく出来ました。じゃあ今からお前は俺の妹！な！」

コクリ。

彼女が頷き、俺はわしわしと彼女の頭を撫でた。

「これからは、泣きたい時はお兄ちゃんを呼びなさい。いつでも飛んで行ってやるから」

「・・・・・・うん」

小さく照れたように頷く彼女に、俺の胸は不覚にもまたドキリとし、でも、それを隠して言った。

「よし。じゃあいいものやる」

俺はごそごそと部屋の隅に置いたカバンを漁り、ある物を取り出した。

「これ。お前にプレゼント」

彼女に渡した。

それは、某ペンギンキャラクターの携帯電話だった。

「……………これって、電話？」

「そう。俺、二台持つてるんだ。それは予備のやつ。お前にやるよ」と言っていると彼女は、慌てたように言った。

「こんなの、もらえないよ！」

「いいんだよ。お前、寮の部屋に電話ないだろ？いちいち取り次いでもらうの面倒なんだよ。今日みたいに待ち合わせに困るし。頼むからそれ、持ってきてくれ」

そう言うと、彼女は渋々電話を受け取ってくれた。

「……………あ、ありがとう」

「あ、請求書はお前に回すから、自分で払えよ？」

「もちろん！大丈夫。そこまで迷惑かけたりしないから安心して！」
ようやく、安心したように笑った。

うん。やっぱり彼女は、笑顔が一番似合ってる。

「よし。じゃあそいつは今日からお前の物な。大事にしるよ」

「うん！ありがとう！」

無邪気に笑った。

その笑顔が眩しくて、俺は目を細めた。

外はまだ、どしゃ降りの雨。

それでも俺達の心は、ちょっとだけ晴れたように思えた。

Act・13「梅雨明けの曇り」

あれからもう二週間。

会社の喫煙所で、俺は自販機で買ったコーヒーを前に、窓の外を眺めていた。

すっかり梅雨明けした青い夏の空を見ながら、俺は大きな溜め息を吐いた。

その理由はただ一つ。彼女から電話が来ない。

「なんでだよ？」

使い方がわからない、なんてベタな事はないと思う。

きちんと使い方はレクチャーしたし、説明書も渡した。

あの携帯電話のアドレス帳はもう全部消去したけど、俺の持つてる仕事用の携帯電話の番号と、俺の部屋の電話番号はきちんと登録し直しておいた。

登録されたアドレス帳機能を使えば、難なく俺に電話がかけられる筈であり……。

まさかとは思うが、俺に電話したくないとか？

彼女に何かあった、というのは考えにくい。

何故なら俺と彼女は仮にも同じ会社、それも同じ部署の人間同士だ。実際に仕事をしている棟が違うとはいえ、彼女の身に何かあったなら、すぐに耳に入って来る事だろう。

それを考えると、電話がかかって来ない理由は、やっぱり単純に彼女に電話をかける気がないから、としか思えない訳で。

「まずったかなあ」

思わず呟いた時だった。

「何がまずったんだ？」

「うわぁー!!」

背後から声をかけられ、俺は思わずびっくりして振り返った。

「や、山田さん！おどかさないで下さいよ〜」

「はは。悪い悪い。そんなに驚くとは思わなくてな」

そう言つて、声をかけた主、山田さんは豪快に笑った。

山田さんは俺の職場の先輩だ。

男らしいガツシリした体格もさることながら、面倒見のよさで他の同僚からも慕われている中堅社員である。

「で、お前、何昼間っから空見て溜め息吐いてんだ？何かあったのか？」

「いえ、その……」

俺が口ごもると、山田さんはガシッと俺の肩をつかみ、「こそこそと耳にささやいた。

「……女か？」

その言葉に、俺はカーツと顔が熱くなるのを感じた。

「やや、山田さん!!」

慌てて腕を振りほどいた俺に、山田さんは笑いながら言った。

「はは。凶星か。お前にしちゃ珍しい。しかし仕事中に女の事を考えるのはイカンぞ。今は仕事に集中しろ、な」

「……はい。すいません」

「おいおい、そんなに落ち込むなよ。よし、今日は仕事終わったら久しぶりに飲みに行こう!俺がおごってやる。な!」

バンバン肩を叩きながら言う山田さんに、俺は思わず顔をほころばせ頷いた。

そうだ。この際山田さんに相談してみるのもいいかもしれない。そう思い、幾分軽くなった心で、俺は再び仕事場へと戻ったのだった。

Act・14「空への想い」

仕事が終わりに、俺は山田さんに連れられ、会社からほど近い所にある居酒屋へ来ていた。

「お疲れ！まずは乾杯！！」

俺は山田さんと一緒にビールの中ジョッキをガチンと合わせて乾杯した。

「……ぷはー！やっぱり仕事明けのビールはうまい！！な！！」

山田さんはビールをグビグビ飲みほして、すぐさまおかわりをオーダーした。

いつもの事だが、この人の飲みっぷりは見ていて気持ちいいくらい凄い。

またすぐにキンキンに冷えたジョッキに注がれた美味そうな生ビールが運ばれて来て、山田さんはそれを受け取ってから俺を見て言った。

「ほらほら、お前も飲め飲め」

勧められるまま、俺もグツと生ビールを流し込んだ。

冷えたビールは喉に心地よく、酒に強くない俺は、二杯目を飲み干す頃にはもういい具合に酔いが回って来ていた。

顔と身体が妙に熱くて、でも、何だか気持ちいい。

目の前に座っている山田さんは、さつきからかなりのハイペースでガバガバとジョッキを空けているにも関わらず、ほんの少し顔に赤みがさした程度で、全く酔っている感じがしない。

いつもの事だが、全くこの人の酒の強さには感心してしまう。

「……さて。そろそろ本題に入るかな」

さつきまでふざけ口調だった山田さんが、スツと真面目な顔に変わった。

「イチ、お前、一体何がどうした？俺でよければ話してみる」

仕事仲間としてじゃない、プライベートの友達としての呼称で俺を呼ぶ山田さんの声は優しく、俺はちょっと涙が出そうになる。この人は、いつだって損得抜きで俺の事を気にかけてくれる。それが嬉しくて、たまらなかった。

「……実は、ちょっと気になる子がいて」

俺の言葉に、山田さんは一瞬かなり驚いたような表情を浮かべ、しかしすぐに嬉しそうに笑った。

「そうか。それは良かったじゃないか」

山田さんの笑みに、俺は複雑な表情を浮かべた。

「はい。でも……」

「でも……何だ？」

「いいのになって。俺……」

うつむき、黙りこむ俺に、山田さんは少し寂しそうに言った。

「……カヨの事か？」

俺が頷くと、山田さんは優しく俺の肩を叩いた。

「なあイチ、お前さ、もう、いいんじゃないか？」

「山田さん、でも……」

顔を上げたものの、それ以上言葉が出なかった。

カヨ。

一年前に失った俺の、婚約者。

白血病だと宣告され、闘病生活の果てに逝ってしまった最愛の人。

アイツは俺にとって、絶対の存在だった。

アイツがいたから、俺は昔の傷を乗り越えて“今”を生きる事が出来るようになった。

なのに……。

「そんな顔すんな。イチ、お前がそんな顔してたら、空で見てるカヨが安心出来ないぞ」

その言葉で、俺の頭にアイツの最期が鮮やかに蘇った。

『……イチ、幸せ……になっ……て……空で……見て……る……』

酸素マスク越しに、途切れ途切れに、それでも笑顔を浮かべて言った、アイツの、最後の言葉……。

カヨ……俺は……。

滴が頬を伝った。
俺はまだ、アイツの事……。

Act・15「溢れる涙」

ダメだと思っても、止まらない。

俺の頬には、とめどなく滴が伝い、ボロボロと零れ落ちていた。

「イチ……………」

「すみません山田さん、俺……………」

スツとハンカチが差し出された。

「悪い。ちよつと急ぎ過ぎたな。お前にとってアイツがどれだけ特別だったか、よく解ってるつもりだったんだけど、ようやくお前が前に進めそうになってるって思ったら嬉しくて、ついな……………」

「……………いえ、いいんです。アイツ以外のやつが気になってるのは、本当ですから」

「……………そう、か。じゃあ、その子とは今どんな感じなんだ？」

「いえ。まだ全然進展なくて。この間携帯電話プレゼントしたんですけど、まだ一回も電話がかかってこなくて……………」

俺の言葉に、山田さんはかなり驚いた表情を浮かべた。

「携帯電話！？お前、その子にわざわざ携帯電話買ってやったのか？」

「いえ、新しく買ったわけじゃないんです。元々あった、あのペン

ギンのやつをあげただけで」

俺の答えに、山田さんは更に驚きを隠せない様子で声を荒げた。

「何だと！？だってお前、アレは……」

山田さんが驚くのも無理はない。

だってアレは、カヨの形見なのだから。

「ええ。ずっと回線止められなくて、そのまま持ってたんですけどね。彼女、寮の自分の部屋にも電話がないって言うんで、俺から強引にアレを渡したんです」

山田さんはしばらく何かを考えるように黙り込んでいたが、やがて決意したように口を開いた。

「なあイチ、お前さ、自分で、気付いてないのかもしれないけど……」

山田さんは真剣な目で俺を見つめて言葉を続けた。

「それってさ、もしかしてお前、その子の事、カヨの代わりにしようとしてないか？」

言われて、ドキンと心臓が跳ねた。

「そ、それは……」

「なあイチ、その子がどんな子か、俺はまだわからん。でもな、お前、その子にカヨの電話を渡して、カヨともう一度繋がったような

気がしてるんじゃないか？だから電話がかかって来なくて不安にな
ってる。違うか？」

山田さんの言葉に、俺の心臓は早鐘を打ち、酒で熱くなった筈の身
体は、妙に冷たく感じた。

俺は、彼女の事が心配で、あの電話を渡したつもりになってた。
だけど、本当のところは違うのかもしれない。

彼女を通して、カヨを見ていただけなのかもしれない。
自分が、解らなくなった。

「…………イチ！おい、どうしたイチ！？」

「…………あ、す、すいません山田さん、俺…………」

戸惑う俺に、山田さんは小さく溜め息を吐いて言った。

「なあイチ、お前さ、少しゆっくり考えたらどうだ？カヨの事抜き
で、その子の事、本当はどう思ってるのかさ」

「…………はい」

落ち込む俺の肩を、山田さんはポンと優しく叩いた。

「ま、そう落ち込むな。慌てないで、ゆっくり向き合えばいいさ、
自分の気持ちと、な。そうすりゃ答えはいつか出るはずだから、な
！」

「…………はい」

「大丈夫。お前は一人じゃない。迷った時は、俺に相談しろ。その

子の事が本当に好きなら力になるし、もし違うなら、それはその時
また考えればいい。俺はいつだって、お前の味方だから、な！」

「山田さん……。ありがとうございます……。」

視界が滲んで、目の前の山田さんの顔はもう、よく解らなかった。

「ああもう、泣くなよイチ。ほら、とりあえず飲め。今日はもう、
飲んで飲んで飲みまくれ。潰れるまで飲んで、寝ちまえ。後の面倒
は俺が見てやる。考えるのはもう少し落ち着いてからでいいさ、な」

山田さんの優しい言葉に甘えるように、俺はその後、夜通し山田さ
んと飲み明かしたのだった。

Act・16「守りたい」

朝日が目にしみる。

散々飲み明かした俺と山田さんは、その後二人で朝まで徹夜カラオケコースで延々歌いまくった。

現在時刻AM5:30。もうすぐ始発が出る時間である。

「じゃあイチ、俺、始発で帰るけどよ。どうだ、これから家に来ないか？アイツもたまにはお前の顔が見たいって言ってたし」

笑顔の山田さんを前に、俺はちよつとだけ考えた。

山田さんの奥さんとは、俺も会社の寮の役員をやってた同士の関係上で親交があるから、まあ、家にお邪魔する事自体はやぶさかじゃない。

しかし、それにしても一晩中旦那さんを付き合せた上に、朝から新婚家庭にお邪魔するのはさすがに失礼ってものだろう。

「あー……、嬉しいんですけど、やっぱり今日は遠慮しときます。予定もあるんで」

「そうか？じゃあ、またな！」

山田さんは手を振って元気に改札の向こうへ消えて行った。同じ徹夜明けなのにえらい元気な人だ。

俺は、山田さんを見送ってから一人寂しく歩き始めた。その時だった。

「ん、あれは……」

交差点の向こう側に、自転車で信号待ちをしている人物が目に入った。

俺を見ると、向こうも俺に気付いたようで、ハッとしたように俺を見たかと思うと、パツと自転車にまたがり、通りの向こう側へと走り出してしまった。

瞬間、信号が青に変わり、俺は弾かれたように走り出した。

「おい！ちょっと待てよ！！！」

必死で叫んだが、前を走る自転車の主は一向に止まる気配が無い。俺は、目の前の自転車まで何とか追いつこうと必死で走った！

「こら待て！何で逃げるんだよ！？」

走りながら叫んだが、自転車の速度は一向に弱まる気配がない。

「待てって言うてるだろーがあっ！！！」

俺は更に加速し、思いっきり走った！
その時だった。

「うわっ！！！」

捨てられていたペットボトルに引っかかり、足がもつれた。
まずい！と思った次の瞬間、俺の身体はコンクリートに打ちつけられていた。

「いつてえ……」

どうにか受け身を取ったものの、あちこちを派手にすりむいたらし

く、ズキズキと痛む。

直後、キキツと音がして、バタバタとこちらへ駆けて来る音がした。

「だ、大丈夫!？」

倒れている俺を、さっきまで自転車で爆走していた人物が心配そうに覗きこんだ。

「はは、何とかね。それよりお前、何逃げてんだよ？お陰でこんな怪我する羽目になったじゃないか」

「ごめん……」

申し訳なさそうに謝られ、俺はふうーっと大袈裟に溜め息を吐いて言った。

「いいよ。許す。お兄ちゃんはそんなに心狭くないからな」

すると彼女は、泣きそうな顔で笑った。

「ありがとう……お兄……ちゃん……」

その時、思った。

……守りたい。

俺は、コイツを……

それは、心から溢れる、素直な気持ちだった。

理由なんかどうだっていい。

目の前にいるコイツを、守りたい。

昨夜のモヤモヤした気持ちはもう、何処にもなかった。

Act・17「雨の檻」

ふいに雨が降り出した。

俺達は雨を避ける為、ひとまず近くの立体駐車場へと駆け込んだ。休みの日の早朝だけあって車もほとんどなく、俺達以外誰もいなかった。

辺りはシンと静まり返り、激しく降りだした雨の音が、うるさいくらい響いている。

「しばらくここで雨宿りしよう」

彼女は無言で頷いた。

「……なあ、お前、何でさっき俺を見て逃げたんだ？」

彼女はうつむき、しばらく黙り込んだままだったが、やがて静かに口を開いた。

「……怖いから」

「は？怖いって、俺が？」

驚く俺に、彼女はハツとしたように顔をあげ叫んだ。

「違うの！お兄ちゃんが怖いわけじゃないの」

「じゃあ、何が怖いんだ？」

「ん……」

彼女はふうーっと大きな溜め息を吐いた。

「なんか、訳があるんだろ？良かったら話してみる、な」

その目に酷くためらうような色が浮かび、彼女は自嘲気味に笑った。

「……ん。ちょっとね、色々あって」

それは、あまりに痛々しい、今にも泣きだしそうな笑顔だった。それを見た次の瞬間、俺は思わず、彼女を抱きしめていた。

「お、お兄ちゃん!？」

彼女の驚いた声が、無人の静かな立体駐車場に響いた。

「いいから、このまま聞け」

抱きしめる腕に力を込めた。

「お前が何を怖がってるのかわからないけど、俺は、お前を傷付けたりしない。だから、大丈夫だ。安心して、そばにいていいんだよ」

言い聞かせるように言った。

それはむしろ、俺の為だったのかもしれない。

俺は、怖かった。

この手を離せば消えてしまっくんじゃないか。

そんなふうに思っほど、目の前の彼女は夢中で、弱々しかった。

彼女の小さな身体が、震えた。

「だめ……だめなんだよ、だって、あたしは……」

小さく言い、離れようとした彼女を、俺は強引に引き寄せた。

「……！！」

離したくない。

寒い唇が、俺の身体を熱くしていく。

外には雨の檻。

引き返す気はもう、なかった。

Act・18「揺るぎない想い」

離したくない。

それだけが、俺を支配していた。

「……………んっ、んんっ」

吐息が漏れ、彼女の腕が俺を押しつけようと抵抗する。

俺は抱きしめる腕に力を込め、貪るように唇を塞いだ。

やがて彼女の身体から力が抜け、俺は安心したように唇を離した。

パンツ！

乾いた音が響き、俺の頬が熱くなった。

「ばかつー!!」

叫んだかと思うと、彼女は外へ走り去って行った。

「あっ！おい、待てよー!!」

彼女を追いかけ、俺は雨の中走り出した。

ほどなくして彼女に追いつき、その手を掴んだ。

「離してー!!」

「逃げるなよー!!ちよっと落ち着けてー!!」

「いや！離してっばー！！」

暴れる彼女の身体を強引に引き寄せ、俺は再び唇を塞いだ。

「んっ、んんっ……！！」

初めは抵抗していた彼女も、やがて大人しくなり、俺はようやく唇を離した。

「ほら、戻るぞ。ここじゃ濡れるし、自転車、置きっぱなしだろ」

俺の言葉に、彼女は黙って頷き、俺達はそのまま駐車場へと戻った。雨の檻を眺めながら、彼女はボソリと何かを口にした。

「ん？何だ？」

俺の問いに、彼女は顔を真っ赤にして叫んだ。

「バカって言ったのよ！何であんな事！？」

俺は微笑みを浮かべながら言った。

「ん、嫌だったか？」

彼女は顔を真っ赤にして言い淀んだ。

「……い、嫌っていうか、その……と、突然過ぎて、どうしていいか……」

うつむき加減でそんな事を言う彼女に、俺はにっこり笑った。

「可愛いな」

「 なっ！何言ってる!？」

「お前のそういうとこ、俺、凄く好きだぞ」

彼女の顔が、ますます赤く染まっていくのが見えた。
それを見て、俺は故意に笑顔を浮かべた。
もう照れも遠慮も見せない。

コイツの手を離す気は、毛頭ないんだから。

A c t ・ 1 9 「告白」(前書き)

病気・医療・ドナーに関する描写は現実と異なる場合がございます。
恐れ入りますが、予めご了承の上お読み頂きますようお願い致します。

Act・19「告白」

「あ、あんた……」

わなわなと身体を震わせる彼女に、俺はこれ以上ないくらいの笑顔で言った。

「こらこら。俺の事はお兄ちゃんと呼べと言ったでしょ」

「あ、兄があんな事するか……!?」

彼女の叫びに、俺は至極当然、というように返した。

「だって、血は繋がってないんだし。問題ないでしょ？」

「そ……」

「そ？」

「そんな理屈、あつてたまるか……!!」

最早我慢の限界、とばかりに叫びまくる彼女に、俺はごく冷静に笑顔を浮かべた。

「だって、お前の事好きになっちゃったんだから、仕方ないだろ」

その言葉に、彼女が目を点にしてフリーズした。

「……今、なんて？」

「いや、だから、仕方ないだろ」

「その前っ!!」

「好きになっちゃったんだから」

けろっつとして言う俺に、彼女は先程までの怒りが嘘のように、にっこりと笑顔を浮かべて尋ねた。

「好きになっちゃったって……誰を？」

「お前を」

「誰が？」

「俺が」

すると彼女は、しばらくその固い笑顔のまま沈黙し、やがておらずと口を開いた。

「あ………笹宮さん？」

「いや、だから俺の事はお兄ちゃんと」

「そんな事はこの際どうでもいい！誰が誰を好きだっ！？」

「いや、だから、俺がお前を」

「ええええー！？」

静かな駐車場内に、彼女の叫び声が響き渡った。
雨はもう、小降りになり始めていた。

Act・20「キスの雨」(前書き)

病気・医療・ドナーに関する描写は現実と異なる場合がございます。
恐れ入りますが、予めご了承の上お読み頂きますようお願い
致します。

Act・20「キスの雨」

「あんた今、自分が何言ったか解ってるの!？」

「そうわめくなよ。俺がお前の事を好きだと、何か問題あるのか？」

「大ありよ!だって、あたしは……」

彼女は言い淀み、その瞳の奥が揺れた。

「お前が何をそんなにためらってるのか知らない。話したくない事なら無理には聞かない。だけど俺は、たとえ何があっても、お前の手を離してやるつもりはない」

多少強引にでもいい。コイツが俺のものになるなら、どんな手だつて使つてやる。

コイツを一人で泣かせるなんてもう、したくない。

「お前は俺の妹で、俺のいちばん大事な女だ。ずっとそばにいて欲しい。もっとも、嫌だって言っても諦める気はさらさらないけどな」

きつぱりと言い放つた俺の言葉に、彼女はしばらく沈黙し、やがて小さく言った。

「……でも……だってそんな……信じられない……」

瞬間、俺は彼女を抱き寄せ、もう一度その唇を塞いだ。

「んっ……んっ……」

小さな抵抗を見せた彼女の手を掴み、俺はその唇を貪る。

口角を割って舌をすべりこませ、彼女のそれと絡ませていく。

漏れる吐息は熱を増し、やがてそれは身体中に伝染していく。

抱き寄せた彼女の身体からスツと力が抜けたところで、ようやくその唇を解放した。

「……これでも、信じられない？」

囁いた俺に、彼女は小さく呟いた。

「………ばか」

頬を赤く染めてうつむく彼女はあまりに可愛らしく、俺は少しだけ意地悪がしたくなって、その耳にふうつと熱い息をかけた。

「ひゃんっ!!」

ビクリと震えたその身体を優しく抱きしめながら、その耳に囁く。

「………好きだよ」

腕の中で小さく震えたその全てを、激しく愛しいと思った。

再びその唇を塞いだ時、彼女の腕が、俺の背中に回るのを感じた。

「………んっ、ふっ………」

熱が増して行く。

耳に響くのは微かに漏れる吐息と、遠くに聞こえる雨の音だけ。

世界に二人だけのようない錯覚の中、俺達はキスの雨に身を委ねるのだった。

Act・21「深夜の電話」

孤独は人を怠惰にし、じわじわと真綿で絞めるように心を殺していくのだと、一年前のあの日から、俺は嫌という程思い知っていた。彼女と出会う前の俺は無機質で、一心に仕事に打ち込んでいる時以外は、何をしても時間が長く感じていた。

とりわけ仕事の約束の無い休日など、何をしてもいいか解らず持て余してばかりいた。

しかし、それまではこの先永遠に続くように思っていたその無機質な時間は、彼女という新たな要素が加わってからは、全く違った側面を持ち始めた。

俺をとりまいていた色の無い世界はすっかりその色彩を取り戻し、無味乾燥だった筈の俺の日常は、心が浮き立つような輝きを放つ貴重な物に変わった。

彼女と過ごす時間はいつだって楽しく、あっという間に過ぎていってしまう。

キスの雨を降らせたあの日からもう二カ月。俺は事ある毎に彼女と過ごすようになった。

とは言っても、俺が彼女と過ごせる時間は、多くて週に一度あるかないかだ。

一年前のあの日以来、勤めている会社とは別の仕事を個人で請け負うようになっていた俺はとにかく忙しく、日付が変わるまで仕事が片付かず、あちこち駆けずり回らねばならない事がほとんどだ。

無味乾燥な時間を過ごすのが嫌だったからとはいえ、彼女という安らぎを得た今となつては、この忙しさがとてつもなく煩わしい。

しかし、ここまで広げてしまった仕事の枠を今さら縮小する訳にはいかない。

俺は歯がゆい思いに内心舌打ちしながら、相変わらず減らない仕事

をこなし続けていた。
彼女からある電話がかかって来たのは、そんな忙しい毎日の最中だった。

「……はい、笹宮です」

「あはは。お兄ちゃん、元気い？」

受話器越しに聞こえてくる声は、明らかにいつもの彼女とは違った。

「お前、もしかして飲んでるのか？」

「せいかゝい ちよつと飲み過ぎちゃって。ねえお兄ちゃん、迎えに来てくれない？」

時計を見ると、午後11時過ぎだった。

仕事も大分キリがついたところだし、何よりこの明らかにマズイ状況の彼女を一人で放っておくのはどうにもためらわれる。

「で、今どこにいるんだ？」

「ん、会社の近く」

「じゃあいつもの駐車場で待ってる。15分で行く」

「わかった」

電話を切ると、俺は急いで書類を片付けた。
急がないと、今の彼女一人で夜道を歩かせておくのはかなり危険な気がする。

俺はとるものもとりあえず車へと向かった。

幸い休日のこの時間なので、道路は空いており、ほどなくして目的地へ着く事が出来た。

「あ、お兄ちゃん、うふふ、お迎えありがとう〜」

会社にほど近いその駐車場で車から降りた時、彼女はもうすっかりへべれけになってその場に座り込んでいた。

「おいこら、何そんなになるまで飲んでるんだよ!？」

「あはは。も〜、お兄ちゃんたら怖い。よいしょと・・・わっ
!」

完全に酔っ払いの状態になった彼女は、立ち上がった途端によろめいてしまった。

「危ない!」

俺は彼女がコンクリートにたたきつけられる寸前のところでどつにかその身体を受け止めた。

「ばっかっ!危ないだろ!」

「あはは、ごめ〜ん」

笑って言う彼女をどうにか立たせ、俺は苦い顔で尋ねた。

「まったく、こんなになるまで一体誰と飲んでたんだ？」

すると彼女は、酔いのまわった上機嫌さで答えた。

「ん〜、一人だよお」

「は？お前、一人で飲んでこんなになつたの？」

「うん、そう。悪い？」

不機嫌そうに眉をしかめる彼女に、俺は小さく溜め息を吐いた。

「お前なあ、一応若い女の子なんだから、外で一人で飲むとかやめなさい。危ないでしょ」

「ぶう〜、いいじゃない。あたしだって一人で飲みたい時あるんだから〜」

そう言って口をとがらせる彼女に、俺は何となく違和感を覚えて尋ねた。

「お前、何かあつたのか？」

「ん〜、大した事じゃない」

と言いつつ、その瞳に暗い影が宿るのを、俺は見逃さなかった。

「言いたくないなら、無理には聞かないけどさ。とりあえず車乗れよ。送ってやるから」

「いや！帰りたくない！」

「帰りたくないって、お前……」

「やだもん。今日は家、帰りたくない」

(これは……もしや……)

俺の頭に、彼女の家族の事がよぎった。

ひと月ほど前、彼女は寮から出てアパートを借りた。

実家から母親を呼び寄せ、二人暮らしをしていると聞いていた。

この様子から察するに、多分、その一緒に暮らしている母親と何かあったのだろう。

「わかったよ。今日は俺の部屋に泊まればいいから、とりあえず車に乗りな」

「ほんと！？ありがと、お兄ちゃん大好き！」

抱きついて頬にキスして来た彼女を、はいはいと適当になだめつつ、俺は彼女と共に車に乗り込んだのだった。

Act・22「眠れる誘惑」

車通りの少ない夜の街を、愛車のハイエースは滑るように進む。
先程抱えるようにしてなんとか助手席に乗せた彼女は、もうすやす
やと寝息を立てている。

「まったく、呑気な顔しやがって」

初めは若干腹が立っていたものの、彼女が隣にいるというこの状況
がちよっと嬉しいと思ってしまうている自分に苦笑した。

（それにしても、一体何があっただんだか・・・）

彼女は元々酒に弱く、自分からはあまり飲まない。

以前俺の部屋に泊まりに来た時、一緒に晩酌をと勧めた事がある。

自分はまだ未成年だからと主張して断る彼女に、数えでは20歳な
んだからと言って半ば強引にビールを注いで飲ませた。

しかし、彼女はコップ半分も飲まない内に真っ赤になり「もう飲め
ない」と早々とギブアップしてしまった。

そんな彼女が自分から、しかもここまで酔うほど飲むなんて・・・
。

「・・・・・・・・ん・・・」

「起きたか？」

「あれ？お兄ちゃんがいる」

どうやらまだ寝ぼけているらしく、ぼんやりした顔で不思議そうに

こちらを見つめている。

「大丈夫か？もうすぐ着くぞ」

もう前方にマンションが見え始めていた。

「んー・・・眠い」

眠そうに目をこする彼女を横目に、俺はマンションの駐車場へと入り、車を停めた。

「ほら、着いたぞ。降りられるか？」

「んー・・・」

半分眠りの中にいる彼女を見て、俺はふうと小さく溜め息を吐いて車を降り、助手席の彼女を抱き抱えて自分の部屋へと向かった。

「ふう〜・・・」

脱力した女というのは、全く洒落にならないくらい重い。

俺はなんとか部屋のベッドに彼女を降ろすと、ようやく一息ついた。

「まったく。一体何だってこんな事になったんだか」

俺のベッドを占領してすっかり眠りこけている彼女を横目に、俺は深い溜め息を吐いた。

「んっ、んんっ・・・」

寝返りを打ちながら悩ましげな声をあげられ、俺は一瞬ドキンとした。

(落ち着け俺！アイツは寝てるだけだ。別に俺を誘ってる訳じゃない)

ドギマギする俺をよそに、彼女はこちらに背を向けてすうすうと寝息をたてている。

「…………お兄ちゃん…………」

「わっ、何だ、起きてたのか？」

思わず驚いて声をあげたが、その直後にまたすやすやと寝息が聞こえて来た。

「何だよ寝言かよ。…………て、寝言!？」

言っておくが、彼女に兄はいない。

彼女にとって“お兄ちゃん”と言えばまず俺の事だろう。

(寝言で俺を呼ぶなんて…………)

不覚にも可愛い、と思ってしまった。

目の前には無防備に眠る彼女の姿があり、見なれた筈のその姿は、酒に酔っているせいか、妙に色っぽく、俺を誘っているようにさえ見え…………。

「落ち着け俺！相手は酔っ払いだぞ？」

思わずどうこうしたい衝動に駆られた俺は、声に出して自分を叱責した。
いくらなんでも、酔って動けなくなった相手に手を出すとか、鬼畜の所業だろう？

実を言うと、あれから2カ月もの月日が経っているというのに、俺達はまだ“そういう関係”にはなれていない。

俺の部屋に彼女が泊まる事自体は珍しくない。だというのに、同じ部屋で夜を過ごしながら、今まで一度たりとて“そういう行為”に及べた試しが無い。

世の人から見ればかなり信じられない話だろうと思う。当の俺だって信じ難い。

しかしそれは紛れもない事実だ。

彼女が未成年だから、というのは建前で、本当のところ、俺は怖かった。

純真無垢な彼女を、俺の手で汚してしまうのが。

彼女は、あまりにも甘く危険な果実だ。口付けるだけで、痺れるほどの甘さで俺を酔わせる。手加減してやれる自信など、正直、ない。激情に負けて事に及ぼうとした俺の前で、彼女がその小さな身体を震わせるのを見た時、俺は激しい罪悪感に駆られた。

『せめて彼女にそういう覚悟が出来るまでは待とう』
そう心に決め、今に至る訳だが……。

「ん、んんっ……」

悩ましい声が、俺の鉄の理性を揺さぶっていく。

「ああもっつ、畜生、人の気も知らないで！」

半分やけくそで叫びながら、俺は床に増やされたソファークロケットに
身体を投げ出し、無理矢理目を閉じた。

Act・23「ひと時の戯れ」

……声が聞こえる。

「……ちゃん、お兄ちゃん」

ぼんやりする意識の中、俺はゆっくり目を開けた。

「あ、やっと起きた」

「……うわぁぁぁ!」

超至近距離で俺を覗き込む彼女の顔に、俺は思わず叫び声をあげた。

「何だ!? 何でお前がここに!」

戸惑う俺に、彼女は小さく溜め息を吐いて言った。

「それはあたしが聞きたいよ。何であたしここにいるの?」

彼女の言葉に、俺はぼんやりしていた頭をフル回転させ、なんとか記憶を手繰り寄せた。

(ああそうだ。昨夜コイツに呼び出されて……)

俺はようやく事の顛末を思い出した。

さっきの発言から察するに、目の前の彼女はどうやら昨夜の事を覚えていないようだ。

「お前、本当に昨夜の事覚えてないの？」

「うーん……。一人で飲みに行ったところまでは覚えてるんだけど……。」

「どうやら本気で忘れてるらしい。」

俺はある事を思い付き、大袈裟に溜め息を吐いた。

「はあ……。お前、そりゃないだろ。昨夜はあんなに激しく求めて来たくせに」

俺の言葉に、彼女の顔色がサーツと変わった。

「なな、何ソレ!? はは、激しく求めたって、ああ、あたしが!？」

物凄い勢いで動揺している彼女を前に、俺はダメ押しのように一際大きく溜め息を吐いて言った。

「まさか忘れちゃったとはね。悲しいなあ。俺、凄く嬉しかったのに。」

「……あ、あの……、あ、あた、あたし、ほ、本当にそんな事を？」

動揺のあまり口をぱくぱくしている彼女の様子に、俺は思わずぷつと吹き出し、大声で笑い出してしまった。

「ちよつ、ちよつと、何がおかしいの!？」

俺はひとしきり笑い、目に涙を浮かべながら答えた。

「いやー、悪い悪い。うーそ。冗談だよ。いくら酔ってたからって、お前がいきなり俺に迫る訳ないだろ。あはははは！」

たまらずに大笑いする俺に、彼女は恨めしげな視線を送って口をふくらませた。

「うぐぐ。酷いよお兄ちゃん！」

「悪い悪い。けどお前が悪いんだぞ、覚えてないとか言いだすから。まったく、昨夜俺がどれだけ苦労してお前をここまで運んだか・・・」

すると彼女は一瞬キョトンとし、やがてその顔色がサーツと青くなつた。

「ん？その顔は、思い出したみたいだな。大変だったんだぞー、まったく。何があったか知らんが、あそこまでなるほど飲むのは感心しないな。俺が行けなかつたらどうするつもりだったんだ？まったく・・・」

俺の言葉に、彼女は頭を垂れ、すっかり落ち込んだ様子で力なく呟いた。

「・・・ごめんなさい」

そのあまりの落ち込みように、俺はちよつと罪悪感に駆られ、彼女の頭をポンポンと優しく叩きながら声をかけた。

「ん、わかればよろしい。で、一体何があったんだ？お兄ちゃんに

言ってみなさい」

「……うん、えっと、あの……」

何やらとてつもなく歯切れ悪い様子で言葉を濁した彼女に、俺は優しく頭を撫でながら言った。

「お母さんの事か？」

瞬間、彼女の身体がビクツと震えた。

「どうして……」

「そりゃ分かるさ。大事な妹の事だからな」

優しく見つめた俺の目を、彼女は戸惑いながら見つめ返した。

「話して、いいの？後悔……しない？」

「ああ。もちろん、お前が話したくなければ無理には聞かないけど、な」

今になって思う。

この時が多分、最後のチャンスだったのだ。
無力すぎる俺が、それでも彼女を救える筈だった、唯一の……。
それに気付くのは、それからずっと、後の事だった。

Act・24「白い絶望」

結局彼女は何も話してはくれず、俺は彼女がいつものように笑って世間話に興じるのを見て、大した事じゃなかったんだな、なんて、暗に思っていた。

それが大きな間違いだったと思い知らされたのは、それから数日経った、どしゃぶりの雨の日の事だった。

Rururururu.....。

部屋の電話の音で、俺は目を覚ました。
時計を見ると午前1時。

やがて留守番電話の機械的なメッセージが流れ出し、ピーツという発信音の後に声が聞こえて来た。

『こちら藤乃宮市立病院です。笹宮さんのお宅でしょうか。さきほど樹本沙織さんがこちらに緊急搬送されました。ご本人の緊急連絡先にこちらの番号があったのでご連絡させて頂きました。これをお聞きになりましたら、すぐにこちらまで折り返しご連絡下さい。番号は.....』

そこまで聞いて、俺は慌てて飛び起きて受話器を取った。

「もしもし！沙織が、アイツがどうしたんですか!？」

電話の向こうの相手は、急に俺が出た事に一瞬驚いたようだったが、間違いなく俺本人だと分かると、すぐに冷静に話した。

『樹本さんはさきほどこちらに緊急搬送されて来て、今、意識不明

です。こちらに来られるようであれば、いらしてから詳しくご説明致します」

「分かりました！すぐそちらへ向かいます！！」

電話を切った俺はすぐさま着替えを済ませ、大急ぎで病院へと向かった。

(沙織！無事でいてくれ！！)

祈るような気持ちで車を飛ばし、深夜の街を駆け抜けた。

やがて目的の病院へと辿り着いた俺は、大雨の中、濡れるのも構わずバチャバチャと水たまりを跳ねさせながら走り、夜間の緊急外来入口へと急ぎ向かった。

「すみません！樹本沙織の搬送連絡を受けて来ました、笹宮です！沙織は、彼女は無事なんですか！？」

夜間受付のインターホンに向かい、叫ぶように言った。

『今鍵を開けます。お待ち下さい』

ガチャリ、と音がするなり、俺はドアノブを掴んで中へと滑り込んだ。

そのままバタバタと中へ駆け込んだ俺を、目の前の看護師が呼び止めた。

「ちょっと！院内は土足厳禁ですよ！」

俺はもどかしい思いで靴をスリッパに履き替えながら叫んだ。

「沙織は！？樹本沙織はどうなったんですか！？」

噛みつきそうな勢いで聞く俺に、看護師は至って冷静に答えた。

「落ち着いて下さい。命に別状はありません。処置室にご案内しますから、着いて来て下さい」

俺は看護師の案内に従って院内の廊下奥へと進んだ。

夜の病院は静まり返っており、俺達の足音だけが廊下に響き渡っていた。

やがて看護師は『処置室』と書かれた扉の前で止まり、廊下に設置された長椅子を指し示して言った。

「そこにかけてお待ち下さい。今、先生をお呼びしますから」

看護師は扉の中へ消え、残された俺はともその長椅子座って待つ気にはなれず、落ち着かない気持ちで目の前の扉を見つめていた。

(どうして彼女が！？本当に彼女なのか！？)

そんな疑問が湧き、何かの間違いならいいのと思わずにはいられなかった。

やがて部屋の中から白衣を来た医師が出て来て、俺はバツと駆け寄った。

「あの！沙織はっ、彼女は無事なんですかつ！？」

飛び付かんばかりの俺の勢いに、医師は一瞬戸惑いを見せたが、すぐに冷静な顔で口を開いた。

「あなたは樹本さんの御身内ですか？」

「いえ、俺は彼女の婚約者です」

とつさに嘘を吐いた。こういう時、ただの恋人では本当の事を話して貰えはしないという事を“一年前のあの時”に経験していたから。

「そうですか……」

医師は何かを考えるように目を伏せ黙り込んだ。

「先生！彼女は無事なんですか！？教えて下さい！！」

再び尋ねた俺に、医師は顔をあげ、口を開いた

「安心して下さい。命に別状はありません」

それを聞き、ようやくホッと息を吐き、幾分落ち着きを取り戻して医師に尋ねた。

「あの、一体彼女に何があつたんですか？」

「……樹本さんは、薬物とアルコールの過剰摂取、それに、手を切って出血多量の意識不明状態で搬送されて来ました」

冷たさが全身を支配した。

つまり、彼女は……。

薄暗い廊下の白さがやけに目に着く。

痛いぐらいの静寂の中、俺は茫然と、そこに立ち尽くしていた。

Act・25「母親」

指先まで感じる冷たさに、俺は軽い眩暈を覚えた。

「先生、それは、つまり……」

目の前の医師は、固い表情で俺をまっすぐに見つめた。

「……ええ。恐らく、樹本さんご自身が……」

ためらいがちにゆっくりと告げられたその言葉に、俺の心臓が跳ねた。

(彼女が、そんな……)

信じられなかった。信じたくなかった。

一体どうしてそんな事になったというのか。

「とにかく、今はもう処置も終わってます。意識はまだ戻りませんが、もう心配はないでしょう。会っていかれますか？」

俺は頷き、促されるまま処置室へと入った。

白いベッドの上に、彼女はいた。

「………!!」

目に入ったのは、酸素マスクを付けた青白い顔。白い腕に、幾重にも巻かれた包帯と、繋がれた赤いチューブ……。

「3針縫ってます。今はまだ、出来るだけ動かさないようにして下さい」

医師の声が、静かな病室に響いた。

俺は頷く事さえ出来ず、横たわる彼女を静かに見つめた。

「どうして……」

滴が頬を伝った。その時だった。

バンツ！！

処置室の扉が乱暴に開け放たれ、一人の女が入って来た。

「あんだ、誰？」

太った中年のその女性は、怪訝そうに俺を見てそう言った。

「え……、俺は……」

戸惑う俺を、女はジロジロとまるで品定めでもするように眺めた。

「ふうん。さてはアンタ、沙織の男だね。まったく、役にも立たないくせに一人前に男がいるなんて、生意気にもほどがある」

沙織を一瞥し、嫌悪丸出しの声でそう言った女に、俺は思わず声を荒げた。

「アンタ！一体何なんですか！？そんな言い方、コイツに失礼ですよー!？」

すると女は冷たい目でこちらを見つめ、吐き捨てるように言った。

「ふんっ！母親が子供を何と言おうが勝手でしょう？他人に口出しされる筋合いないわね」

俺は思わず息を呑んだ。

（この女が、沙織の母親！？）

確かに、その容姿はどことなく彼女に似ていた。

丸い輪郭、目鼻立ち、そこかしこに、同じ血が流れているのだろう事がうかがえる。

しかし、それにしても何処がおかしい。

女が沙織に向ける目はあまりに冷たく、意識不明の娘を心配する母親、というふうにはとても見えなかった。

「まったく、面倒をかけてくれるわ。よりもよって酒を飲んで外で面倒起こすなんて。あの男と大して変わりやしないじゃない。いつそ死んでくれればよかったのに」

「何てこと言うんだ！あんた、それでもコイツの母親か！？」

思わずギロリと睨みつけると、女は全く悪びれず、逆にこちらを睨み返して来た。

「ふんっ！こんな子、あたしが産みたくて産んだ訳じゃない。無理矢理産まされたんだから、育ててやっただけでも感謝して欲しいね」

その言葉に、俺は一瞬言葉を失った。

「……あんだ、まさかそれを、沙織に？」

「ああ。言ってやったよ。そしたらこの子、急に飛び出して。おまけに病院から連絡が来て、このザマさ。まったく、いい迷惑だよ」

瞬間、世界が真っ白になった。

身体中が冷たく、暗い感情に心が支配されていく。

「うおおおおおお！！！」

飛びかかり、抑え込んだ。

怯えた顔で叫ぶ女の悲鳴は、とても近くの筈なのに、遠くに聞こえた。

Act・26「悲しみの果て」

「笹宮さん！落ち着いて下さい！！！」

医師と看護師に取り押さえられ、俺は女から引きはがされた。

「何て人なの！いきなりこんな事するなんて！さすがこの子の男ね！最低だわ！！！」

女は醜く顔を歪ませて怒声をあげた。

「謝れ！沙織に謝れよ！あんたの所為でコイツは……！！！」

身体が熱い。感情の渦が押し寄せて、頬を滴が伝った。

「ふん！本当の事を言って何が悪いの？大体ね、この子が生活の面倒を見てくれるっていうからこっちに出て来たのに、大した稼ぎもなく我慢ばかりさせられて。これならあの男の所にいた方がよっぽどましだったわ」

言葉が、出なかった。

この世には、話しても通じ合えない人間がいるのだと、今更ながら思い知らされた。

目の前のこの女は、“母親”なんかじゃない。自分勝手な、ただの“女”でしかないのだ。

「……帰れ」

「は!?!?」

「帰れって言うてるんだ！！あんたに、この場にいる資格なんかない！！」

憤りが熱い滴となり、溢れて、止まらなかった。

「言われなくてももう帰るわよ！こんな目に遭わされて、いい迷惑だわ！まったく・・・」

女は散々悪態をつきながら処置室を出て行った。

残された俺は、まだ目覚めぬ彼女の手を握り、力なく呟いた。

「沙織・・・ごめん・・・」

どうしてもつとちゃんと聞いてやれなかったんだろう。

コイツの出すサイン。薄々分かったた筈だったのに。俺は、気付かないフリしてたんだ。

自分から言わないなら、大した事じゃないんだろう。そんなふうに勝手に思いこんで・・・。

笑顔の裏で、彼女がいつも何を思っていたのか。それを考えると、胸が痛くて、たまらなかった。

「ごめん・・・ごめんな・・・」

ポトリ。

滴が、彼女の手に落ちた。
その時だった。

「・・・おにい・・・ちゃん・・・？」

ゆっくりと、目が開いた。

「沙織!!」

俺の呼びかけに、彼女はこちらを見て、泣きそうな顔で、力なく、言った。

「……ごめんね、おにいちゃん」

その瞳から滴が零れ、頬を伝った。

「何謝ってるんだよ。謝らなきゃいけないのは俺だ。お前が苦しんでるのに、ちゃんと聞いてやれなかった!ごめん、ごめん……」

頭を垂れた俺に、彼女はか細く呟いた。

「……ごめん……ね、あた……し、生まれて……来なければ、良かった……た、のに……」

途切れ途切れの言葉を聞いたその瞬間、俺は、横たわる彼女を掻き抱いていた。

「生まれて来なければ良かったなんて、言うなよ!お前がいなかったら、俺は……」

ぼろぼろと零れる滴が、とめどなく溢れ、流れた。
抱きしめた彼女の身体が小さく震え、嗚咽が聞こえた。

白に囲まれた部屋の中。俺は彼女を、いつまでも、抱きしめていた。
どしゃぶりの降る、雨の、夜だった……。

Act・27「約束」

あれから一週間の時が過ぎた。
あれからずっと塞ぎこんでいた沙織も、ようやく笑えるようになった。

あの後すぐ、あの女は入院中の沙織を残して実家へと戻ったらしいと医師から聞かされた。

一人残された沙織を、俺は毎日見舞いに訪れていた。

「沙織、どうだ調子は？」

俺が病室を訪ねると、沙織はぎこちなく笑った。

「お兄ちゃん、今日も来てくれたんだね……」

「当たり前だろう。良くなるまで毎日来るって約束したし、それに俺もお前に会いたいからな」

すると彼女は顔を赤くして微笑んだ。

「お兄ちゃん……。ありがとう……」

「でも、今日もすぐ行かないといけないんだ。悪いな、いつも長居出来なくて」

本当はずっといてやりたい。けれど、今はまだ、何とか仕事の調整をつけてほんの少しでも顔を見せに来るのが精一杯の状態だ。

“一年前のあの時”に選んだ選択肢を、今更ながら悔やむ。

あの時はもう、アイツ以上に大切に思えるものなどないと思ってい

た。
だから俺は……。

「ううん、いいの。来てくれるだけで嬉しいから」

つい暗い顔をしてしまった俺に、彼女は遠慮がちに笑いかけてくれた。

「沙織……。ごめんな……。」

「謝らないで。こうしてお兄ちゃんに会えるだけで、あたし、凄く幸せなんだから」

彼女の怪我は順調に回復している。問題なのは、怪我よりも心の傷の方だと医師は言っていた。

彼女は、実家にいた頃から母親に度々虐待を受けていたらしい。

それでも彼女は、母親が自分に辛くあたるのは全部自分の為なんだと言いつつ聞かせ、誰にも言わずに堪えて来たのだという。

彼女はただ、母親に愛されたいだけだった。その、子供として当たり前の感情を、あの母親は全く理解しようとせず、長い間虐待を繰り返したあげく、彼女にあのどうしようもない言葉を投げつけたらしいのだ。

『あんななんて、産みたくて産んだんじゃない。仕方なく産まされたのよ』

それを聞いた時、俺は思わずあの母親に対する怒りで我を忘れそうになった。

母親を慕い、酒に酔っては暴力を振るう父親から救い出してやりたい一心で一年間必死に節約してお金を貯め、ようやく母親を呼び寄

せた彼女の想いに対する、その見返りがそんな言葉だなんて、あんまり酷過ぎる話じゃないか。

俺がその場にいたなら、即刻あの女を殴り倒していただろう。

彼女が酔い潰れたあの夜に何があつたかも聞いた。

あの日彼女は、あの母親が吐く暴言に耐えきれず逃げ出したのだという。

あの母親は、自分がどれだけ苦勞してきたかを切々と語り、沙織がいなければさつさと別れて離婚出来たのにと零したらしいのだ。

それを言われた時の彼女の心情を思うと、胸が張り裂けそうだった。

どうして彼女だけがそんな思いを味わう必要があるのだろうか。

最初の子で、男じゃなかったから。

ただそれだけの理由で、蔑まれ、存在の全てを否定された。

それはどれほどの痛みだったろう。

彼女がどれほど傷付き、苦しんだか。

俺はそれを想像するだけでもう、いたたまれない気持ちになった。

笑顔の裏に隠された彼女の深い悲しみと苦しみ……。

「ねえお兄ちゃん」

ふいに彼女が声をかけて来た。

「ん？どうした、沙織」

「あのね、お願いがあるの」

「お願い？何だ、言ってみな」

「うん、あのね、今度、山に連れて行って欲しいの」

遠慮がちな彼女の申し出に、俺は二つ返事でOKした。

「じゃあ、退院したらすぐ山に行こう」

「うん！楽しみだな。あたし、お弁当作って行くね」

彼女が笑った。久しぶりの、明るい笑顔だった。

「弁当か。それは楽しみだな。お前の料理、地味に美味しい」

「あー、地味って何よ、もう、お兄ちゃんてば！」

少し頬を膨らませてそんな事を言う彼女は、それでも楽しそうで、俺はようやく胸をなで下ろした。

「あはは。悪い悪い。褒めてるんだよ。家庭的な料理が美味いって、重要だろ」

「うーん、それならいいけど」

「そうだよ。俺と一緒にになったら、毎日料理作ってもらうんだからな」

俺の言葉に、彼女がポツと頬を染めた。

「い、一緒になったら？」

「ああ。お前と一緒に暮らして、毎日下らない事で笑いあって、たまには喧嘩して、またすぐ仲直りして。子供は、2人くらいかな。」

男と女、どっちでも、元気ならそれでいい」

彼女と二人で築く幸せな家庭を夢見て、俺は思わず顔を綻ばせた。

「……お兄ちゃん」

瞳を潤ませた彼女を、俺はそっと抱き寄せた。

「結婚しよう、沙織。今じゃなくてもいい。お前が落ち着いたらでいいから……な」

彼女は何も言わず、ためらいがちに俺の背に手を回した。

俺は彼女の頭を優しく撫で、そっと唇を塞いだ。

窓から見える病院の庭からは、鈴虫の声が聞こえ始めていた。

Act・28 「秋晴れ」

その日は紅葉狩りに相応しい、素晴らしい快晴だった。
俺は彼女を連れ、愛車のハイエースで山へ向かった。

「晴れてよかったな」

そう言うと、彼女はにっこりと嬉しそうに笑って頷いた。

山に向かう道すがら、俺はどうでもいいような笑い話をして彼女を笑わせた。

傍目から見れば、彼女はもうすっかり元気に見える。

しかし彼女のサポーターで隠された手首には、あの時の傷跡がくつきりと残っている。

それはあまりに痛々しく、彼女もしきりに気にするので、俺はすぐにそれを隠せるサポーターを買って来てプレゼントしたのだ。

それは白地に青のロゴが刺繍されたシンプルなパイル地のやつで、スポーツ用品売り場で見付けた物だった。

彼女に見せると、少しだけ複雑な笑みを浮かべ、小さく「ありがとう」と言っただけで腕に着けてくれた。

「ねえお兄ちゃん、今から行く山って、けっこう人いるの？」

彼女の問いに、俺は車を運転しながら答えた。

「いや。俺が知ってる穴場のとこだから、滅多に人は来ないよ」

今日行こうとしているその場所は、普通の人が訪れるような渓谷ではなく、俺の仕事相手の農家が所有している個人の山であり、好きな時に登って構わないと許しを貰っていた。

彼女と出会うまで、自分の時間を潰して仕事の付き合いを出来るだけ広げて来ていた事が、こんな形で役に立つ日が来るとは。

「本当！？じゃあ、二人でゆっくり出来るね！」

二人でゆっくり・・・。

思わず黙りこんだ俺に、彼女が慌てたように言った。

「あ、あの、ふ、二人でゆっくりって言っても、そういう意味じゃ・・・」

顔を赤くした彼女に、俺は思わず口の端をあげた。

「ん、そういう意味ってどういう意味かな？」

「やだ、ちょっとお兄ちゃん、何かやらしいよ、その笑い方！」

「ははは。今頃気付いたのか？言っておくが男は皆やらしいんだぞ」

「開き直った！！やだもう、知らない！！」

ブイツと窓の方を向いてしまった彼女に、俺は笑いながら言った。

「悪い悪い。冗談だよ。お前があんまり可愛い事言うから、ついからかいたくなっただけだってば」

「う〜。もう！お兄ちゃんてば、いっつもそうなんだから」

そこで丁度信号に差し掛かり、車が停まった。

「悪かったよ。な、ちょっとこっち向いて」

「え？」

彼女がこちらを向いた瞬間、その唇を塞いだ。

「……………んっ、んんっ！！」

彼女の口から、熱い吐息が漏れる。

やがて信号が変わり、前の車が発進する気配を感じるまで、俺はその柔らかい感触を楽しんだ。

「……………もう、お兄ちゃんのバカ」

俺から解放されて呟いた彼女の照れ顔は、これ以上ないくらい可愛かった。

俺はまた衝動に駆られ、次の信号待ちで彼女の顔を強引にこちらに向けて唇を塞いだ。

「……………んっ、んんっ！！」

漏れる熱い吐息が、甘い痺れを誘う。

引き返せなくなる前に、と名残惜しいまま唇を離れた時、彼女はまた小さく呟いた。

「……………バカ」

頬を朱に染めながら拗ねる彼女を、俺はこの上なく愛しく思っていた。

Act・29「彩りの中で」

やがて車は目的の山に着き、俺と彼女は人のいない静かな山道を二人で登り始めた。

「わあ、凄い！綺麗だねえ！」

赤や黄色に色づいた木々を見て、彼女はキラキラと目を輝かせている。

「ああ。これだけ色づいてると本当に見ごたえがあるな」

「うん。それに、土と水の匂いがする」

彼女は嬉しそうに目を閉じ、深く息を吸い込んだ。

「もう少し行ったら昼にしようか。いい場所があるんだ」

俺は彼女を連れて再び道成りに歩き出した。

「ほら、あそこだよ」

道の先に見える丸太の橋と川を指して言った。

「わあ、綺麗な川！！」

「だろ？さ、川辺に降りてお昼にしよう」

「うん！！」

草の生えた土手を慎重に下り、俺達は川辺へと降り立った。ごつごつした石に囲まれた小川は、陽の光を反射してキラキラと輝いている。

さすが自然の中の川だけあって、その流れは澄んでいて、小さな魚がそこかしこに泳いでいるのが目に入った。

「うわぁ、魚だよ魚！凄いい！何か地元の山に帰って来たみたいない気分だよ」

彼女は懐かしそうに目を細めた。

「あ、そうだ。せっかくだから写真撮ってやるよ、ほら」

俺は持参したポラロイドカメラをバッグから出して見せた。

「わぁ！凄いい！！準備いいね！」

「ほら、そこに立って、笑って。ハイ、チーズ！」

パシャッ！！

ポラロイドの写真がジーツと音をたてて出て来た。

「出来たぞ。ほらこれ、やる」

俺は出来あがった写真を彼女に手渡した。

「ありがとう。大事にするね！」

彼女は、写真を見て嬉しそうに笑った。

「よし。じゃあ、お昼にしよう」

俺達は川辺の大きな石に腰かけて昼食を食べる事にした。

「じゃん！どうだ！！」

差し出されたぎっしりおかずの詰まった弁当箱を見て、俺は感嘆の声をあげた。

可愛いしい俵おにぎりに、ふつくらつやつやの卵焼き、唐揚げに、豚肉の生姜焼き、アスパラベーコン、ポテトサラダetc・・・。

「凄いな。これ全部お前が作ったの？」

「勿論！ふっふっふ。凄いでしょ。さ、食べて食べて」

どれにしようか迷いつつ、まずは好物の唐揚げを箸でつまんで口に入れた。

「んっ！これは美味しい！お前、いい奥さんになれるな」

「奥さん・・・」

ポツと顔を赤くした彼女を見て、俺は一旦箸を置いた。うつむいた彼女の顎をくいと持ち上げ、その唇を塞いだ。

「・・・んっ、ふっ・・・」

熱い吐息が漏れる。

甘い痺れが全身を駆け抜け、あっという間に熱を帯びて行く。歯列を割って内側へと入り込み、彼女のそれへと絡ませ、その身体を抱き寄せた。

拙いながらも懸命に応えようとする彼女のそれは心地よく、気を抜くとこちらの方が持たなくなりそうになってしまふ。

もつと味わいたいという本能をおしのけ、俺は無理矢理理性を総動員して身体を離れた。

「……もう、終わり？」

熱を帯びた瞳でそんな事を問いかける彼女に、俺は一瞬クラリとして、けれど平静を装って答えた。

「これ以上はお預け。弁当食べたら山降りるぞ。連れて行きたいところがあるんだ」

「え？どこに？」

「内緒」

俺はニヤリと笑って再び弁当を食べ始めた。

Act・30「海辺の丘」

山を後にした俺達は、再び車を走らせていた。

「ねーえ、一体どこに行くの？」

「着いてからの楽しみ」

そんなやりとりをしながら、車は滑るように街の中を進んで行った。それから数時間後、もうすぐ陽も落ちるといふ頃になって、ようやく目的地へとたどり着いた。

「ほら、着いたぞ。降りて」

そこは、海が見える丘に建つ別荘だった。

白い壁と紅い屋根の、飾り窓が可愛い小さな一軒家だ。

シーズンオフだからか、周囲には車はおろか人も全く見えない。

俺は手にした別荘の鍵で扉を開けた。

「どうした？入れよ」

「う、うん……」

何やら緊張した面持ちの彼女を、中へと促した。

ピカピカに磨きこまれた床に、ぱちぱちと赤く燃える暖炉。

置かれた家具は俺の趣味でイタリアから取り寄せたオーダーメイドで、この部屋に合わせた小さめの寸法で仕上げて貰っている。

オープンキッチンの台所は埃一つなく、ピカピカに磨きあげられている。

使わない間もきちんとハウスキーパーを頼んでおいた甲斐があったようだ。

「ここって……」

戸惑い気味の彼女に、俺はにっこりと微笑みかけた。

「ああ。俺の別荘。しばらく使ってなかったんだけど、管理はお願いしてあるから、ちゃんと掃除はしてあるし、安心して使っているから」

「そ、そうなんだ……」

俺の言葉に、彼女はぎこちなく頷いた。

「どうした？ここいうところ、キレイだったか？」

「え！？いや、そうじゃなくて、その、ビックリしたっていうか……。別荘なんて持ってたんだね、お兄ちゃん」

「ああ。別にこれくらい、大したもんじゃないよ。こんな小さいやつくらい、誰でも持つてるんじゃない？」

「だ、誰でも!？」

鳩が豆鉄砲を食らったような驚きの表情を浮かべた彼女に、俺は少しだけ考えを巡らせた。

(ちょっと待て。この反応。もしかして、あんまり喜んでないんじゃないか?)

「あの、お兄ちゃん、もしかしてお兄ちゃんて、すっごいお金持ちさんだったりするの？」

何やら遠慮がちにそんな事を尋ねられた。

「いや、別にそこまで金持ちじゃないよ。どうして？」

「だって、別荘とかって、普通、個人で持ってないと思うから」

「ああ、そういう事か。いや、ここは安かったから買っただけで、幾つも別荘持つてる訳じゃないよ。お前の給料でも買えるんじゃないかな」

すると彼女はほっと溜め息を吐いた。

「なあんだ。そうだったんだ。でも安いって、いくらくらいだったの？」

「んー。たしか、中古で土地込みの1000万円かな」

「いいい、一千万円!？」

「いい値段だろ。普通ならもつと高いからな。それよりお前、お腹減ってないか? ダイニングの方に食事用意しておいてくれるよう頼んでおいたんだけど・・・。お、あつた」

ダイニングテーブルの上には、美味しそうなオードブルがズラリと並んでいた。

「手を洗って、食事にしよう。あ、洗面台はこっちだから」

彼女を伴って洗面所へ移動し、二人で手を洗ってからダイニングへと戻った。

「さ、お嬢さん、こちらへどうぞ」

椅子をサツとひき、彼女を席へと促した。

「あ、ありがと……」

彼女が席に座り、俺はその向かい側の席へと着いた。テーブルに用意されたシャンパンを開け、グラスへと注ぐ。

「さ、グラス持って」

俺に促される形で、彼女はスツとグラスを持って掲げた。

「乾杯！」

シャンパングラスなので、カチンと合わせる事はせず、ただ互いの目の前に掲げるだけに留まらせて口に含ませた。

芳醇な味わいが口の中に広がり、俺はふーっと感嘆の声を漏らした。目の前には彼女がいる。

俺は、幸せな気持ちでいっぱいだった。

Act・31「無自覚な身分差」

幸せに浸る俺の目の前で、彼女はグラスを持ったまま何やら浮かない顔をしていた。

「あ、シャンパン、飲めないようだったらジュースもあるよ？何がいい？オレンジ？リンゴ？グレープフルーツもあるし、あと、ミネラルウォーターも何種類かあるけど？」

「……あ、ううん、大丈夫だよ」

「そうか？あ、ほら、料理も食べて食べて。今日はお前が弁当作ってくれたお礼なんだから、遠慮なくドンドン食べてくれよ」

「あ、うん、ありがとう……」

何やらこう、歯切れの悪い感じで礼を述べた彼女は、おずおずと目の前のグラスに口をつけ、それからフォークとナイフを手にし、料理に口を付けた。

「あ……、美味しい！」

「だろう？このハウスキーパーの三輪さんは、掃除は勿論、料理の腕も抜群なんだ」

思わず笑みを漏らした俺の前で、彼女はフォークとナイフを持っていた手を止めた。

「あの、さっきから気になってたんだけど、その、ハウスキーパー

さんって……」

「ん？ああ、俺がいない間この管理をお願いしてる人だよ。いつもはここを利用する時に一緒にいてもらうんだけど、今日はお前と二人でいたいから席外してもらったんだ」

「そ、そうなんだ……」

「ん？どうした？何でそんな顔してるんだ？」

どことなく暗い表情を浮かべている彼女が心配になって尋ねた俺に、彼女は曖昧な笑みを浮かべた。

「な、何でもないよ」

「何でもないって事はないだろ。そんな顔して。何だ？何かあるなら遠慮なく言っていんだぞ」

「えっと、その……」

言い淀む彼女に、俺は優しく微笑みかけた。

「ん？どうした？遠慮しないで言ってごらん」

「う、うん……。あの、あのね、ハウスキーパーさんって、いつもはずっとここにいて掃除とかしてるの？」

「うん？いや、普段は通いで来てもらってる地元の人だよ。それがどうかした？」

「えっと、あの、それってつまり、お兄ちゃんがここにいない間、わざわざ毎日掃除しに来て貰ってるって事？」

「ああ、そうだけど……」

すると彼女は、何かを考え込むように黙り込んでしまった。

「あ……。何？ハウスキーパーさんに来て貰ってる事がどうかしたのか？」

「ううん！な、何でもないの！気にしないで！こ、これ美味しいねえ。どうやって作るんだろ？」

妙に焦ったように話題を転換した彼女に、俺は若干違和感を覚えた。

(何だ？彼女の態度、さっきからちょっとおかしくないか？)

ここに着いた時の事もそうだが、ハウスキーパーの話をした時のあの反応……。おかしい。どう考えても何か変だ。

「なあ、お前、何か変な事考えてないか？」

「えっ！？う、ううん、そ、そんな事ないよ？」

確定だ。間違いない。この態度は、絶対変な事考えてるに違いない。

「なあ、正直に言えよ。一体何を考えてるんだ？」

「えっと、その……」

「正直に言わないなら……」

俺は彼女の座っている席の方へ回り込み、その顎をクイツと掴んでこちらを向かせた。

「……っ！」

「素直じゃないのはこの口か？ん？」

「あ……っ！」

彼女は何かを口にしようとしたけど、結局何も口に出来ずに終わった。

次の瞬間、俺に顎を掴まれて上を向かせられ、強引に唇を塞がれていたのだから。

Act・32「疑惑」

「ふっ……んっ……!!」

彼女の口から漏れる熱い吐息が、俺を甘い痺れへと誘う。

ささやかな力で抵抗を試みた彼女の腕はあっさりと俺に掴まれ、ろくに動く事さえ叶わずにふるふると震えている。

それは俺の情欲を激しく掻き立て、むしろ行為を激しいものへと変える材料になるだけだった。そのまま歯列を割り、強引に中へと滑らせ、彼女のソレと絡ませ、ねっとり味わう。

シャンパンの芳醇な香りが残る口内を、余すことなく隅々までじっくりと蹂躪していく。

「んっ……ふっ……」

零れる吐息が甘さを増した所で、俺はようやくその唇を解放した。

「はぁ……はぁ……」

荒く息を吐く彼女に、俺はにっこりと微笑んだ。

「素直に話す気になった？」

「う……」

まだ言い淀む彼女に、俺はとどめの笑顔を向けて言った。

「んー、まだお仕置きが足りない？仕方ないなあ。それじゃあ次は、その身体にみっちり聞こうとしようか」

彼女の両腕を片手でがっしりと掴み、もう片方の手を衣服にかけよ
うとした俺に、彼女は必死な形相で懇願した。

「わぁあん、ごめんなさい！言います！言います！もうやめて！さ
すがに食卓でこれ以上は・・・」

ちよつと涙目になった彼女を見て、俺はようやく掴んでいた腕を離
した。

「冗談だよ。いくら何でもこんなところでこれ以上する訳ないだろ」
にっこり笑うと、恨めしそうな目で睨まれた。

「う。お兄ちゃんの意地悪！」

「あつはつは。お前が素直に言わないのが悪い。で、俺の大事なお
嬢さんは、一体何を考えてたのかな？」

意地悪な目をやめて優しく微笑んでやると、彼女は小さく溜め息を
吐き、ようやく決意したように口を開いた。

「・・・ん、あのね、お兄ちゃんとあたしって、何だかちよ
つと住んでる世界が違ってたって思ってた」

「はぁ!?!」

思いつきり素っ頓狂な声を出してしまった。

「何かこう、セレブリティっていうか、庶民な感覚じゃないってい
うか。正直、ちよつと、遠いなって・・・」

「何だよそれ!？」

「だ、だって、普通は専属のハウスキーパーさんはおるか、別荘だつて持つてないよ!しかも一千万円が安いとか、有り得ないから! ！大体、ウチの会社の給料で、しかもお兄ちゃんの年でそんなの、聞いた事もないよ!お兄ちゃん、本当にウチの会社の人なの!？あ、それともまさか、実は裏で危ない仕事してるとか!？」

疑惑に満ちた目を向ける彼女に、俺は至って冷静に答えた。

「別に怪しい仕事はしてないぞ。ただ……」

「ただ？」

「……次期社長として会社経営陣に加わってるだけだ」

「なあんだ、そうだったんだ、会社経営陣に……て、えええー
——!？」

驚愕の声が、ダイニングに響き渡った。

A c t ・ 3 2 「 疑 惑 」 （ 後 書 き ）

< 作者より一言 >

最近の一日のユニークアクセスが40件を超え、お気に入り登録が8件となり、読者様への感謝につきません。

いつも読んで下さっている皆様、本当に有難うございます。

この場を借りてお礼申し上げます。

見るに堪えない駄文かもしれませんが、宜しければまたお時間のあ
る時に読みに来て頂けたら幸せに思います。

今後ともどうぞ宜しくお願い申し上げます。

Act・33「驚愕」

「じじ、次期社長って、お、お兄ちゃんか!？」

驚きの表情でどもる彼女をよそに、俺は極めて冷静に答えた。

「ああ。俺、一応現会長の孫だからね。子会社の一つは俺が権利を持つてるんだ。今はまだ外部に委託してるけどね。あ、これ、社内でもごく一部の役員しか知らない情報だから、他言はしないよう頼むな」

何やら口をばくばくさせている彼女を前に、俺はどうしたものかと考えあぐねた。

まさかここまでショックを受けられるとは……。

「なあ、俺が普通の会社員じゃなかったのって、そんなにショック？」

「え!？あ、ショックっていうか、その、ビックリして……」

「俺の事、キライになった？」

「き、キライになんて、そんな事あるわけ……!」

そう言って勢いよく立ち上がった瞬間、彼女の傍らにおいてあったバッグが下に落ち、中身が勢いよくぶちまけられた。

ガシャン!!

音をたて、携帯電話が床へと落ちた。
瞬間、携帯電話の裏についた電池パックの蓋が勢いよく外れてしま
った。

「あ……………」

彼女は慌ててそれを拾い上げたのだが、そのまま動かなくなっ
てしまった。

「ん？どうした？」

そばに歩み寄った俺の前で、彼女は手に持ったそれを凝視したま
まボソリと言った。

「お兄ちゃん……………」

「ど、どうした？」

何やら重い気配を感じ、戸惑いながら尋ねた俺に、彼女は手にした
蓋を俺に突き出し、低い声で言った。

「……………これ、何？」

そこには、一枚の小さなプリクラが貼られていた。
幸せそうな顔で肩を組む男女の。

その下には、『2008.3.10 イチ？カヨ 婚約記念』と書
き文字されていて……………。

「どづいう……………事かな？」

うつむいたまま発せられた彼女の低い声に、俺はサーツと血の気が引いた。

「これって、お兄ちゃんだよな？どうして？お兄ちゃん、婚約してたの！？」

「それは……………」

思わず言い淀んだ俺の前で、彼女の瞳が潤んだ。

「あたしに結婚しようって言ってくれたのは、嘘だったの？答えて！お兄ちゃん！！」

「違う！嘘なんかじゃない！」

「だったら何で！？この彼女はどしたのよ！？」

「死んだんだよ！！」

カラン……………！

彼女の手から零れ落ちたプラスチックの蓋が、硬い音を立てた。

「死ん……………だ……………？」

「……………そうだよ。カヨは、もう一年も前に死んでるんだ」

俺は声を落とし、静かに言った。

出来ればこんな形で話したくはなかったんだが、この状況では仕方がない。

「ちゃんと話すから、まずは座って」

俺は茫然とする彼女を椅子に座らせた。

その隣の椅子を引き、腰かけた俺は彼女の目をじっと見つめて口を開いた。

「アイツ、カヨと出会ったのは、もう5年も前の事だ」

俺は、静かにその時の事を話し出した。

Act・34「邂逅」

それは、会社に入って最初の配属日だった。

「君が今度配属されて来た新人君？えーと、笹宮 一君？」

声をかけて来たのは、えらい美人な女性だった。

二重瞼に、ぱつちりとした瞳、長いまつ毛、綺麗に整えられた眉に、スツと通った鼻筋。唇はまるで形の良い花弁のようで、しつとりとした艶を持ち、紅く煌めいていた。

真っ白なきめ細やかな肌に、ほんのり薔薇色の頬が色っぽくて。艶やかな黒髪はきつちりと結びあげられ、白いうなじが美しい。

技術開発員が身につけるグレーの地味な作業服でさえ、彼女の前ではその凛とした美しさを引き立てる材料に変わっていた。

「あ、あの……貴女は？」

「あたしは杉崎。杉崎 加代子。今日から君の指導を任されてる職場先輩よ。よろしくね、イチ君」

「……あの、俺、はじめです。笹宮 一」

戸惑いがちに名前の読みを正すと、彼女はカラカラと豪快に笑ってこう言った。

「なあんだ、そつかあ。はじめ君……うーん、イチ君の方が呼びやすいな。ねえ、イチ君と呼んでいい？私の事は“カヨ先輩”でいいから」

「ハ、ハイ！」

一目惚れというものが本当にあるのだと知った。

カヨ先輩は仕事に厳しく、けれど優しく、そしてやっぱり、綺麗な人だった。

一挙一動が美しく、何をしていても絵になった。

美しく仕事も出来る先輩の姿に、俺はますます惹かれていった。

出会いから1カ月後、先輩からの直接指導が受けられる新人特別指導期間が終わる日、俺は先輩と二人で行った打ち上げの席で告白した。

「カヨ先輩！俺と付き合ってください！！！」

カヨ先輩は一瞬驚いた顔をして、それからにつこり笑ってこう言った。

「あたしと付き合いたいなら、もっと仕事が出来るように頑張って貰わないとね」

それから俺は、がむしゃらに頑張った。

先輩に認められたくて、必死に勉強して、色々な情報を積極的に収集して、自分の仕事に取り入れて。試行錯誤を繰り返し、失敗と成功を繰り返して。

そうして半年後、気が付くと俺は、若手のホープとして、部内の誰もが一目を置く存在にまで成長していた。

「笹宮、このプロジェクト、採用だ。お前がリーダーとしてやってみる」

「有難うございます！！！」

俺が発案した新しい技術開発プロジェクトが採用され、部長のゴースインの元、開発期間3年をかけた新規開発プロジェクトのリーダーとして仕事を進めて行く事になった。

その日の夜、俺は「報告がある」とカヨ先輩を呑みに誘った。

「カヨ先輩！俺、今度プロジェクトリーダーやる事になったんですよ！」

「嘘！？ホントに！？凄いじゃないイチ君！！おめでとう！！頑張ってるね！！」

それから二人で散々飲み明かした帰り道、俺達はちよつと一休みと公園のベンチに座った。

「いやあ、それにしてもイチ君凄いよねえ。たった半年でプロジェクトリーダーなんて！うう、ちよつと悔しい。あたしなんて3年ばかりだったのに。このこのお！」

茶化して笑いながら俺を小突く先輩を前に、俺は真剣な顔で切り出した。

「先輩、ちよつと真面目な話があるんですけど、いいですか？」

「え、真面目な話って……」

先輩は小突くのをやめ、ちよつと緊張した面持ちでこちらに向き直った。

「カヨ先輩、この半年、頑張ってたのはカヨ先輩のおかげです。」

貴女に認められたい。貴女が隣にいて、恥じない男でありたい。そう思つて頑張つて来たんです。貴女がいたから頑張れた。俺は、貴女に隣にいて欲しい。仕事だけじゃなく、プライベートでも。ダメですか？」

するとカヨ先輩は華のように笑つてこう言った。

「イチ君、いきなりプロポーズは困るわ。私まだ結婚するのはちよつと……」

「プ、プロポーズだなんて！俺、そんなつもりじゃ……」

「じゃあ、どんなつもり？」

茶目つけたつぷりの笑顔で言うカヨ先輩に、俺は真っ赤になつて言った。

「俺と……付き合つて下さい！！」

「いいわよ」

にっこり笑うカヨ先輩に、俺は思わず尋ねた。

「それって……、オツケーって事ですか？」

「勿論。気付かなかつた？あたしもずっと君の事、好きだつたんだからね！」

瞬間、俺は先輩を抱きしめていた。

「いやったあああー！ー！ー！！！」

「ちよつ、イチ君！もう！！！」

困ったように笑う先輩の身体を離し、俺はその目をまっすぐ見つめながら言った。

「好きです。先輩！」

瞬間、俺の唇に先輩の柔らかな唇が重ねられていた。

驚く俺の前で、先輩はスツと唇を離し、耳元でささやいた。

「二人の時は“カヨ”って呼んで、ね」

「……か、カヨ」

戸惑いがちに名を呼んだ俺に、綺麗な微笑みが向けられた。

「よく出来ました」

先輩 カヨの唇が、再び重ねられ、俺は彼女を抱きしめた。

秋の寒ささえ気にならないほど、身体が熱かった。

空には満月が光る、静かな、夜だった。

A c t ・ 3 4 「邂逅」 (後書き)

< 作者のつぶやき >

ついにイチ君の過去編に突入です。

これまで詳しく語られなかった女性、カヨ。

彼女の人となりが読者様に少しでも伝えられればと思ってます。

最近お気に入りに入れて下さっている方も増え、アクセスも当初4

〜5人程度だったのが毎日何十人もの方が訪れて下さるようになり、

本当にうれしい限りです！

読者の皆様、本当に有難うございます！！

Act・35「幸福の先に」

カヨと付き合うようになって3年目。

俺達は周りが羨むくらいの中の良い公認カップルになり、もう一緒に暮らし始めていた。

時々喧嘩もするけれど、それも仲の良い証拠みたいなもので、すぐに仲直り出来た。

カヨと過ごす時は本当に楽しくて、幸せで、何もかもが輝いて見えた。

仕事の方も充実していて、俺が担当したあの3カ年の新規開発プロジェクトもようやく終盤となり、後は発表を待つだけという所までこぎつけていた。

「おめでどうイチ、ついに来週には一般公開ね」

「ありがとうカヨ。やっと俺も肩の荷が下りるよ」

二人の食卓で、ささやかなお祝いのシャンパンを開けながら、俺達は笑みを交わした。

「なあカヨ、俺さ、お前に渡したい物があるんだ」

「なあに？あらかたまって」

俺は、ポケットからベルベットの小さな箱を取り出し、パカッと蓋を開けた。

「これ、受け取って貰えないか」

「イチ、これ……」

中に入っていたのはキラリと光る美しいダイヤの指輪だった。

「結婚しよう、カヨ。これから先も、ずっと隣にいて欲しい」

「イチ……」

カヨは目を潤ませ、はにかみながら言った。

「……大好きよ、イチ。これからもずっと、そばにさせて」

「ああ。ずっと、一緒にいような」

スツと指輪をカヨの指に嵌めた。カヨの左の薬指で、キラリとダイヤが光った。

「愛してる……」

「私も……」

溢れる幸せの中、俺達は目を閉じ、唇を重ねた……。

事が起こったのは、そんな幸せな夜を過ごした数日後の事だった。

いつものようにオフィスで仕事をこなしていると、目の前の内線電話が鳴りだした。

俺はパソコンに向けていた手を止め、受話器をとった。

「はい、笹宮ですが」

『笹宮 ーさんですね?』

電話の相手は、よく通る透き通った女性の声だった。

「はい、そうですが」

『私は会長秘書の磯貝と申します。はじめまして』

会長秘書!!電話の向こうにいる相手を思い、背筋を正した。

「は、はじめまして!あの、一体今日はどんなご用件で?」

『はい。御忙しいところ恐れ入ります。最初に申し上げますが、この電話は極秘事項です。この電話が私からだということも含め、内容は決して誰にも口外しないと御約束願えますか?』

「は、はい……」

極秘事項。その言葉に、俺はゴクリと唾を飲んだ。

『では本題に入りましょう。実は、会長が貴方に内々にお話があるとの事です。もし宜しければ、これから会長室までお越し頂けませんかでしょうか?』

「わ、解りました。すぐに参ります」

『くれぐれも内密に。行き先を尋ねられたら、監査部の査定だ、と

答えておいて下さい。監査部には通達がいつてますので、問題ありませんから』

「り、了解しました」

『では、まずは本社ビルの第10会議室までお越し下さい。私がお迎えにあがりますので』

電話を切った俺は、その足ですぐさま本社ビルへと向かった。

俺が勤めているのは技術開発棟で、技術開発員が終結した、いわば開発の為の特別施設だ。

会長室があるのは本社ビル。技術開発棟からは社内バスで10分ほどの距離にある、新しい大きなビルだ。俺も打ち合わせなどでよく足を運んではあるが、会長室に呼ばれたのはさすがに初めてである。

(一体何の為に？まさかここに来ていきなりプロジェクト中止とか！?)

しばらく考えながら歩いている内、目標の本社ビルへと辿り着いてしまった。

「お疲れ様です。第10会議室で打ち合わせなんですが……」

受付に申し入れると、鍵は既にかけてある、との返事が返って来た。俺は不安なまま歩を進め、ロビーから更に奥に進んだところにある第10会議室へと向かった。

「……ここだな」

【第10会議室】のプレートを見て、俺は深呼吸をした。

これまで何度も打ち合わせに使った事があるここは、外部に声を漏らさない為の完全防音会議室だ。

見なれたドアを見つめ、俺は緊張しながらノックをした。

普通なら返事を待つところだが、ここは内側からの声は聞こえないので、俺はいつものようにきっかり10秒待ってからドアを開けた。

「失礼します」

ドアを閉め、一礼してから顔をあげた。

「お忙しいところお呼びだてしてすみません。あらためて初めまして、会長秘書の磯貝と申します」

そこに立っていたのは、きりりとした美しい顔立ちの女性だった。セミロングの黒髪、長いまつ毛、整えられた眉に、通った鼻筋。けして派手ではなく、美しく控え目にほどこされた化粧に、かっちりとしたグレーのスーツ。黒ぶちの眼鏡がまた、彼女の理知的な美しさによく似合っていた。

「……は、初めまして。笹宮です」

「早速ですが、会長室にご案内致します。着いて来て頂けますか？」

「は、はい……」

戸惑いながら頷くと、彼女はにっこりと笑い、会議室のドアを開けた。

A c t ・ 3 6 「未知の扉へ」

カツカツとヒールの音が響く。

俺は彼女の先導に従い、本社ビルの中を歩いていた。

「あの、磯貝さん」

「はい、なんでしょう？」

振り向いた彼女に、俺はおずおずと尋ねた。

「どうして俺を？その、プロジェクトの事で何かあったんでしょうか？」

彼女は申し訳なさそうに答えた。

「申し訳ございません。私も詳しいお話は何っていないのです。ただ、お連れするように、とだけ仰せつかったものですから」

「そう、なんですか……」

不安を解消出来ずにうつむいた俺に、彼女はにっこり笑って言った。

「でも、恐らくその案件について、という可能性は低いかと存じます。会長の口からそのようなお話はうかがった事がございませんから」

「そうなんですか！？良かった……」

「ええ。ですからそんなに緊張なさらず、落ち着いていらして下さい」

彼女の言葉に、俺は幾分胸が軽くなり、ぎこちなくはあるが、笑みを浮かべて頷いた。

「では参りましょうか」

俺達は再び歩き出し、やがてエレベーターホール奥にある役員用エレベーターの前へとやって来た。

磯貝さんはエレベーターの前に設置された機械に胸から下げたIDカードをかざした。

するとピッと電子音が響き、閉まっていたエレベーターの扉が開いた。

「さ、どうぞ」

磯貝さんに促されてエレベーターの中に入ると、続いて彼女も中に入って来た。

彼女は、エレベーターを閉めると、中に設置された機械にふたたびIDカードをかざし、ピピッと電子音を確認してから、階数を示す【15】のボタンを押した。

ウィーンとエレベーター独特の機械音が鳴り、エレベーターが動き出す。

「大丈夫ですよ、そんなに緊張なならないで」

にっこりと笑いかけられ、俺は自分の顔が強張っていたのに気付いた。

「……あ、すみません。役員用エレベーターなんて、乗ったの初めてなもので」

「ふふ。そうなんです。でも、こうして乗っていると普通のエレベーターと変わりませんかでしょう?」

「ええまあ。セキュリティがしっかりしてるのは、やっぱり他のエレベーターとは違うんだなと思いますけど」

「そうですね。会長室のフロアは普段そんなに人はいませんから、もし悪い泥棒さんにも入られたら、私なんかあっさりやられちゃいますもの。これくらいセキュリティがしっかりしていて良かったですわ」

ふふ、と柔らかく笑う彼女に、俺は釣られて笑みが零れた。

「磯貝さんのように素敵な女性なら、泥棒でも虜になっちゃいそうですね」

「まあ嬉しい。ふふ……」

談笑を交わしていると、チンツという音と共にエレベーターが開いた。

「さ、どうぞ」

促され、俺はエレベーターの外へと出た。

続いて磯貝さんがエレベーターから出て来て前を歩きだした。

「こちらです」

カツカツとヒールの音が響く中、俺達は廊下を進み、ちょうど中ほどのところにある扉の前で彼女が足を止めた。扉の横に設置されたインターホンの受話器をとり、彼女は口を開いた。

「会長、笹宮さんをお連れしました」

ガチャツと金属音が響いた後、彼女は受話器を置き、ドアノブへと手をかけた。

「どうぞ中へ」

俺は緊張を隠せないまま、会長室の中へと足を踏み入れた。

Act・37「血縁」

「……し、失礼します」

緊張した面持ちで中へ入って頭を下げると、室内にいた人物が声をかけて来た。

「顔を上げなさい」

おずおずと頭を上げると、目の前の大きなデスクに初老の男性が座っているのが目に入った。

「君が、笹宮ささみや 一君かずきみかね？」

「は、はい！」

思わず上ずった声で答えた俺に、その人は穏やかな笑みを浮かべた。

「そう緊張しなくてもいい。ここには私と君しかいない。秘書にはしばらく人を通すなど言っている。ああ、もう少しこちらへ来てもらえるかね？」

「は、はい……」

近寄り、その姿を間近で見て、俺は内心驚いた。以前見た会社の記録が正しければ、会長はもう70になるうかという年齢の筈だ。しかし、目の前の男性は、そんな年にはとても見えないほど若々しかった。

切れ長の目、威厳を感じさせる男らしい眉、通った鼻筋に、きりり

とした口元。白髪の混じった髪はその豊かさを失う事なく後ろへと撫でつけられ、綺麗に整えられている。身に付けた濃紺のスーツは、恐らくどこかの高級ブランドの物なのだろう。パツと見ただけでも上質な素材である事が見て取れた。同色のネクタイはシルクのミックスタイだろう。光彩によって微妙に色を変えるそれは、高級感の中にキラリと光るセンスを感じさせた。

更に驚いたのはその風格だ。彼は、思わず無条件で平伏したくなるような気迫を放っていた。まるで幾多の戦場を勝ち抜いて来た歴戦の戦士のような、鋭く、激しい気迫。その顔には穏やかな笑みさえたたえられているにも関わらず、だ。思わず冷や汗を流した俺の前で、彼はゆっくりと穏やかに口を開いた。

「こうして顔を合わせるのは初めてだね。笹宮君。私は君が入社した時から、いつかはこうして話をしたいと思っていたんだよ」

「え！？私と……ですか？」

突然の言葉に驚く俺に、彼はなおも穏やかに言葉を続けた。

「ああ。君がこの会社に入って来ると分かった時、本当に驚いた。笹宮君、君の母の名は慶子けいこというのだろう？」

「は、はい。そうですが、それが何か？」

「君は、慶子から聞いていなかったのかね？私の事を」

「会長の事を、ですか？いいえ、母は私が幼い頃、父と共に事故で亡くなりました。会長のお話は、残念ながら一度も母の口から聞いた事はございません」

「そうか……」

呟くように言つて、彼はその微笑みを表情から消し、何かを考えるように黙り込んだが、やがて決意したかのように再び口を開いた。

「慶子はな、私の実の娘だ」

「！？」

驚きのあまり、言葉が出なかった。

(今、会長は何と……)

「もう30年近く前の事だ。慶子は旅行先の北海道で一人の男と知り合った。自動車の整備工場を営む、平凡な男だった」

静かに語る彼の声が、室内に響き渡る。俺は、聞いてはいけないよ
うな気がして思わず耳を塞ぎたい衝動に駆られながら、それでもじ
っと彼の声に耳を傾けていた。

「男の名は笹宮 一樹^{かず}。あろうことか、慶子はその男と恋に堕ち、
結婚したいと私に願ひ出た。許されないならば家を出る、と……」

身体が震えた。彼が口にした名前、それは、俺の……。

「そうして慶子は宣言どおり家を出た。以来、連絡一つとれず、その
ままでいたが、ある時君がここに入社して来た。人事部から提出
されて来た書類を見て驚いたよ。笹宮君、君はあの男、笹宮 一樹

と、私の娘、慶子との間に生まれた、ただ一人の息子。そして、私の、孫だ……」

稲妻のような衝撃が身体を走り抜けた。

「そんな、そんな事……！」

にわかには信じがたい言葉に、俺は戸惑いを隠せなかった。

「信じられないのも無理はない。しかし、これは紛れもない事実だ。入社時行った血液検査で、DNA鑑定も行わせて貰った。君は間違いない、血を分けた私の、実の孫なんだよ」

二人きりの室内に、彼の静かな声が、重く響き渡っていた。

Act・38「戦慄の時」

「そんな……そんな事、母さんや父さんは何も……」

掠れる声で言った俺に、彼は冷たさを含んだ声で言い放った。

「何も話していなかったか。君がこの会社に入って来ると分かった時、もしかや私に血縁者として名乗り出るつもりなのかと思っていたが、そうではなかったのだな」

その低い声に、俺は思わず気圧され、しかし何とか声を出した。

「……は、はい。俺がこの会社を選んだのは、まったくの偶然・です。他意があつての事では……ありません」

「そうか。時に笹宮君、今度発表される予定のあの新技術、君が発案し、プロジェクトリーダーを担当して来たそうだね」

急に声色を穏やかなものに変え、その顔に再び微笑みを浮かべた彼に、俺は戸惑いながらも懸命に気持ちを切り替え、真剣に答えた。

「……はい。私が発案、指揮をとって参りました。もともと、上司、先輩の方々に御尽力頂かなければ、ここまでこぎつける事は到底叶わなかったでしょうが」

「いや。周囲の力を得る事も一つの才だ。今度の新技術開発は、間違ひなく君の力によるものだ。誇りを持っていい」

「あ、有難うございます！」

「もし何も力のないただの社員で終わるようなら、このまま名乗らずにいようかと思っていたが、あの技術を君が開発したとなれば話は別だ。あれはこの先、我が社に数億単位の利益を生む事だろう。よくやってくれた。これで君を、正式に次期社長として迎え入れる事が出来る」

その言葉に、俺は思わず耳を疑った。

「今、何と……」

「ああ、君を、正式な私の後継として迎え入れようと言ったんだ。なに、心配はいらない。あの新技术を開発した君なら、経営陣も納得するだろう」

「そんな！私が会長の後継など！！」

思わず声を荒げた俺に、彼は冷徹に言い放った。

「笹宮君。いや、一。お前は私の唯一人の孫だ。今この社を任せている森は馬鹿ではないが、ただの経営屋に過ぎん。技術屋としての仕事は二流だ。お前なら、私の技術を託し、この社の未来を委ねる事が出来る。私の言っている意味が、解るな？」

その言葉に、俺は現社長、森 郷悟きよご氏の事を思い出した。

彼は留学先で経営博士号を取得してこの会社に入り、次々と新しい経済案を打ち出し、異例のスピードで大出世を遂げ、現在の社長職に就任したと聞く。

会長の懐刀、と目されている彼だったが、技術開発に関しては素人ではないにしろ、利益重視の経営屋、と陰口を叩かれる事も少なく

ない。

実際、彼が社長に就任してからの社は、利益こそあがっているものの、それは大幅な人員削減などの力押しが多い。

長年お客様との信頼を大切にして来た安心の技術売りとしていた筈の社風は崩れ去り、近年では目先の利益ばかりを重視したコストパフォーマンスが目立つようになったと一部のマスコミにも叩かれているくらいだ。

「だからといって、私が彼を押しつけて社長になど！そんな馬鹿げた事……」

「馬鹿げた事かどうかは私が決める。他の役員も、森よりは私の直系であるお前をと後押しする者もいるくらいだ。就任させる事は容易かるう。一、これは祖父ではなく、会長としての命令だ。お前が嫌だと言っても、いずれ時期を見て跡を継いで貰うぞ。話は以上だ。もう下がっていいぞ」

「そんな勝手な！俺はあんたが祖父だとさえ知らなかったのに、いきなり社長になれたなんて勝手すぎる！第一、母さんや父さんが死んだ時でさえ顔を見せなかったのに、今更肉親だなんて言われても納得出来る訳ないでしょう!？」

思わず声を荒げた俺に、彼はその目に厳しい光を宿したまま低く言い放った。

「お前が何と言おうと、これはもう決定事項だ。来週の技術発表会に合わせてお前を時期社長として正式に発表する。それまでに身の回りを整えておけ」

「身の回りって……それは、どういう……」

「決まっているだろう。一、お前は生産技術部の一般社員の女と交際しているそうだな。あんな女とはすぐに別れる。お前には次期社長としてしかるべき相手と結婚して貰わねばならんからな」

あまりの事に、俺は一瞬言葉を失った。

カヨをあんな女呼ばわりした上、あるうことか、別れて他の女と結婚しろと、そう言ってるのか、この男は！！

「何を勝手な事を！！彼女は俺の大事な人だ！！絶対に別れたりしない！！彼女以外の女と結婚なんて願い下げだ！！」

怒りのあまり声が震えた。こんな理不尽な事、許してたまるか！！

「そうか。なら今すぐ会社を去れ。お前の開発した技術発表は他の者にやらせる事にしよう。お前ならと思ったが、見込み違いだったようだな。帰れ。今すぐこの部屋から出て行くがいい」

「言われなくてもそうするよ！あんたの顔なんか、もう見たくもない！！」

俺はそのまま入口へと踵を返し、乱暴にドアを閉めると早々にその場を立ち去った。

あんな男が会長で、しかも俺の実の祖父だなんて！！信じられない、信じたくない。

腹立たしさでいっぱいになりながら、俺は足早に本社ビルを出たのだった。

Act・39「凶報」

会長室を出た俺は、すぐさま自分の部署へと取って返した。

「イチ！どこ行ってたんだ！！」

俺を見るなり、そこにいた職場の先輩、山田さんが怒声をあげた。

「すみません山田さん！ちょっと……」

言葉を濁す俺に、山田さんは血相を変えてまくしたてた。

「いいから早く病院行け！カヨが倒れた！！」

「えっ！！カヨが！？」

「富士乃宮市立病院だ！仕事はいいから早く行け！！」

瞬間、走り出していた。

「はあはあ……」

人が行き交う廊下を抜け、走って走って、ようやく駐車場のハイエースが見えて来た。

ポケットに入れていた鍵束を取り出し、もどかしい思いでエンジンスタートとロック解除ボタンを押すと、すぐさま運転席へと駆け寄った。

「くっ！！」

軽い筈のスライドドアさえ、こんな時は酷くもどかしい。
俺は焦る自分を叱咤しながら、大急ぎで運転席に乗り込んだ！

ドルルルン！キュキュキュキュキュ！

激しい音をたて、滑るように車を発進させた。
ほぼ無人に等しい就業時間中の駐車場からあつという間に抜け出し、
すぐに市道へと抜ける。

「カヨ！カヨ！！」

無事でいてくれ！！祈るような気持ちで車をひた走らせた。
信号待ちに引っかかる度、イライラとしながら考えを巡らせる。

（一体どうしてカヨが？）

倒れて運ばれた、と聞いて慌てて出て来てしまったが、一体何が起
こったのか詳しい事が全くわからない。

「そつだ！電話！！」

慌てていて電話に気付かなかった！

俺は胸ポケットから携帯電話を取り出した。

・・・トウルルル

呼び出し音がもどかしい！早く出てくれ！！

『・・・はい、富士乃宮市立病院です』

「あの！カヨは！杉崎加代子の容体は！？」

『落ち着いて下さい。入院患者さんの御家族ですか？』

「そちらに運ばれた杉崎加代子の恋人です！カヨは、彼女は今どうなってるんですか！？」

矢継ぎ早に尋ねる俺に、電話の相手は少し落ちつくようにと繰り返した。

『杉崎加代子さんですね。少々お待ち下さい』

電話が保留音に変わり信号が青になった。

俺は慌ててハンズフリーに携帯電話を切り替え、すぐに車を発進させた。

『……お待たせしました。杉崎さんは今、意識を取り戻して一般病棟の個室にいらっしゃいます。こちらにお見えになるのでしたら、この時間はまだ面会時間内ですから受付でおっしゃって頂ければ大丈夫ですよ』

「そうですか！良かった……。すぐにそちらに向かいます」

電話を切り、俺は再び運転に集中した。

日中の交通量の多さが恨めしいが、それでも病院まではあと5分もあれば着く筈だ。

「カヨ……」

意識を取り戻したと聞いてホッとしたが、それでも不安は拭えない。
早くアイツの顔が見たい。
カヨの笑顔が浮かんで消えた。

「早く会いたい……」

会って、安心したい。

そう思いながら車を走らせ続けた。

Act・40「笑顔の裏」

やがて病院へ辿り着いた俺は、夢中で玄関の受付窓口へと走った。

「すみません！あの、こちらに搬送された杉崎加代子の病室は！？」

「面会ですね？こちらの用紙に記入してお待ち下さい」

受付の警備員から、ボードに挟まった面会申し込みの用紙とペンを手渡された。

俺は焦る気持ちを抑え、それに必要事項を記入し始めた。

名前、住所、電話番号に、面会する患者の名前etc・・・。
記入が終わってそれを手渡すと、警備員は中身を確認してパソコンを操作したかと思うと、何やら見取り図のようなものを渡してくれた。

「312号室です。その、赤マルをつけた場所になります。わかりますか？」

見取り図を良く見ると、3階の部屋の一角に確かに赤マルがつけてあるのが目に入った。

「多分大丈夫です。有難うございました」

そのまま中へと踏み出し、下置き場でスリッパに履き替えて院内へと進んだ。

「エレベーターは・・・あっちか」

ちょうど着いたエレベーターに乗り込み、【3】のボタンを押して扉を閉めた。

(カヨ……………)

心配でたまらない。早く顔を見て安心したいんだが。

やがてチンツ！と独特の音をたててエレベーターが開いた。

俺はすぐさま外へ飛び出し、見取り図を見ながら駆け出した。

「ちよつと！院内では走らないで下さい！！」

白衣のナースに咎められたが、気にしてなどいられなかった。

(カヨ！カヨ！！)

やがて目的の病室へと辿り着き、俺は扉の横に【杉崎 加代子】のプレートがあるのを確認して扉を開けた。

「カヨ！！」

ガラリと引き戸を引いて中へ足を踏み入れると、ベッドに横たわったカヨの姿が目に入った。

「イチ……………。来ちゃったのね」

弱々しい声に、俺は駆け寄って顔を覗き込んだ。

「カヨ！どうしたんだ一体！？俺、倒れたって聞いて心配で……………」

「

「ん……。ちょっとね、過労と貧血だったみたい。救急車なんか呼ばれたから大事になっちゃってビックリしたよね。ごめんね、仕事でだったのに」

過労と貧血……。

そう言われて、俺はホツと胸を撫でおろした。

「そうか……。良かった、俺、てっきり何か大きな病気かと……」

「馬鹿ね。私がそう簡単に病気になる訳ないでしょ。今まで一緒にいて、風邪ひとつひいた事ないじゃない、ね？」

確かにカヨはこれまで一緒に暮らしていて一度たりとて体調を崩した事がない。

質の悪い流行り風邪をうつされて倒れた俺を横目に「自己管理が違うのよ」なんて誇らしげに胸を張っていた事もあるくらいだ。

「けど、万が一って事もあるだろ。今まで大丈夫だったからって、今度も大丈夫とは限らないじゃないか。ちゃんと検査してもらったのか？」

するとカヨは弱々しいながらもこちらを見て微笑んだ。

「ありがとう、イチ。心配いらないわ。ちゃんと検査してもらったけど、異常ないって」

「そうか……。なら、いいんだけど」

「うん。今日は念の為一日だけ入院していきなさいって言われてる

けど、明日には退院出来るから心配ないわ。イチ、今日のご飯、一人で大丈夫？」

心配そうにこちらを見るカヨに、俺は優しく頬を撫でて言った。

「大丈夫だよ。俺の事なんか心配しなくてもいいから、ゆっくり休んで。カヨ、この頃あのプロジェクトの事で一緒に残業ばかりしてたろ？顔色も悪かったし、相当疲れたまってるんだろ。頼むから、これを機にゆっくり休んでくれよ、な」

「あは、ごめんね。イチ、ずっと少しは休めって言ってくれてたもんね。わかった。今日はお言葉に甘えてゆっくり休む事にする」

弱々しいながらも笑顔を浮かべたカヨに、俺はようやく安心してその唇にチュツと軽く口付けた。

「ごめんな、もう少し一緒にいてやりたいけど、早めに会社戻らないと。来週の準備、まだ終わってないからさ」

「ん、気にしないで。どうせすぐ退院出来るんだし。あ、山田君や皆に、迷惑かけてごめんって言っといてくれる？もう大丈夫だからって」

「わかった、伝えとく。じゃあ、行くな。ちゃんと安静にしとくんだぞ」

そう言ってもう一度口付けし、身体を離した。

「うん。イチも、無理しないで、たまには早く帰って休んでね」

ベッドから手を振るカヨに見送られ、俺は病室を出た。それから一応念の為、と思い看護師を捕まえて担当医に話を聞けな
いかと尋ねてみた。

「貴方は杉崎さんの御身内ですか？」

「いえ。俺は彼女の恋人です」

すると看護師は「少しお待ち下さい」と、俺をフロアの待合ロビーに残して去って行った。

しばらくして白衣を着た医師が看護師と共にやって来て、「別室で話しましょう」と言われた俺は、医師と看護師に先導されてカンファレンス室へとやって来た。

「……それで、彼女はどんなんでしょうか」

真剣な顔で尋ねた俺に、医師は静かに口を開いた。

「貴方は杉崎さんの恋人、だそうですね」

「ええ。そうですが……」

それが何か？と尋ねた俺に、医師は少しだけ間を置き、それから口元を緩め、優しい声で言った。

「ご安心下さい。ちょっと疲労と貧血が重なってしまっただけです。少しお休みになればすぐに回復されると思いますよ」

その言葉に、俺はようやく胸を撫でおろした。

カヨの言葉だけでは不安だったが、医師がそう言うなら本当に大丈夫

夫なのだろう。

安心した俺は、医師にお礼を言い、くれぐれも力言をよろしく願
いしますと言ってから病院を出た。

医師の瞳に暗い影が宿っている事に、最後まで気付かないまま・・・
。。

Act・41「激動」

あの会長からの呼び出しから数日が過ぎた。

最初はすぐにでもあの男が何か仕掛けてくるのでは、と思ったが、さすがに本気で俺を辞めさせるような真似はして来なかった。

内心構えていただけに、ちょっと拍子抜けしたものの、何も無いならそれに越した事はない。

準備は順調に進み、後は明日の技術発表会本番を残すのみ。

俺はホッと胸を撫でおろしていた。

ただ一つ気がかりなのは、カヨ……。

すぐに退院出来るから。

そうは言っていたものの、医師の勧めもあり、結局は休養を兼ねて一週間の検査入院となった。

俺は忙しい合間を縫うようにして、何とか時間を作ってはカヨを見舞いに行っていた。

「カヨ、いい子にしてたか？」

「何よイチ、その言い方、まるであたしが子供みたいじゃない」

むくれるカヨに、俺は笑って言った。

「だってお前、見てないところですぐに仕事しようとしてただろ？」

「だってイチ！この忙しい時にあたしだけ休むなんて……」

「カヨ」

低く言った俺の声に、カヨはようやく観念したように手を上げた。

「……わかった。ごめんなさい。もうしません！」

俺は優しく笑ってカヨの頭を撫でた。

「うん。いい子だな」

「うぐぐ。イチ、退院したら覚えてなさいよ？ 献立はイチのキラいな香菜のオンパレードにしちゃうんだから！」

うらめしそうに言うカヨに、俺は苦笑いを浮かべた。

「はは。何とでも言え。お前がちゃんと休まないと、俺だって安心して仕事出来ないんだからな」

するとカヨはふいにうつむき、暗い声を出した。

「……ごめん。こんな時なのに」

「こおら。そんな顔すんな。お前がそんなだと俺、余計心配になっちゃうだろ。いいから気にしないで、ちゃんと休んどけ」

軽く小突くと、カヨはようやく笑顔を浮かべた。

「ん、ありがとうイチ」

「おう。それじゃ俺、明日のリハあるからそろそろ行くよ。悪いな、あんまり長居出来なくて」

「いいんだよ。それより明日、頑張ってるね」

「ありがとな。明日はちょっと来れないかもしれないけど、勘弁な」

「うん。気にしないで。皆によろしくね」

俺は頷き、手を振って病室を出た。

見送るカヨの笑顔に、後ろ髪を引かれながら。

迎えた発表会当日。

俺は緊張の中、集まったマスコミと技術関係者達に新技術をお披露目した。

「……以上で発表会を終了します。皆様、本日は有難うございました」

閉めの挨拶をし、盛大な拍手に送られ、俺は舞台を後にした。

「笹宮、お疲れさん！」

山田さんが声をかけて来た。

「有難うございます。山田さんもお疲れ様でした！」

「この後の慰労会、出るんだろ？」

「ええ。勿論出席させて頂きます。リーダーが欠席じゃ皆に悪いですし」

悪いな。

小さくささやかれたその声に、俺はそつとささやき返した。

大丈夫です。アイツは、わかってますから。

ニツと浮かんだ笑顔と共に、ちよんと肘で小突かれた。

式には呼べよ。

もちろん。

そんなやりとりの後、俺は皆に向かって言った。

「じゃあ皆さん！片付けて移動しましょう！今日は部長から寸志を頂いてますから、思いっきり飲んで食べて騒ぎましょう！」

わあっと歓声が上がリ、俺は皆と共にバタバタと人波の引いた会場を片付けにかかった。
その時だった。

B u b b u b b u !

(電話？誰から？)

胸ポケットに入れておいたマナーモードの携帯電話を取り出し、ディスプレイを見た。

「　　っ!？」

瞬間、俺は大急ぎで通話ボタンを押した。

「もしもしっ!?!」

「富士乃宮市立病院です。笹宮さんの携帯電話で宜しかったですか?」

「はい!」

「すぐにごこちらに来て下さい!杉崎さんの容体が、急変しました!」

視界が、闇に消えた。
襲い来る冷たい感覚の中、俺は茫然と、その場に立ち尽くしていた。

Act・42「現実」

カンツ！カラカラカラ……。

固い音が響いた。

目の前が真っ暗だ。クラクラする。

急変？カヨが？どうして！？

「もしもし？……えっ！？……はい、はい、わかりました！すぐそちらに向かわせます」

誰かの声と、せわしない足音が聞こえる。

「イチ！おい、しっかりしろイチ！！」

肩を掴まれて揺すられ、俺はようやく視界が戻った。

「……山田……さん？」

「ああ！俺だよ！！しっかりしろイチ！！お前がそんなでどうする！！」

ほらこれ、と、俺の携帯電話を押しつけられた。

「あ……これ、なんで山田さんが？」

「いいから早く行け！こんなトコで呆けてる場合か！！」

怒鳴られ、ハツとなる。

そつだ。カヨが！！

「すみません、あと、お願いします！！」

返事を待たず、駆け出した。

どよめく皆の間を抜け、会場の外へと飛び出す。すれ違う何人かにぶつかったが気になどしていらなかった。

やがて駐車場へと辿り着きハイエースが見えた。

俺は走りながら胸ポケットから鍵を出し、ロックを解除してエンジンスターターボタンを押した。

「はあはあはあ……」

息も荒いまま、スライドドアへと手をかける。

ちくしょう！早く！早くしないと！！

焦りながら運転席へ乗り込み、車を発進させた。

ギョルン！キュキュキュキュ！！

凄い音をたて、駐車場を抜けた。

幸いにもまだ市道はそこまで込む時間帯ではなく、車は滑るように走り抜けて行く。

俺は思いっきりアクセルを踏み、ほとんど信号にひっかかる事なく病院へと辿り着いた。

車を降りるなり、そのまま玄関へとひた走った！

「はあはあはあ！連絡受けて来ました！笹宮です！カヨは！？杉崎加代子は！？」

受付の守衛に向かい、荒い息のまま一気に尋ねた。

「お待ち下さい」

この間とは違い、すぐにどこかに電話をかけた。

「こちら受付です。笹宮さんとおっしゃる方が。……はい、そうです。……はい、わかりました」

電話を切った守衛は俺に向き直り、口を開いた。

「集中治療室だそうです。場所は1階突き当り奥。手術室の右隣りです」

「ありがとうございます」

下足置き場に向かい、急いでスリッパに履き替えて中へ進んだ。パタパタと音をたてながら院内を走る俺を、すれ違うナースが見咎めた。

「ちょっと！院内では走らないで、笹宮さん!？」

カヨの担当ナース、今井さんだった。

「今井さん！アイツは！カヨは今どうなってるんですか!？」

「……杉崎さんは今、意識不明で集中治療室にいます」

「どついう事ですか!?! アイツはただの貧血と過労だったんじゃない?？」

今井さんは顔を曇らせ、静かに言った。

「詳しい事は先生からお話しします。カンファレンス室へどうぞ」

俺は頷き、今井さん先導の元、カンファレンス室へと移動した。

あの、カヨが入院した初日に通された、患者とその家族、医師が話をする為の部屋だ。

中に入ると、座っていた担当医が立ち上がった。

「笹宮さん、どうぞお座り下さい」

促され、俺は医師の目の前に置かれた椅子に座った。

「……で、先生、一体どういう事なんですか？アイツは、カヨはどうしてこんな事に!？」

医師は固い表情を崩さず、静かに口を開いた。

「最初に確認しておきます。杉崎さんにはご家族がいらっしゃる間違いありませんか？」

「……はい。カヨの家族は、10年以上前に他界して、親族とも連絡がとれない。そう聞いてます」

「そうですか……。では、今現在杉崎さんのお身内に近い方は笹宮さん、貴方だと見て構いませんか？」

「……ええ。彼女とは、結婚する約束もしてますから」

すると医師は少しだけ考えるように黙り込んだが、やがて決意したように口を開いた。

「……………落ち着いて、聞いて下さい」

知らず、ゴクリと唾を飲んでた。

一体、何を言おうとしているのか……………。

「……………杉崎さんの病名は、急性白血病です」

「あの、それは、どういう……………」

「簡単に言うと“血液の癌”です。血液の中の細胞に異常が起こり、腫瘍が出来る病気です」

白い部屋の中、医師の言葉は重く、静かに響いていた。

A c t ・ 4 3 「 宣 告 」 (前 書 き)

病気・医療に関する描写は現実と異なる場合がございます。
恐れ入りますが、予めご了承の上お読み頂きますようお願い
致します。

A c t ・ 4 3 「 宣 告 」

「・・・急性・・・白血病・・・。あの、それは、どういう・・・？」

口が渴き、声が掠れた。

医師は相変わらず静かに言葉を続けた。

「・・・白血病は、血液中で未熟な白血球が異常に増加する病気です。造血・免疫機能が低下し、骨髓を守る仕組みが壊れ、肝臓、脾臓、髄膜、精巣、皮膚、歯肉、骨膜など、様々な器官に影響をもたらします。顕著な症状としては発熱、出血傾向、貧血、などです」

「貧血！じゃあ、まさか・・・」

「ええ。杉崎さんがここへ搬送されて来た時には、もう・・・。以前から、何か症状を訴えられているような事はありませんでしたか？」

「・・・そういえば、ここのことろずっと、風邪をひいたみたいでダルイって・・・」

休めと言っても、「この忙しい時にあたしだけ休んでなんかいられないわ」と聞いてくれなかつた事を思い出し、激しい後悔に駆られた。

ああ、こんな事なら、無理にでも休ませて病院に連れて行くんだっ
た！！

「・・・そうですか。率直に言います。お気の毒ですが、杉崎さ

んは、このままだともう危険な状態です」

「そんな！！何か手はないんですか！？薬とか、手術とか！！」

思わず立ち上がった俺に、医師はなおも静かに言った。

「一つだけ、あります」

「何ですか！？どうすればアイツを助けられるんですか！？」

「……骨髄移植です」

骨髄移植。

以前、何かで耳にした事がある。確か、ドナーバンクがどうか……。

「先生、それは、すぐに出来るんですか？」

「いいえ。残念ながら、型が一致するドナーが現れなければ移植は出来ません」

半ば予想していたとおりの答えに、俺は目の前が真っ暗になった。

「じゃあ、アイツは、カヨは……」

「お気の毒ですが、ドナーが現れなければ、なんとも……」

「俺を検査して下さい！お願いします！！」

もしかしたらと思った。俺とカヨなら、あっさり一致するかもしれ

ない！

そんな俺の希望を前に、医師は静かにこう言った。

「検査はやってみましょう。ですが、一致する確率は数万人に一人と言われています。あまりご期待なされない方がいいかもしれません」

それでもいい。僅かでも望みがあるなら！

俺がアイツを助けられるかもしれないなら、何だってやってやる！

ドナー検査を受ける事を医師に承諾してもらい、手続きの書類を書いた。

すぐにでも検査をして欲しかったが、色々と準備がいるらしく、今すぐというわけにはいかないと断られてしまった。

「笹宮さん、杉崎さんには、この事、お伝えになりますか？」

問われて、俺は思わず黙りこんだ。

カヨに真実を伝える。それは、必要な事なのかもしれない。だけど・・・。

「少し、考えさせて下さい・・・」

そう言うのが、精一杯だった。

「わかりました。今、杉崎さんは集中治療室で眠っています。もし会われるのであればご案内致しますが、どうされますか？」

「会います！会わせて下さい！」

医師は静かに頷き、傍らにいた看護師、今井さんに目配せした。

「では笹宮さん、ご案内致します。こちらへどうぞ」

今井さん先導の元、院内の廊下を進む。

外はもう夕暮れで、大きなガラス張りの廊下は、夕陽に照らされて赤々と染まっていた。

白と赤、そして影が創り出す色のコントラストが、何だか不吉なものに思えてならなかった。

それから俺は、案内された部屋で、薄緑色の無菌服、帽子、手袋、マスクを身に付け、カヨのいる集中治療室へと足を踏み入れた。

そこはあまりに静かで、機械の電子音と呼吸器の音だけが、無機質に響いていた。

ゆっくりと足を踏み出す。

「・・・・・・・・カ・・・・・・・・ヨ・・・・・・・・？」

返事は、ない。

「カヨ？」

もう一度、呼んだ。

「カヨ」

『イチ、仕事は？』

咎めるように言って笑う顔が浮かんで、消えた。

「笹宮……さん？」

今井さんの声にハツとした。

「すみません、大丈夫……です」

足を踏み出す。一步一步、ゆっくり、ゆっくり。
白い、ベッドへと。

「
っ！！」

カヨは、いた。

白いベッドの上。酸素マスクと、幾つものチューブに繋がれて。

「……カ……ヨ……？」

閉じられた、まぶた。紙のような、白い、肌。青ざめた、唇……。

「どうし……て……」

笑ったんだ。手を振ったんだ。昨日。なのに……。

白い部屋の中、俺はカヨの手を握り、動けなかった。

か細いその手が、握り返してくれる事は、ついに、なかった。

Act・44「友人」

カヨが集中治療室に入って数日が過ぎた。

俺は、不安をごまかすように、以前にも増して仕事に打ち込むようになっていた。

朝早くから夜遅くまで仕事して、帰れば死んだように眠るだけ。

見舞いには、行けなかった。目覚めないままのカヨを見るのは、あまりに辛くて。

何もしてやれない自分が、齒痒かった。

「お疲れ様です」

先に帰る山田さんに挨拶すると、ガシッと肩を掴まれた。

「笹宮、お前、今日付き合え」

「山田さん、でも俺……」

「いいから来い！その仕事、別に今日中じゃなくたっていいだろ。たまには付き合え。先輩命令だ！」

俺は無言を言わず山田さんに頷かされ、仕事を切り上げる事になった。

いつもの居酒屋は会社からほど近いところにある赤提灯の小さな店だ。

以前はよく山田さんとカヨと三人で来ていたが、最近はめっきり来

る回数が減っていた。

「親父！とりあえず生2つ！それと枝豆と串盛りな！」

奥にあるいつもの席につくなり、山田さんはおしぼりとお通しを渡しに来た店長に元気良く注文していた。

「あいよ！生2つ！枝豆！串盛り入りました！！」

店長は威勢よくオーダーを厨房に伝え、スタッフが「ありがとうございます！」と元気に答えた。

「イチ、お前も何か頼め。最近あんまり食ってねえだろ。遠慮すんな、今日は奢ってやつからバンバン食え」

「あ、ありがとうございます。でも俺、あんまり食欲なくて……」

すると山田さんは、バシッと目の前にメニュー表を叩きつけた。

「や、山田さん！？」

「い・い・か・ら・食・え！先輩命令だ！！」

目が据わってる。本気モードだ！

山田さんは普段は朗らかないい人だが、一度怒るととてつもなく怖い。

いつだったか、下請メーカーが同じ間違いを二度続けてやった時、顔は笑ってるのに目がちつとも笑ってなくて、それこそ取って喰いそうな気迫で迫っていたのを思い出す。

「は、はい……。わ、わかりました」

仕方なく、目に入った適当な物を適当に頼んだ。

山田さんを伺い見ると、さっきまでの気迫が嘘のように消え、ニコニコといつもの笑顔に戻っていた。

「お待たせしました！生ビールと枝豆です！」

若い店員バイトさんが生ジョッキと枝豆を運んで来た。

「じゃ、まずはかんぱーいー！」

ジョッキをガチン！と合わせ、最初の一杯を口にした。

「ぶっはー！ー！やっぱ仕事明けのビールは最高だな！なあイチ！」

ビールを半分ほど飲み干した山田さんは、すっかりプライベートモードでリラックスしまくり、ジャケットは脱ぎ、ネクタイも緩めまくっている。

「お、どうした？お前ももっとくつろげよ。もう仕事は終わりだぞ。こっからはオフタイム。仕事抜きのただのダチ同士だろ。遠慮すんな」

「は、はい……」

言われて俺は、ようやくジャケットを脱いだ。

「まあなんだ、イチ、お前さ、最近見舞い、行ってんの？」

いきなり突かれたくないところを突かれ、俺はちょっと顔をしかめた。

「……山田さんには、関係ないと思いますけど」

「関係ある！カヨは俺の同期だし、お前は可愛い後輩で、二人とも俺の大事な友達だ」

「山田さんの職場後輩は田中君でしょ。俺の職場先輩はカヨじゃないですか」

「なぐにをぬかすか！いいか！同じ職場にいる以上、直属かどうかなんて関係ねーんだよ。先輩は先輩だし、上司は上司だ！そんな当たり前だろ！」

身を乗り出して勢い良く言った後、山田さんはスツと身体を引き、じつと俺の目をみつめた。

「なあイチ、カヨはさ、あれで苦労してるんだ。中学ン時に両親が事故で死んじまってさ、残されたのはカヨ一人。親戚はあっさりさじを投げてアイツを施設に丸投げ。アイツはそれこそ死に物狂いで勉強してバイトしながら工業高校行って、大学入って、そんでやつとの思いで今の会社に入ってきた。ここまではお前も知ってるだろ？」

小さく頷く。初めて知った時は、随分驚いたものだ。あの屈託ない明るさからは、そんな過去、想像もつかなかったから。

「けどさ、それだけじゃないんだぜ。アイツさ、この会社初の女性

技術員として採用されてんだ。そりゃもうプレッシャーはでかかったと思っぜ。周りは男ばっか。しかも、どう頑張ってもやつぱり男優先な社会に変わりはない。お前が入って来る数年前までは、新人の職場先輩さえ任されなかった。何でか解るか？」

首をふる俺に、山田さんは小さく溜め息を吐いて続けた。

「女だからさ。女に、大事な新人の教育なんか任せられねえ。そういう馬鹿な判断で、上はアイツに職場先輩をさせなかった。ちよつと大きな仕事になると、それはアイツ以外の誰かに任される。キャリアも技術も、アイツの方が上なのに、だ」

「そんな！そんな馬鹿な事……！」

「そう思うだろ。だからアイツは俺に頼んだのさ。俺の仕事を自分にやらせてくれて。だから俺は、回って来た仕事をこつそりアイツにまかせた。そしたらアイツ、どうしたと思う？俺が1週間はかかる仕事を、たった3日でやってのけやがった！上司連中は大慌て！何でこんなに出来るやつに今で仕事を回さなかったのかってさ、自分らが仕組んでたくせに、笑わせるだろ。そこからはトントン拍子。職場先輩どころか、一気に大きなプロジェクトまかされるまでになつちまいやがってよ。そこまで足掛け三年だぜ、三年！」

山田さんはクツクツと可笑しそうに笑った。

「まったく、すげーよな。3年間、任せてももらえない人の仕事を、一から十まで全部、くまなく見てさ、解らないところは調べて、聞いて、そうやって少しずつ地道に仕事全体を理解していったさ、人の見てないトコでコツコツ努力して、頑張って、そうやって今までやってきたんだ。ホント、すげーよ……」

そこまで言って、山田さんは急に言葉を切った。

「……やりきれねえな。あんなに頑張って、やっとここまで来たってのに……」

ジョッキに残っていた生ビールが、グイッと飲み干された。

「……アイツ、助かるのか？」

真剣な目が、そこに、あつた。

「……わかり、ません」

「……そうか」

重い沈黙が流れた。

「お待たせしました〜！串盛りと生です！！」

図ったかのようなタイミングで店長が串盛りとお代わりのジョッキを持って来た。

山田さんはそれを受け取り、再び俺に向き直った。

「イチ、とりあえず飲もう。飲んで、食べて、それから考えよう。今俺達に何が出来るのかを、な……」

ポンッと肩を叩かれた。

俺は頷き、再びジョッキを合わせて乾杯した。

Act・44「友人」（後書き）

<作者より一言>

最近、一日に何十人の方がアクセスして下さり、PVもUUもアップしてきて、お気に入りに入れて下さっている方も増えて来ました！

皆さま、いつも【レインキス】を読んで下さって本当に有難うございます。

拙いながらも一生懸命書かせて頂きますので、今後ともどうか宜しくお願い致します。

A c t ・ 4 5 「ドナー」 (前書き)

病気・医療・ドナーに関する描写は現実と異なる場合がございます。
恐れ入りますが、予めご了承の上お読み頂きますようお願い致します。

Act・45「ドナー」

病院から電話があったのは、その翌日の事だった。

「本当ですか！？すぐ向かいます！！」

俺はすぐさま早退届を書き、課長に突きつけた。

「すみません、急用が出来たので、早退させて下さい！！」

課長は何も言わず頷き、黙って書類にハンコを押してくれた。

俺は課長に深々とお辞儀をすると、すぐさまデスクに取って返し、パソコンの電源を切り、書類を乱暴にデスクにしまい、カバンをひつつかんで足早に駐車場へと向かう。

息を切らせながら走り、ようやく愛車であるハイエースの元へ辿り着いた。

ロックを解除し、エンジンをかけ、運転席へと乗り込む。

ギョルン！キキキキキ！！

車は凄い音をたててあっという間に駐車場を抜け、市道へと飛び出した。

（カヨ！カヨ！！）

焦る気持ちを抑え、車を走らせる。

やがて病院の駐車場に着くと、まっしぐらに受付を目指した。

「すみません！連絡受けて来ました！笹宮です！杉崎加代子に面会

を！！」

警備員から書類を受け取り、急いで記入した。
それを確認した警備員は、どこかに電話した後、俺に向き直り口を開いた。

「集中治療室の患者さんですね。場所はわかりますか？」

「はい！」

瞬間、警備員が次の言葉を紡ぎ出すより早く、足を踏み出していた。早く、早く！！
下足をスリッパに履き替えると、パタパタとせわしない音をたてながら院内を駆け抜けた。

「ちょっと！院内では走らない」と、笹宮さん！貴方でしたか」

カヨの担当ナース、今井さんだった。

「今井さん！アイツ！カヨは！？」

「落ち着いて下さい。大丈夫です。意識はちゃんと戻ってますから」

「良かった……。あの、会っても、大丈夫ですか？」

不安気な顔で聞くと、今井さんにはにっこりと笑った。

「ええ。大丈夫ですよ。無菌服をお貸しします。どうぞ着いていらして下さい」

スタスタ歩く今井さんの先導に従い、俺はカヨのいる集中治療室へと向かった。

あの日入ったのと同じ部屋で、俺は身体を消毒をし、無菌服一式を身に付けた。

「どうぞ」

今井さんに扉を開けて貰い、俺は中へと足を踏み入れた。

「……………カヨ？」

声をかけると、微かに体が動いた。

「……………イチ？」

ああ。カヨの声だ！掠れてはいるけど、間違いなく、アイツの声！！俺は嬉しくなって駆け寄った。

「カヨ！！！」

透明なベールの中にある白いベッドの上に横たわっているカヨは、先日見た時よりさらにやつれたように見えた。

あの時と同じく、酸素マスクをつけ、幾つものチューブに繋がれてはいるが、今度はちゃんと目が開いていて、ちゃんと俺を見ている。

「カヨ……………良かった……………」

ぎゅっと手を握った。

「……………ごめんね。発表……………会、大丈夫……………だった？」

「ああ。大丈夫だ。お前は何にも気にしなくていいから、な」

「ありがとう、イチ……」

握った手が握り返された。

その手があんまり弱々しくて、思わず泣きそうになるのを堪えた。
ふと、今井さんが後ろから声をかけて来た。

「笹宮さん、あまり長くは……。杉崎さんの身体に障りますか
ら」

「あ、はい。解りました。カヨ、ごめんな、また来るから」

カヨは小さく頷き、微笑んだ。

「うん……」

名残惜しく思いながら手を離して部屋を出た。

「笹宮さん、この後お時間ありますか？先生がお話したい事がある
そうなんですが」

「俺にですか？分かりました。伺います」

無菌服を脱いだ俺は、その足で医師が待っているというカンファレ
ンスルームへと向かった。

「失礼します」

驚き戸惑う俺に、医師は躊躇いがちに告げた。

ドナーが、移植を拒否した、と……。

A c t ・ 4 6 「不本意な再会」 (前書き)

病気・医療・ドナーに関する描写は現実と異なる場合がございます。

恐れ入りますが、予めご了承の上お読み頂きますようお願い致します。

Act・46「不意な再会」

「どういう・・・事・・・ですか？」

あまりの事に、俺は茫然として尋ねた。

「・・・適合したドナーの方が、骨髄移植を拒否されたんです」

「そんな！だって、移植する意思があるからドナーバンクに登録していたんじゃない？」

「よくあるんですよ、こういう事は。いざ移植となつて、色々な事情から足踏みしてしまう方も少なくないですから・・・」

小さく溜め息を漏らした医師に、俺は思わず声を荒げた。

「何とかならないんですか！？せめて、そのドナーの人と話させて下さい！！お願いします！！」

「残念ですが、それは出来ません。ドナーはプライバシーを守られる権利があります。患者やそのご家族にドナーの情報をお渡しする事は、法律で禁止されているんです・・・」

「そんな！それじゃカヨは、アイツは・・・」

うなだれる俺に、医師は静かに言った。

「こうなった以上、新しいドナーが出てくれる事を祈るしかありません。お気の毒ですが・・・」

目の前が真っ暗になった。
どうして、こんな……。

失意のまま病院を後にした。

重い身体を引きずるように車に乗り込み、元来た道を引き返す。
とりあえず会社に戻ろう。

仕事に打ち込めば、一時でも忘れられる。そう思った。

「笹宮！お前、どうしたんだ！？早退したんじゃないのか！？」
オフィスに入った途端、そこにいた山田さんが驚いた顔で振り向いた。

「ああ、その、意識、戻ったんで、顔だけ見て、戻ってきました」

「そうか！良かった。意識戻ったんだな！しかし、それにしては
お前、うかない顔してるな。どうした？」

心配そうに顔を覗き込む山田さんに、俺はなんとか笑顔を浮かべた。

「大丈夫です。ちょっと疲れてるだけですから」

「そうか？あまり無理すんなよ。何かあったら遠慮しないですぐ言えよ」

「はい。ありがとうございます」

笑顔で頷いたその時だった。

Rururururu・・・！！

俺のデスクの電話が鳴りだした。

「はい、生産技術部 開発課 1係 笹宮です」

『お忙しいところ恐れ入ります。会長秘書の磯貝です。その節はどうも』

思わぬ相手からの電話に、俺は眉をしかめ、低い声を出した。

「・・・あなたでしたか。今日はまたどんなご用件ですか？」

『はい。実は、もう一度会長室にお越し頂きたいのです』

「何を馬鹿な。あの件についてなら、はっきりお断りした筈ですが？」

『その件ではございません。会長は、杉崎さんのドナーの件でお話したいとの事でした』

「今、何と!？」

思わず聞き返した俺に、磯貝さんは冷静に言った。

『ええ、ですから、会長は杉崎さんのドナーの件でお話がある』

「・・・分かりました。すぐにそちらに参ります」

『では、第10会議室でお待ちしております』

電話を切った直後、俺はオフィスを飛び出していた。

まさか……。

嫌な予感に囚われながら、俺は本社ビルへと向かった。

受付に申し入れると、やはり既に鍵は開いているとの返事が返って来た。

俺は速足で廊下を進み、第10会議室へとやって来た。

そのままノックもせずにドアを開ける。

「磯貝さん、これは一体どういう事ですか!？」

中に既にいた会長秘書、磯貝さんに向かってまくしたてた。

「どつとは？ 笹宮さん、おっしゃる意味がよく分かりかねますが」

「カヨの事です! どうしてあの男がカヨのドナーの事で話をなんて言い出すんですか!？」

すると磯貝さんはその綺麗な顔に悲しげな表情を浮かべ、言った。

「申し訳ございません。私は何も聞かされておりません。ただ、さきほどの話をお伝えして会長の元へお呼びするように、とだけ……」

その様を見て、俺は自分が間違えた事を悟った。

「……すみません。磯貝さんに当るなんて、八つ当たりもいいところですね」

「いいんです。さ、会長室へご案内致します。どうぞ」

磯貝さんが扉を開け、俺達は廊下の外へと出た。

あの時と同じようにエレベーターホールを抜け、役員専用エレベーターを磯貝さんのＩＤカードで動かし、会長室のフロアへと移動した。

エレベーターを降りあの重厚なドアの前に辿りつくと、磯貝さんはドアホンの受話器を取った。

「会長、笹宮さんをお連れしました」

ガチャリ。

あの時と同じ金属音が響き、磯貝さんがドアノブに手をかけ、扉を開けた。

「どうぞ中へ」

促されるまま中へ入ると、後ろで静かにドアが閉められた。

俺が中に足を踏み入れると、窓際に立って外を眺めていた彼は、背を向けたまま静かに口を開いた。

「……来たか」

「俺としてはもう貴方に会いたくはありませんでしたけどね」

せめてもの皮肉を言って睨みつけると、彼はこちらに向き直り、口の端を上げた。

「まあそう言うな。私がこれからする話は、お前にとっても悪くな

「い話だと思っがな」

その張り付いたような笑みに、俺は寒気を覚えた。

「なんだ？ 一体、何を考えている？」

「単刀直入に言おう。杉崎加代子の適合者は、私だ」

A c t ・ 4 7 「 契 約 」 (前 書 き)

病気・医療・ドナーに関する描写は現実と異なる場合がございます。
恐れ入りますが、予めご了承の上お読み頂きますようお願い致します。

A c t ・ 4 7 「 契 約 」

体中を電撃が走り抜けた。

今、コイツは何と？

「信じられないかね？だが残念だな。間違いなく私が杉崎加代子の適合者だよ」

瞬間、張り付いていた笑みが消え、氷のような冷たい表情に変わる。その冷たい気迫に、俺は思わず気圧され、絞り出すように声をあげた。

「……なん……で……。どうして、アンタが……」

「大企業における一つの慈善事業だよ。それにしても驚いた。まさか患者があんな女だったとはな」

「でたらめだ！アンタがドナーだとしても、患者が誰かは分からない筈だ！！」

今の日本の法律では、患者とドナーの双方に互いの情報が漏洩する事は有り得ない。

医師もドナー協会も、法律を遵守している筈だ。

「忘れたかね？社長を退任したとはいえ、私はまだまだ事実上はこの会社のトップだ。系列病院の患者の事など、幾らでも調べはつく」

「……っ！！」

思わず言葉を失った俺に、彼は冷笑を浮かべた。

「身を以て白血病患者の為に骨髄移植。わが社のイメージをより良い物にするのに、うってつけの材料ではある。しかし、あの女が相手と知って、すぐに別の使い方を思いついたよ」

クククツと可笑しそうに笑い、まっすぐに俺を見て言った。

「なあ一、お前はあの女を救いだろう？」

その冷たい笑顔と視線に怖気が走った。

頭に警鐘が鳴り響く。

ダメだ！この男の言葉を聞いては、いけない！

思わずこの場から去ろうとした。

なのに、身体がぴくりとも動かない。

ダメだ！この先を聞いたら、俺は……！

そんな俺の心を悟っているのか、やつはなおも可笑しそうに笑い、言った。

「選ばせてやろう一。私の跡を継いであの女を助けるか、それとも、会社とあの女を捨てるか。二つに一つだ」

ぐるぐると、思いが頭を駆け巡った。

幼い頃、貧しいながらも頑張って働いていた両親。

『おじいちゃんは死んだのよ。もう会えないの』

おじいちゃんの田舎に行く、という友達をうらやましがり、おじいちゃんの存在を尋ねた俺に、困ったように言っていた優しい母さん。

真面目で、厳しく、けれど優しくかった父さん。
助手席にいた俺をかばい、血みどろで亡くなった父さん。
病院で、俺の手を握りながら「ごめんね」と言切れた母さん。

どこにも行き場がなくて、施設で過ごした日々。
施設の皆は優しくかったけど、子供の俺は、やっぱりどうしようもなく寂しくて。

やがて奨学金で専門学校を出て、大学行って、死ぬほど勉強した。
血反吐を吐くような思いでバイトして、勉強して、一人暮らしで、頼れる人もいなくて。

寝込んで、助けてくれる人がいないのが苦しくて、悲しかった。
風邪薬ひとつ買えない、みじめな、生活……。
一人を呪った。逝ってしまった両親を恨んで、自分を嫌になった。

大学を卒業して、会社に入って、カヨに会った。
悲しみも、痛みも、孤独も、どうしようもない寂しさも、本当に理解してくれたと思えたのはアイツだけだった。

『ねえイチ、もう許してあげようよ。両親も、自分も、さ。だってイチ、こんなに優しくして立派な男になったんだよ？もういいじゃない。今イチは生きてここにいる。あたしは、イチに会えて良かったよ。だから、ね』

泣き笑いを浮かべるアイツに、俺は、救われた気持ちになった。
ああ、俺はきつと、コイツに会う為に、今まで生きて来たんだ。そう、思えた。

アイツがいたから、俺は……。

イチ。大好きよ。ずっと一緒にいさせて。

カヨの笑顔が、浮かんで、消えた。

・・・・・・・・カヨ・・・・・・・・

ギリリ。

拳を握り締めた。

「・・・・・・・・分かった・・・・・・・・」

キツと睨みつけ、言い放つ。

「アンタの跡を継いでやる！だが俺にも条件がある」

すると、目の前の男はクククつと可笑しそうに笑った。

「条件だと？笑わせる。お前は立場がわかってないようだな。あの女の命は私にかかっているのだぞ」

その冷笑に怯まず、まっすぐに視線を射抜いたまま、俺は冷静に言葉が続けた。

「いいのか？アンタが俺の条件を聞かないつもりなら、俺はすぐにも他社に移籍して、この間発表したあの技術以上のものを開発してみせるぜ」

「なんだと？」

その瞳の揺れを見逃さず、畳み掛けるように続けた。

「S社を始めとする各関係会社からスカウトが山ほど来ている。シェアを塗り替えられたくないなら、今のうちに俺を引き留めておくのが妥当だと思うがな」

途端に冷笑が崩れ、大声で笑い出した。

「あはははは！一、お前はやっぱり間違はなく私の孫だよ。この私を相手に取引とは！面白い。実に愉快だ」

ひとしきり笑い、俺の目をまっすぐに見つめた。

「いいだろう。その才覚、他にくれてやるにはあまりに惜しい。条件を言え。聞いてやるうじやないか」

きつい視線はそのままに、俺は口の端をあげ、静かに言った。

「お誉めにあずかり光栄だよ。条件は2つ。1つは移植が無事済んで彼女が良くなるまでは、俺が後継である事は公表しない事。もう1つは俺の結婚相手だけは俺に選ばせること。これが飲めないなら俺は、移籍どころか、カヨと一緒に死ぬ事を選んだって構わない覚悟がある。どうだ!？」

「……いいだろう。お前がそこまで言うのなら、その条件、飲んでやるう」

「交渉成立だな。おいアンタ、会社付けの司法書士を呼べよ。口約束じゃ保障が無い。この際だ。証書の一つでもつくっておこうじやないか」

「ははは！いいだろう。口約束で逃げられるのはこちらも勘弁願いたいからな」

上機嫌で机の上の電話をとり、どこかに電話し始めた。

「私だ。山崎を呼べ。立ちあい証書を作成する。他の者には内密でな……ああ、今ここでだ」

やがて司法書士がやって来て、立ちあいの元、俺達は証書を作成し、俺は悪魔の手をとった。

「これで契約は成立だ。楽しみだな。お前が私の跡を継ぎ、この会社を動かす日が来る事が」

やつの言葉に、俺は冷笑を浮かべた。

この先の未来など、どうでもいい。

アイツが生きられる。

ただそれだけが、救いだっただ。

Act・48「移植」(前書き)

病気・医療・ドナーに関する描写は現実と異なる場合がございます。

恐れ入りますが、予めご了承の上お読み頂きますようお願い致します。

A c t ・ 4 8 「移植」

結局俺は、移植手術が終わったら、時期を見て正式に後継者となる事を同意し、子会社の一つの登記簿を譲り受けた。

カヨの見舞いの傍ら、通常の会社業務に加え、密かにオーナーとなつた子会社の運営もせねばならず、忙しい日々が続いた。

そんな中、一度は破談となつたカヨの骨髄移植の話は、トントン拍子に進んでいた。

彼女の病気は、入院当初からかなり悪い状態で、一刻も早く骨髄移植をする必要があつた。

俺はカヨに病名を告げ、移植手術を受ける事を承諾させた。

『移植すれば、治るんだよね？退院したらさ、部の皆全員呼んで、結婚式しよう！あたしの花嫁姿、楽しみにしててよね、イチ』

カヨは、そう言って笑つた。

移植当日。

手術中のランプが光る扉の前で、俺は落ち着きなく待っていた。

カヨ・・・・・・・・。。。

祈るような気持ちで、扉を見つめ続けた。

どうか、無事に終わってくれ・・・・・・・・。

コチコチと時計が音を刻み続け、やがてランプが消え、扉が開いた。

「先生！カヨは？アイツは……」

駆け寄った俺に、緑の手術服を着た医師は、やや疲れたような声で静かに言った。

「大丈夫です。移植は無事終わりました」

「ありがとうございます！！」

これでカヨは助かった！そう、思っていた。

移植後の経過は至って順調で、心配だった拒否反応もそんなに重くなる事はなかった。

治療の為に無菌室に入っている間はガラス越しにしか面会出来なかったが、医師から経過が良好だと伝えられ、ホツとしていた。

白血球値も順調に通常値へと近付き、一般病棟へ移され、直接面会も出来るようになった。

この頃になると、俺はもうすっかりカヨの病気は良くなったのだと信じて疑わなかった。

忙しい合間を縫って見舞いに行き、結婚式場のパンフレットを集めては、カヨと式の事をあれこれ相談していた。

あと少しすれば退院出来る。そう、信じていた。

「ねえイチ、あたし、イチの故郷が見たい」

ある日カヨは、ふいにそんな事を言いだした。

「ん？俺の故郷か。何にもない田舎だぞ。いいのか？」

するとカヨは、優しく微笑んでこう言った。

「あら。イチの故郷でしょ。それに、イチのご両親にもご挨拶したいし、ね」

俺はカヨの頬にそつと触れながら答えた。

「わかった。一緒に行こう。どうせなら5月がいいな。知ってるか？エゾ山桜。綺麗だぞ」。こっちの桜とはまた違う趣があって・・・」

「そうなんだ！ふふ、楽しみだな」

その笑顔が愛しくて、肩を寄せた。

「・・・・・・・・イチ・・・・・・・・」

抱き寄せた身体は、あまりに細く頼りなくて、ふいに泣きたくなかった。

胸の内をごまかすように、ぎゅっと抱きしめた。

「・・・・・・・・ずっと、一緒にいような・・・・・・・・」

「・・・・・・・・うん。ずっと・・・・・・・・一緒だよ・・・・・・・・」

目を閉じ、唇を重ねた。

白い病室の中、互いの鼓動が聞こえてしまいそうなほど、静かな、春の日だった。

Act・49「再発」(前書き)

病気・医療・ドナーに関する描写は現実と異なる場合がございます。

恐れ入りますが、予めご了承の上お読み頂きますようお願い致します。

A c t ・ 4 9 「再発」

その日俺は、医師から話があるとカンファレンスルームへと呼ばれた。

「再発!？」

驚く俺に、医師は頷き、重い声で答えた。

「……ええ。白血病細胞が、再び増殖してしまっているんです。骨髓移植をしたとしても、それで完治する訳ではない。

投薬治療は続けなければならぬし、場合によっては、再発の危険だってある。

移植手術前、医師から聞かされ、恐れていた事が現実になってしまった。

ずっと調子が良かっただけに、俺は動揺を隠せなかった。

「そんな……じゃあ、カヨは……」

目の前が、真っ暗になった。

最悪の場合も、覚悟しておいて下さい。

医師の言葉が、重く、のしかかった。

その日から、カヨはまた激しい戦いへと逆戻りした。

会うのは無菌室のガラス越し。会話は室内に設置された電話越しでしか出来ない。

手を触れる事はおろか、傍らに行く事さえ許されない。もどかしく、辛い毎日が続いた。

それでもカヨは、きつと治ると信じて疑わなかった。

来年は一緒に桜を見に行くんだから。

それがカヨの口癖だった。

病状は一進一退を繰り返し、カヨは懸命に立ち向かった。

季節は移り過ぎ、やがて年が明けた。

健闘が実り、無菌室を出られたのは、桜が散る頃になってからだ。た。

「イチ、今年はもう、無理かなあ？」

点滴を受けながら、カヨはふいに尋ねて来た。

「ん？エゾ山桜か？そうだなあ。向こうは今が咲き始めってところだけど……」

「じゃあ、今からでも大丈夫なんだ！？」

ぱあっと顔を輝かせたカヨに、俺は苦い顔で言った。

「ダメだよ。まだ病気、良くなってないんだから」

「え、イチのケチ」

ぷうつと顔を膨らませたカヨに、俺はそつと手を伸ばし、その頭を撫でた。

「ごめんな。良くなったらいつでも連れてってやるから」

「うっ、本当？」

「ああ。約束したろ。一緒に行こうって。だから安心して、ゆっくり治せばいいよ」

するとカヨは、安心したように笑った。

「……うん。ありがとう、イチ」

今になって思う。あの時、おぶってでもいいから、連れて行ってやれば良かった、と。

その時の俺は、カヨと桜を見る事が出来なくなるなんて、微塵も考えてなかった。

きっと良くなる。そう、信じていた

。

病院を後にした俺は、いつものごとく会社の仕事と子会社のオーナー業務に追われ、部屋に帰りついたのは深夜になってからだった。なだれ込むようにベッドに入った俺は、すぐに眠りに落ちた。

P i r r i r r i r r i !

枕元に放り出していた携帯電話の音で目が覚めた。

「……誰だよ、こんな時間に」

不機嫌に枕元の携帯電話を引きよせ、ディスプレイを見た。

「っ!?」

瞬間、飛び起きて通話ボタンを押した。

「もしもしっ！」

『笹宮さんですか!?!』

「はいっ!?!」

『こちら富士乃宮市立病院です!杉崎さんの容体が急変しました!すぐにこちらに来て下さい!?!』

Act・50「別れ」(前書き)

病気・医療・ドナーに関する描写は現実と異なる場合がございます。

恐れ入りますが、予めご了承の上お読み頂きますようお願い致します。

Act・50「別れ」

電話を切った俺はすぐに着替え、部屋の外へと飛び出した！
車に乗り込み、力の限りアクセルを踏む！！

ギョルン！キキキキキ！！

交通量の少ない深夜の道路を、目一杯スピードをあげて走り抜ける！

「カヨ！！」

病院に着いた瞬間、俺は乱暴に車の扉を閉め、力の限り走った！
早く！早く行かなければ！！
焦る気持ちばかりが先だっていた。

夜間外来の玄関に辿り着いた俺は、ぜえぜえと息を切らしながら、
受付のインターホンのボタンを押した。

ポーン。

無機質な音が響き、やがてザザツという音と共に声が響いた。

『どつしました？』

「連絡受けて来ました！笹宮です！カヨは！杉崎加代子は！？」

ガチャリと音がして扉が開けられ、カヨの担当ナース、今井さんが
顔を出した。

「笹宮さん！早くこちらへ！！」

いつもは走るなど怒る今井さんが、今日はバタバタと率先して院内を駆け抜けていく。

俺はスリッパの慌ただしい音を響かせながら、夜の静かな病院内をひた走った。

「早く！急がないと、もう……」

案内された部屋で俺は消毒を受けてマスクを身につけ、急いで中に入った。

「カヨ！！」

周りを囲む医師と看護師を押しつけて駆け寄った。

白いベッドの上、酸素マスクを付けたカヨは、苦しそうな顔でこちらを見た。

「……イ……チ……」

弱々しい、声だった。

「カヨ！！」

「……ごめん……ね……。桜……見れそうも……ない……」

「何言ってるんだよ！しっかりしろカヨ！頼むから！！」

手を握り、必死で呼びかける俺に、カヨは弱々しく微笑んだ。

「…………イチ、幸せ……になっ……て……空で……
見て……る……」

「やめるよ！約束しただろ！？なあ！！」

ガクリ。

首がたれ、握っていた手が、落ちた。

「…………カ……ヨ……？なあ、カヨ！！」

ピーっと耳障りな音が響いた。

「…………カヨ？カヨ！？」

「どいて下さい！！」

すがりつくように肩をゆるする俺を、医師が無理矢理引きはがした。
医師が何かをわめき、看護師がバタバタと動く。

「っ！？」

カヨの身体が跳ね、医師がなおもわめいた。

なんだよ、コレ…………。

視界が揺れる中、俺は必死で前へ踏み出した。

「カヨッ！！カヨおおおお！！」

今井さんが俺の腕を掴んだ。

「笹宮さん！ダメです、今は」

「離せっ！！カヨ！カヨおおお！！」

直後、喧騒が消え、ピーーツと耳障りな音が響いた。

……………です。

呟くように、医師が言った。

その言葉に、俺は耳を疑った。

「う……そ……だろ？……なあ、カヨ……」

ふらふらと傍らに行き、しゃがみこんだ。

「……カ……ヨ……、嘘……だよ……お前が……
……そんな……」

頬に、触れた。

「ほら先生！あつたかいんですよ？ねえ！カヨは……」

言葉にならない俺に、医師は静かに首を振った。

「う……あ……そ……ん……な……うそ……
だ……なあ、カヨ？」

手を握った。温かった。

「……カヨ、なあ、起きろよ、お前がいつて言ってた式場、今日、下見して来たんだぞ？ドレスも、お前が好きそうなの、いっぱいあって……」

ぴくりとも、動かない。

「……なあ、カヨ、起きろよ、目え、開けるよ……カヨ、なあ……」

すがりつくいたその時、ふいに肩を掴まれた。振り向くと、そこに今井さんが立っていた。

「……笹宮さん、もう……終わっただんです。休ませて……あげて下さい」

向けられたまっすぐな瞳に浮かんだ、深い、悲しみの色。

「……う……あ……」

瞬間、俺はその場に崩れ落ち、ひざをついていた。

「あ……あ……あああああ……！！！！」

視界を、闇が覆った。

2009年4月28日午前3時42分。

カヨは、死んだ

。

A c t ・ 5 1 「 遺 言 」 (前 書 き)

病気・医療・ドナーに関する描写は現実と異なる場合がございます。
恐れ入りますが、予めご了承の上お読み頂けますよう宜しくお願い致します。

通夜の日は綺麗な満月だった。

身内のいないカヨの為の喪主は、カヨが育ったと云う施設の施設長がやって来て務める事となった。

子会社が経営するセレモニーホールはけっこうな規模だったが、それでも不足なほど多くの人が足を運んで来ていた。

同期、先輩、後輩、上司、他部署の社員に取引先の社員、おまけに守衛まで、会社でカヨと関わりがあっただろう人々はほとんど残らず集まって来ているようだった。

それだけじゃない。友人、知人、近所の人に、病院の医師や看護師、患者やその家族までもが、カヨの為に足を運んでいた。

月光の下、集まった人々は皆一様にカヨの死を悼み、心から悲しんでいるように見えた。

人の真価は死んだ後にこそ分かる物だ。

昔、誰かが言っていたその言葉の意味を、今この時になって思い知る。

カヨとよく仕事で口論を交わしていた「女のくせに」「これだから女は」が口癖の嫌味な上司でさえ、カヨの遺影を前に「俺はこれから先、君以外の誰とやりあえって言うんだ!？」とボロボロと涙を零していた。

誰もがカヨを心から愛し、その死を悼んでいる。それが如実に解る通夜であった。

翌日。同じ会場で行われた葬式は、前夜より更に沢山の人で溢れ返っていた。

カヨが育った施設の仲間達や大学の友達をはじめ、カヨを慕う親し

い友人達が、続々と遠方から駆けつけ始めたのだ。皆一様にカヨの死を悼み、会場はけしてパフォーマンスではない、心から慕う者を失った悲しみに満ちた涙で溢れ返っていた。

そんな中、俺はまるで覚めない夢の中にいるようで、ぼんやりとその光景を見ているだけだった。焼香が終わり、棺に花が詰められ、焼却炉に入れられて骨となっても、俺は涙一つ零す事なく、ただぼんやりとそこに居続けた。目の前の全てが、まるで何かフィルターを通して見えるかのように遠く見えた。

今日の前で起こっているのは、本当に現実なのか？そんな疑問が頭に浮かび、離れなかった。まるで質たちの悪い悪夢だ。カヨが死んで、骨になってるなんて。

葬式が終わり、俺はカヨの骨壺を持って二人の部屋へと帰って来た。春の温かい陽射しが差し込む中、俺はその小さな壺を抱いてぼんやりと思った。

・・・カヨは、本当にもういないんだろうか。

幾つもの思い出が浮かんで消えた。二人で過ごした日々。仕事してるカヨの真剣な表情、喧嘩した時の拗ねた顔、泣き顔、それから、あの、向日葵みたいな、笑顔……。

『 イチ 』

カヨの寂しそうな顔が、浮かんで、消えた。

「……………カヨ……………」

よるよると、歩き出す。台所まで行き、冷蔵庫に入っていた500mlの缶ビールを取り出して部屋へと戻る。そのまま、ふらふらと薬類をしまっておいた引き出しまで歩いて行き、中から買い置きの風邪薬の瓶と箱を取り出す。

それらを部屋の中央に置いていた小さなテーブルの上に置き、缶ビールを開けた。

そのまま薬瓶の蓋を開け、ザラザラと手に載るだけぶちまけて口に放り込む。

それをビールで飲み下し、また薬を口に入れてビールを飲む。それを瓶がすっかり空になるまで繰り返した後、今度は箱入りの風邪薬のカプセルを次々に取り出しては口に放り込み、またビールで飲み下した。

そうして目の前の薬がすっかりなくなってしまった頃、次第に目の前がグラグラと揺れ始めた。身体を起こしていられず、俺は小さく呻き声をあげながら、そのままそこに倒れ込んだ。床の冷たさが心地良い。視界はグラグラと揺れ、身体は沸騰してるみたいに熱かった。

「カヨ、今、行くから……」

そうして、俺の意識は、途切れた。

気が付くと、真っ白な天井が目に入った。

「イチ！気が付いたか!？」

聞き覚えのある声がして、見るとそこに山田さんが立っていた。

「……山田……さん……?」

ふう、と小さく安堵のような溜め息を吐き、山田さんは心配そうな顔で静かに口を開いた。

「気分はどうだ？吐き気や頭痛は？」

「……気持ち悪い……」

頭がグラグラして、胃の辺りがキリキリ痛んで、酷い吐き気がする。ふと山田さんを見ると、さっきまでの心配そうな顔から一転、物凄い怒りの形相を浮かべていた。

「当たり前だ！！この馬鹿っ！！あと少し俺が行くのが遅かったらお前、死んでたんだぞ！？」

大声が頭に響く。どうやら本気で怒っているらしい山田さんに、俺はおずおずと尋ねた。

「……あの、俺、一体、どうして……」

「覚えてないのか！？お前、自分で風邪薬大量に飲んで死にかけたんだぞっ！？」

大きく溜め息を吐き、冷たい声で言い放つ山田さんを前に、俺は思わず混乱した。

「えっ！？俺が？そんな……」

まだぼんやりする頭で、必死に記憶を手繰ってみる。

「・・・・・・・・あ・・・・・・・・」

思い出した。そうだ。俺は確か、部屋で・・・・・・・・。

「思い出したか？まったく・・・・・・・・」

大きな溜め息を吐き、山田さんはくしゃりと俺の頭を撫でた。

「なあイチ、お前が辛いのは良く解る。お前にとってアイツが、どれだけ特別な存在だったのか、俺だって少しは分かってるつもりだ。だけど、だけどな・・・・・・・・」

言葉を切り、山田さんはもう一度大きく息を吐いた。

「・・・・・・・・お前まで、死んでくれるなよ。俺はもう、友達が死ぬとこは・・・・・・・・見たく・・・・・・・・ねえ・・・・・・・・。頼むよ、イチ・・・・・・・・」

目尻を滲ませ、消え入りそうな声で言う山田さんに、俺はギュツと心臓を掴まれたような気持ちになった。

「・・・・・・・・山田さん・・・・・・・・」

まったく俺の目を見つめ、山田さんはゆっくり言葉を紡ぎ出す。

「・・・・・・・・なあイチ、頼むよ。俺だけじゃねえ。カヨだって、お前には生きて欲しいって思ってる筈だ。アイツは、そういうやつだ・・・・・・・・。違うか？」

静かに響く山田さんの声に、俺は何も言葉が出なかった。

「……………生きるイチ。アイツの為にも。お前は、生きて、幸せになれ……………」

その言葉を聞いた瞬間、俺の中にカヨの最期が鮮明に蘇った。

『……………イチ、幸せ……………になつ……………て……………空で……………見て……………る……………』

笑顔が、滲んで、消えた。

「……………あ……………あああああ!!!!!!!!!!」

この日俺は、カヨが死んだあの時以来、初めて、泣いた。

2009年5月3日。カヨが死んで、5日後の事だった。

A c t ・ 5 2 「 前 進 」

二人きりの別荘には、微かに波の音が響いていた。

カヨとの全てを語った俺を、沙織は呆然と見つめていた。

永遠のような静寂を破り、彼女は躊躇いがちに口を開いた。

「……………どうし……………て……………」

俺は静かに答えた。

「……………感染症だよ」

「……………感染……………症？」

淡々と言葉を続ける。

「ああ。白血病患者はさ、普通なら何でもない菌でも、増殖して、命に関わる事があるんだよ」

あれは、症状が落ち着いて一般病棟に移した矢先の出来事だった。

カヨを死に至らしめた菌は、常に人の身体に存在する無害な菌だった。

だけど、白血病にかかった患者には、通常は無害なそれさえ、有害となる。

常に存在する物だからこそ、無菌室でさえその増殖は防げない。

たとえ無菌室から出なくても、結果は多分同じだったろう。

「お兄ちゃん……………」

そつと、抱き寄せられた。

「泣かないで……」

言われて初めて、自分が泣いている事に気付いた。

「……ごめんね。辛い事、思い出させて」

パタリ。

抱きしめられた背中に、滴が落ちた。

「……ごめん。ごめんね……」

パタパタと熱い滴を感じ、俺は優しく頭を撫でた。

「謝るな。俺が勝手に話したただけだ」

「でも……」

瞬間、唇を塞いだ。

「んっ……ふっ……」

熱を帯びた声が漏れた。

そのまま歯列を割って中に入り、まだ微かにシャンパンの香りが残る口内を隅々まで蹂躪する。

「んっ！ふっ……んっ……！」

吐息が、身体が、熱を増していく。

甘い痺れに身を委ねる。熱を追いかけて、味わう事だけに集中する。体中で彼女を感じる事で、俺は余計な思考を振り払った。

カヨはもういない。俺が今守りたいのは。

胸ポケットからそつと取り出した物を、スツと彼女の指に嵌め、唇を離した。

「…………お兄ちゃん、これ…………」

指に光るソレを見て、彼女が驚きの表情を浮かべた。

「良かった。サイズ、合ってたみたいだな」

「そうじゃなくて！これ…………」

驚きの表情を浮かべる彼女に、俺はにっこりと微笑んだ。

「婚約指輪。外すなよ？お前が俺の物になるって印なんだから」

彼女の目元がじわりとにじみ、ボロボロと滴が零れた。

「ばか。泣くなよ。それとも、嬉しくないのか？」

彼女はふるふると首を振り、それからゆっくりと口を開いた。

「……………あたしで、いいの？」

顎を掴み、強引に唇を塞いだ。

「……………んっ……………ふっ……………」

歯列を割り、中へと侵入する。そのまま舌を絡めとり、ねっとりとも味わう。

「ふっ……………んっ……………!」

熱い吐息が絡み合い、俺はようやくその唇を解放した。

「本気じゃなきゃ、こんな事しない。お前は嫌か？選べ。今なら引き返してやってもいい」

口の端をあげた俺に、彼女は小さく呟いた。

「……………嫌じゃ……………ない……………」

その答えを聞いた途端、俺は彼女の足をすくい、抱きかかえた。

「きゃっ！お兄ちゃん!？」

「ジタバタするな。返事した以上、今更ダメだとは言わせない。このまま、もらっ」

ポツと顔を赤くした彼女をそのままお姫様だっこでベッドルームへ運び込んだ。

「きゃっ!」

スプリングが効いたベッドに受け止められ、小さく悲鳴をあげた彼女の上にかぶさり、すぐさま唇を塞いだ。

「……………んっ……………ふっ……………!」

吐息も身体も、もう十分すぎるくらい熱い。

離れた唇から、つうつとひと筋の糸がつつた。

紅く艶めかしいその唇に、俺はもう、歯止めが効かないほどの熱に支配されるのを感じた。

「……………悪い。手加減、してやれそうもない」

「やつ……………おにいちゃん!？」

逃げようと動いた彼女の手首を片手で押え付け、再び唇を塞いだ。
戻る気はもう、なかった。

Act・53「見えない心」

………鳥の声が聞こえる。

俺はまだぼんやりする意識の中、ごろりと寝がえりを打った。

「お兄ちゃん、もう起きないと、遅刻しちゃうよ？」

ガバツと布団をはがれ、途端に冬の寒気が身体を襲う。
ぶるぶると体を震わせ、俺は不満気に口を開く。

「沙織、頼むからいきなり布団をはぐのはやめてくれ」

「いきなりじゃありません。さっきから何度も声かけてるのに、全然起きてくれなかったじゃない。いい加減起きなさい!!」

もう、と腰に手をあて呆れ顔を浮かべている彼女に、俺はしぶしぶ立ち上がり、その場で大きく伸びをする。

「ん~~~~~！今日もいい天気だな。寒いけど」

「仕方ないよ。雪がないだけで、こっちもまだまだ冬だもん」

パタパタと足音をたてて台所へと行く彼女の後ろ姿を見送った後、俺は窓の外を眺めつつ両手にハーツと白い息を吐いた。

「ストーブ点けないのか？」

問いかけると、台所からカシャカシャという音と共に彼女の声が返

つて来た。

「点けてたよー。でもすぐ消したの」

「え、何で？」

俺の不満そうな問いかけに、彼女はジュワツというフライパンの音を響かせながら、あからさまに不機嫌そうに答えた。

「お兄ちゃんが起きないからに決まってるでしょ。あつたかいと起きてもすぐ寝ちゃうんだもん！まったく！」

おかげで自分まで寒い思いをしている、と、随分おかんむりの様子の彼女に、さすがにちよつと罪悪感を覚えた。

「悪かったよ。明日はちゃんと起きるから」

「本当？何か毎日同じ事言ってる気がするけど……」

言いながら彼女は、お盆に朝食セットを載せて部屋に戻って来た。今日の朝食は、出来たてで湯気のたつ卵焼き、味噌汁、ご飯、きゅうりの漬物に味のり。

小さなテーブルに並べられた見事な朝食セットを前に、俺はもう「待て」を言い付けされた犬のごとく腹をぐうぐう鳴かせながら問いかける。

「うんうん。明日こそ大丈夫だから。な、もう飯食っていい？」

「だあめ！ちゃんと顔と手を洗って来なさい。ご飯はそれからね」

子供を叱るような口調で言う彼女に、俺は大袈裟に肩をすくめて見せた。

「はあい。ふう、うちの奥さんは相変わらず厳しいねえ」

もう何度発したか知れない“奥さん”という単語に反応して、彼女の頬がみるみる赤く染まる。いい加減慣れないものなのだろうか。こういうところが、彼女は本当に可愛いと思う。

「ばかつ！もう！早く顔洗って来なさい！！」

彼女に追い立てられ、俺はすすすこと洗面台へと向かう。いつもと変わらない朝の風景だ。

こんなふうに彼女の部屋で過ごすようになって、もうじき半年になるうとしている。

最初は別に部屋を借りようと言ったのだが、自分の部屋は二間続きで部屋があつて広いから二人でも大丈夫だ、という彼女の主張で、ならばと俺がここに来る事になった。

とはいえ、まだ正式に籍を入れてはおらず、泊まり込みに来ているだけの半同棲状態に過ぎないのだが。

プロポーズを受け入れてくれたのも束の間、直後、俺は彼女に言い渡された。

『お互い安心して一緒に暮らして行ける自信が出来るまでは結婚はしたくない。婚約も公表しないで欲しい』と。

最初は強引に納得させようと試みたが、どうしてもと懇願され、断る事が出来なかった。

ならばせめてと一緒に暮らす事を提案したのだが、最初は婚前に同棲するなんて、とそれすら断られそうな勢いだった。

『安心出来るかどうかは、一緒に暮らして見ない事には分からない』

じゃないか』とゴリ押しして渋々納得させ、今に至る訳だが。

それにしても、一体いつまで待てばいいんだろう。まさか彼女、本当は結婚する気なんかないとか？俺が強引に迫ったから断れなかった、なんて事……。

有る訳ないと思いたかったが、あの夜の自分の強引さを思い出すと途端に罪悪感と不安が胸に押し寄せて来た。

それでも、たとえそうなんだとしても、俺はもう彼女を手放す気は毛頭ない。あの夜よりずっと前、キスの雨を降らせたあの日から、俺の心はもう決まっていたのだから。

今は多少強引でも、いつか彼女に心から受け入れて貰えるよう、俺が自分で努力していけばいいだけの話だ。鏡に映る自分に相対し、俺はそんなふうは無理矢理納得させた。

「いただきます」

「はい、どうぞ」

洗顔と手洗いをすませて食卓に戻った俺は、ようやく朝食の席につき事を許された。

「ん、今日の卵焼きはじゃこ入りか。いいね、これ、美味しい！」

「本当！？良かったあ」

ぱあっと顔を輝かせる彼女に、俺は微笑みを浮かべた。

「ああ、本当。お前は本当に料理上手だよな」

彼女の頬が再び薔薇色に染まり、小さく「ありがと」と呟かれた。

ああもう！そんな顔されたら堪らないって。

思わず箸を止めて彼女の顎をくいと持ち上げた。

「こっちも頂きたい」

「……………んっ！……………ふっ……………！」

小さなテーブル越しに顔を伸ばし、塞いだ唇から熱い吐息が漏れた瞬間、ぐいと腕が伸びて来て、俺はテーブルの反対側に押しやられた。

「……………もう。食事中はだめっていつも言ってるでしょ」

「仕方ないだろ。お前が可愛いんだから」

すると彼女は「またそんな事言っつて」と拗ねたような口調で顔を赤く染めた。

「本当だよ。いつになったら信じてくれるのかな？俺の奥さんは」

「……………まだ、奥さんじゃないもの。ほら、早く食べないと二人とも遅刻しちゃうよ？」

ズシン。

胸にかかる重みに、俺は一瞬言葉を失った。

「はいはい。悪かったよ」

小さく溜め息を吐き、食事へと戻るのを見て、彼女も安堵したように食事に戻る。

これも、いつもの光景。

本当、いつまで待てばいいのかな。

滲む不安を見ないフリして、俺は朝食を平らげるのだった。

Act・54「既視感・デジャ・ヴー」

その日俺は、仕事が珍しく早く終わり、たまにはご飯でも作って待っていてよいかと、スーパーで食材を購入してアパートに帰って来た。彼女の住むアパートは、ノスタルジックな昭和の風情漂う木造建築の2階建てだ。

駐車場に愛車のハイエースを停めて鍵を閉め、カンカンと鉄製の古い階段を登る。

食材の入ったビニール袋を手に提げ、2階にある彼女の部屋に向かう。

扉の前で預かっている合鍵を鍵穴に差し、ドアノブを回した時だった。

(ん？何だ？)

鍵は開けた筈なのに、何故かドアが開かない。おかしいと思い、もう一度鍵を差して回してみた。鍵はカチャリと音をたて、反対方向に回った。

(変だな。鍵、閉め忘れてたのか？)

不審に思いながらドアを開けた。

「沙織っ！？」

見ると、彼女が室内の床にうずくまっていた！！

俺は思わずビニール袋を落とし、慌てて中に入って駆け寄った。

「沙織っ！どうしたんだ沙織っ！？」

彼女はお腹を押さえ、額に脂汗を浮かべながら弱々しく声を出した。

「…………お兄ちゃん、何……で……？」

仕事は？尋ねる彼女に、俺は矢継ぎ早に聞き返す。

「俺の事より、お前、どうしたんだ！？腹痛いのか！？」

「…………う……ん……。ちよつと……」

どう見てもちよつとは思えないその様子に、俺は問答無用で彼女を抱き抱えた。

「ちよつ……お兄ちゃん！？」

「いいから！このまま病院行くぞ！！！」

大丈夫だからと遠慮する声を無視して、俺は彼女を強引に車へ乗せた。そのまま運転席へと回り、車を発進させる。

「……………う……」

苦しそうに呻く彼女を横目に、なるべく衝撃が少ないよう気を付けながら、出来る限り急いで病院へと向かって車を走らせる。

夕方の少し混み始めた道路にイライラしながら、彼女の方を見やっ

た。
「悪い、もう少し我慢出来るか？」

彼女は顔を上げ、苦しげに、それでもこちらを見て微笑んだ。

「……うん。大丈夫・夫……」

「ごめんな。もう少しで着くから」

辛そうな彼女の髪を撫でると、彼女はコクリと小さく頷いた。やがて信号に引っかかっていた車の列が動き出し、俺は慌てて彼女から手を離してハンドルを握り直した。

「すみません！急患なんです！！」

病院に辿り着いた俺は、彼女の肩を抱いて支えながら、時間外受付の玄関のインターホンに向かって叫んだ。

『お待ち下さい』

インターホンが切れてガチャリと鍵が開いたやいなや、すぐさまドアを開けて中へ入る。

彼女が緊急処置室へと通されて診察を受けている間、俺は待合室の椅子で落ち着かない気持で待っていた。

不安が広がり、心臓をギュツと掴まれるような痛みを感じた。

覚えのある感覚だった。“あの時”もこんなふうに嫌な感じがした。

俺はまた失うのか！？

最悪の想像が頭をよぎり、懸命にそれを打ち消した。

沙織はカヨとは違う。きっと大丈夫だ。

言い聞かせるように反芻し、じっと待ち続けた。

やがて診察が終わって彼女が病室へ移され、俺は医師に説明を受ける為、カンファレンス室へと通された。

「久しぶりですね、笹宮さん」

何と、偶然にもその医師はあの時のカヨの担当医、高松先生だった。

「お久しぶりです、高松先生」

軽く会釈し、俺は先生の目をじっと見つめた。

「笹宮さん、単刀直入に聞きます。貴方は、樹本さんとどういう関係ですか？」

「婚約者、です」

俺の返答に、先生は何かを考えるように黙り込んだが、やがてスツと口を開いた。

「……そうですか。笹宮さん、率直に言いましょう。樹本さんは、妊娠されてます」

「妊娠！本当ですか!？」

驚く俺に、先生は低い声で言葉を続けた。

「ええ。ですが……」

言葉を濁す先生に、俺は思わず声を荒げた。

「先生！はつきり言って下さい！」

「……子宮外妊娠です」

子宮外！？

「あの……それは、つまり……」

先生は静かに言葉を続けた。

「非常に残念ですが、このままでは母体も危険です」

お子さんは諦めた方が良いでしょう。

無機質な白いカンファレンス室に、先生の静かな声が、重く響いていた。

Act・55「初雪」

高松医師の話聞いた後、俺は彼女の病室へと向かった。
ドアの前で少しだけ躊躇う。

しっかり、しないと。

気持ちを奮い立たせ、俺はドアを開け、中へと足を踏み出した。

「沙織、具合、どうだ？」

白いベッドの上、彼女は点滴を受けながら、苦しそうに顔を歪ませていた。

「……ん……、大丈夫、さっきより、大分……良い……」

弱々しい声で答える彼女の姿に、俺は、ギュツと心臓を握りつぶされるような痛みを覚える。こんな光景を見るのは、やはり、辛い。

「……沙織、辛いところ、ごめんな。ちょっと話あるんだ」

「はな……し……？なあに、おにい……ちゃん……」

寝ている彼女に近寄り、その目をじっと見つめた。

彼女は額に脂汗を浮かべながら、それでもじっと俺の目を見つめ返した。

「……子供の……事なんだけど……」

躊躇いがちに口にした俺に、彼女の瞳が揺れた。
俺が何を言うつつもりなのか、分かっているかのように。

「……沙織……、残念だけど、今回は……あきらめよう……」

俺の言葉に、彼女はふうと小さく溜め息を吐いた。

「……わかってる。仕方、ないんだよね……」

うつむき、力なく言う彼女の手を握り、俺はゆっくりと口を開いた。

「……沙織、頼む。分かってくれ。お前まで失ったら、俺は……」

目の奥が熱くなり、声が震えた。“あの時”のカヨと沙織がダブって見えて、どうしようもないくらい、不安だった。

「……頼む……一人に……しないでくれ……」

彼女は弱々しいながらも俺の手を握り返し、もう一方の手で俺の頭を優しく撫でた。

「……大丈夫。あたしは……大丈夫だから……」

彼女が手術を受けたのは、その日の夜の事だった。

完全看護の病院で付き添いする事は許されず、麻酔から覚めない彼

女を残したまま、俺は病室を後にした。

翌日。

退院して来た彼女は、俺に自分の部屋へ戻ってくれないかと言いつつ出した。

「なあ沙織、俺と一緒に暮らすの、嫌になったのか？」

懇願するような問いかけに、彼女は静かに答えた。

「違うよ。ただ、しばらく一人になりたいだけ。お願いだから、今は、そつととしてくれないかな」

その無機質な声に、遠い記憶が蘇った。

彼女が初めて俺の部屋に来た、あの、雨の日。
唐突に見せた、彼女のあの、無機質で、冷たい表情……………。

「沙織……………」

どうしていいか、分からない。

今彼女にこんな顔をさせているのは多分、俺だ……………。

結局俺は、荷物をまとめて部屋を後にした。

数か月ぶりに自分のマンションへ戻ったその時、外は酷く冷え込み、雪が降り出していた。

しんしんと降る、今年最初の雪を見ながら、俺は一人、彼女を想った。

あの木造の寒い部屋の中、彼女は今頃、一人泣いているのだろうか。自分の無力さが嫌で、やりきれなかった。

守るところか、俺は、彼女を傷付ける事しか出来なかった……………。

心ままで凍てつきそくな、寒い、冬の日の事だった。

Act・56「枷たる書」

彼女の部屋に“行けなく”なつてから数日が過ぎた。

会えない事に不安を覚えながら、それでも俺は、何も出来ないままだった。

会う事はおるか、電話やメールさえ出来ない。

もし別れを切り出されたら？そう思うと怖くて、自分から彼女に連絡する事は躊躇われた。

渡されたままの合鍵を使う事も出来ないまま、気が付けば次の日曜の朝を迎えていた。

今行けば、きっと彼女は部屋にいるだろう。でも……。

どんな顔で会えばいい？

何も出来ず、ただ傷付けただけの俺が、一体どんな顔で会って言うんだ。

自問自答していたその時だった。

P i r i r i r i . . . !

鳴り出した携帯電話に、俺は慌ててそれを手に取り、ディスプレイを見た。

(誰だ、これ?)

表示されている登録外の番号の羅列に、俺は躊躇いながら通話ボタンを押した。

「……はい、笹宮ですが」

『おはようございます。お休みのところ申し訳ございません。会長秘書の磯貝です』

どうして磯貝さんが？俺の携帯電話にかけてくるなんて、今までなかったのに。

「おはよう……ございます。一体何の御用ですか？」

つい剣呑とした反応をしてしまった俺に、電話の向こうから申し訳なさそうな声が返って来た。

『すみません。実は会長が、どうしても笹宮さんに出て来て欲しい』

「は？俺にですか？一体また何で？仕事の事なら、明日以降伺わせて頂きますが」

すると彼女は、躊躇うように言葉を続けた。

『……ええ。あの、それが……』

彼女にしては珍しい言葉の濁し方に、俺は途端に何か嫌な予感があった。

まさか……。

「磯貝さん、何をそんなに躊躇ってるんですか？いつそはつきり言ったらどうぞです」

すると彼女は、すうと受話器の向こう側で息を吸い込んだかと思う

と、今度はいつもの彼女らしくない冷たさを帯びた声でこう言った。

『……では遠慮なく。会長は貴方に、見合いをしると申し上げております』

「はっ！？見合い！？何を馬鹿な！そんなの、契約違反もいいところでしょう！？」

突っぱねようとした俺に、彼女はなおも畳み掛けるように続けた。

『契約には反しません。公正証書をよくご覧になって下さい。杉崎加代子さん亡き後、次の結婚については不問としていますから』

その言葉に、俺は部屋の隅に置いた書類ケースの中をバサバサと漁り、中から一枚の書類を取り出した。一年前の“あの時”の後日、会社の利権譲渡約束を含めた内容を盛り込み、弁護士立会の元であらためて作成された“公正証書”だ。

“あの時”に司法書士の立会で作成した最初の書類は、単なる個人同士の誓書に過ぎなかった。しかし、こちらは違う。法的な効力を持つ、対会社との正式な公的書類なのだ。

その中身を隅から隅まで見渡すと、確かにそんな記述があった。

そうだ。確かにあの時俺は、その項について確認した。だけど、カヨがいなくなつた後の事なんかどうでも良かった。だからこそ、それに異議を唱える事などしなかった。

それがまさか、こんな形で枷になるとは……。

今の今まで忘れていた焦りを隠し、俺は冷静に言い放った。

「……たしかに、証書には有りますね、そんな記述。でも、だからって俺がああ男の命令どおり見合いする謂われはない筈です」

その反論に、電話の向こうの彼女はなおも冷静に返した。

『笹宮さん、いえ、一様いちよう。貴方は我が社の後継としてのご自覚はありますか？証書がある以上、貴方にはどうあっても会社を継いで頂かねばならないんですよ？』

冷たさを増したその声に、思わず気圧されそうになる。だが、ここで負ける訳にはいかない。

「自覚はありますよ。だからこそ、既に譲渡された会社の運営は問題なくこなしている筈です。利益だつてあげているでしょう？」

カヨが生きていたあの頃もそうだが、沙織が入院した時だつて、本当はずつといてやりたいのを我慢して、通常の会社業務と子会社の運營業務の両立をして来たのだ。今更文句を言われる筋合いなどない。

『それとこれは別です。今日のお見合いのお相手となられる方は、我が社の最大手取引相手の御令嬢。貴方が断れば、我が社は先方に恥をかかせたと怒りを買う事になるんですよ？』

その意味の示すところは一つしかない。つまりは俺に、会社の為に見合いを受けると、そう言っているのだ。

思わず溜め息が出た。もう断るといふ選択肢を許される状況ではないらしい。今日が見合い当日というからには、これはもう確信犯だろう。明らかに俺が断れない状況を作ってから言つて来ているのだ。

「・・・分かりました。いいでしょう、行きますよ。それで、時間と場所は？」

こうして俺は、望んでもいない見合いをする事になった。
それがあんな事になるなんて、その時の俺はまだ、知る由も無かつ
た。

Act・57「縁談」

午後三時。

俺は駅前にあるシティホテルのラウンジにいた。

「お待ちしておりました、一様はいらして頂けて安心しましたわ」

そう言つて、目の前の女性は安堵のため息を漏らした。

キリリとした美しい切れ長の目。整えられた眉。通つた鼻筋。控え目ながら美しくどこされた化粧。

セミロングの黒髪は艶やかに輝き、彼女が動く度にサラリと揺れている。

かつちりとしたグレーのスーツに黒ぶちの眼鏡という一見地味な格好さえ、彼女にはその理知的な美しさを引きたてる材料となつていくように思えた。

ラウンジ内にいる他の男性達の向ける羨望の眼差しを感じながら、俺は冷たさを持った声で彼女に言い放つた。

「こんな休日になんか。秘書業務も大変ですね、磯貝さん」

すると彼女は、少しだけ困つたような笑みを浮かべて言った。

「いいえ。会社の為に働くのが社員の本分ですから」

「ほう。それはまた、随分と愛社精神があたりなんですね。磯貝さんのように愛社精神溢れる優秀な社員がいるなら、我が社の将来も安泰というものでしょう」

口の端を持ちあげて見せた俺に、彼女はにっこりと笑つた。

「有難う御座います。一様が後継となられた時には、私が秘書としてお仕えさせて頂く事になりますから。どうぞ宜しくお願い致しますね」

その笑顔に、俺は自分が彼女に対し、とんでもない思い違いをしていた事を悟った。

しおらしいだけの女性かと思っていたがとんでもない。さすが、あの男の秘書をしているだけの事はある。

内心舌を巻いていた俺をよそに、彼女は美しく微笑んだ。

「さあ、先方がお待ちです。そろそろ参りましょう」

彼女に先導されて辿り着いたのは、ホテル最上階の一角にあるVIPラウンジだった。

そこで俺を待っていたのは、いかにも上品そうな初老の男性と、艶やかな着物を纏った美しい女性、そして、不機嫌そうに顔をしかめたあの男の三人だった。

「遅いぞー。^{おしは}何をしていた？」

不遜な声で言ったあの男に、俺はギロリときつい視線を返した。

「すみませんね、なにぶん急な話だったもので」

「なんだその態度は。まったくお前というやつは……」

今にも飛びかからん気迫を見せたあの男を前に、向かい側に座って

いる初老の男性が割って入った。

「まあまあ、その事を荒立てずとも。私も千歳も少し早く来すぎただけで、一君が遅れた訳じゃないだろう?」

穏やかにいさめるその人に、あの男は仕方ないといったように矛を収め、俺に「早く座るように」と促した。

「一君だったね。あらためて挨拶させて貰うよ。私は三城院さんじょういん 秀人ひでひと君の祖父であるこいつとはかれこれ50年来の付き合いだ」

向かい側に座るあの男を指し、三城院氏にはこやかに笑った。

一見穏やかに見える三城院氏だが、その全身からは、一般人とは明らかに異なる圧倒的な気迫を放っている。緊張が走る。この人もやはり、あの男同様、多くの修羅場を潜り抜け、人の上に君臨する器を得た兵つわものなのだ。

「はじめまして三城院会長。笹宮 一と申します」

「そんなにかしこまらなくてもいいよ。どうせ内輪の席だ。気楽にやろうじゃないか」

そう言っつて彼は穏やかに笑った。

三城院 秀人。世界に誇る電子技術工学の最先端技術を持つ三城院グループの現会長。

今俺の隣にいる男、富士乃宮ふじのみや 敬三けいぞうとは旧知の仲であり、古くから業務提携を行って来たと聞く。まさかこんな大物が出て来るとは・・・。

「こちらは私の孫の千歳ちしせ。つい最近までウィーンへ音楽留学してい

てね。先月帰国したばかりで少々世間知らずなところがあるんだが、宜しく頼むよ」

すると隣にいた晴れ着姿の女性が慄然とした口調で口を開いた。

「おじい様！世間知らずなんて言い方は失礼ですわ。まったく、いつまでわたくしを子供扱いなさるおつもりですか？もう・・・」

憤慨する彼女に、三城院氏は「悪い悪い」と苦笑を浮かべていた。

「一さん、本気になさらないで下さいね。わたくし、そんなに世間知らずではございませんのよ？」

そう言つて少し眉間にしわを寄せた彼女は、それでもうつかりすると見惚れそうになるほど美しかった。

大きな瞳、くつきりとした二重瞼、通つた鼻筋、形の整つた唇。結いあげられた黒髪は艶やかに輝き、肌は雪のように白く、頬は桜色に色づいていている。

その姿はあまりに凜として美しく、磨き上げた黒曜石のような輝きを持つその瞳は、意思の強さを伺わせる強い光を宿していた。

「ええ、大丈夫ですよ。それにしても驚きました。三城院会長にこんなお美しいお孫さんがいらしたとは」

俺の言葉に、目の前の綺麗なお嬢さんはくすりと上品な笑みを零した。

「あら。わたくし、心無い贅辞を頂いても嬉しくありませんわよ？」

「本心ですよ。こんな美しい方では、私のような者では不相応とい

うものでしょう。残念ですがこのお話、お断りして頂いて結構ですよ」

「――何を言い出すんだお前は！」

その怒鳴り声をよそに、お嬢さんはさも可笑しそうにくすくす笑い出した。

「千歳？」

不審な顔をして三城院氏が見やると、彼女は楽しそうに笑いながら言った。

「面白い方ですわね、一さんて。初めてですわ、あなたみたいな方」
くすくすとさも可笑しそうに笑う彼女に、俺はゾクリと寒気を覚えた。

なんだ、この感じは？

嫌な予感が駆け巡る。

これ以上このお嬢さんに関わってはいけない。
本能がそう感じていた。

「いいですね。おじい様、このお話、お受けします」

「なっ！？」

驚く俺に、お嬢さんはなおもにっこりと笑いながらこちらを見て続けた。

「ふふ。これから宜しくお願いしますわね、」さん

そう言って彼女は、ことさら綺麗に微笑んだのだった。

Act・58「美しき華」

お嬢さんの言葉に、俺は思わず耳を疑った。

「あら、何をそんなに驚いてますの？」

にっこり微笑む彼女に、俺は思わず立ち上がり声を荒げた。

「あんた正気か！？この話を受けるって、意味わかってんのか！？」

口元に手を当て、お嬢さんはくすくすといかにも可笑しそうに笑いながら答えた。

「それが本質ですの？やっぱりーさんて面白い方ですわね」

ギロリと睨みつけてやったが、彼女は全く気にも留めないようにくすりと笑うばかりだった。

「話にならないな。とにかく俺はこの話を受ける気はない。他に心に決めた相手もいるんでね」

その言葉に、隣にいたあの男がガタツと音をたてて立ち上がり声を荒げた。

「なんだと！？一、お前、またどこの馬の骨とも知れない女にうつを抜かしているのか！？」

物凄い形相を浮かべるあの男に、俺は微塵も臆せず堂々と言い放った。

「ハン！アンタの決めた相手と結婚なんてまっぴらごめんだね。俺の結婚相手は自分で決める！！！」

俺は三城院氏を見やり、頭を下げた。

「すみません三城院会長。そういう訳で、このお話、お断りさせて頂きます」

一礼し、スタスタと出口へ向かって歩き出した。

後方からあの男が何やら怒声をあげていたが、知った事ではない。これだけ派手にぶち壊しにすれば、まさか先方も話を進めようなどとは思えない。

会社間の事は多少気がかりではあるが、三城院氏はこれをネタにどうこうするような器の小さい人間ではないだろう。

大方俺とあのお嬢さんを結婚させて両社の繋がりを深くしようといった算段だったんだろうが、まったく馬鹿げた茶番に付き合わされたものだ。

「お待ち下さいな、一さん」

パタパタと草履の音を響かせ、晴れ着姿のお嬢さんが俺に追いついて来た。

「……はあはあ。足、早いんですね。追いつけないかと思いましたが」

胸に手を当てて呼吸を落ちつけながらにっこり笑みを浮かべた彼女に、俺は出来るだけ冷たく言い放った。

「何の用です？あなたとのお話はさきほどお断りした筈ですが」

「あら。その前にわたくし、申し上げましたでしょう、お受けしますと。わたくし、一さんの事が気に入りましたの。断りを了承するつもりはございませんわ」

そう言つて彼女は、華のように美しく笑つた。

「は！？何でまた？あんたくらいのお嬢さんなら、相手くらい腐るほどいるだろ？」

これだけの美貌で、しかも三城院という名家のお嬢様だ。それこそ相手など選びたい放題だろう。なんだつて俺なんかに……？そんな俺の疑問をよそに、彼女は口元に手を当て、いかにも可笑しそうにくすくす笑い出した。

「何がおかしい？」

思わずムツとなつた俺に、彼女はあくまでにこやかに答えた。

「ごめんなさい。やっぱり一さんて面白い方だと思ひまして。今までの方なら、わたくしを前にした途端目の色を変えてましたから」

その様は容易に想像がつく。この美貌だ。引きあわされた相手はすぐにも夢中になつたらう。

「それに、三城院の力を手に入れられるチャンスを、ああも簡単に投げ出されるなんて。ますます面白いですわ」

興味深そうにこちらをじつと見つめるお嬢さんに、俺は思わず溜め

息を吐いた。

「俺はあんたに興味はないし、三城院の力をそんな形で手に入れるつもりはない。もしやるなら、自力で手に入れてみせるさ。あんたっていうツール抜きでな」

するとお嬢さんは満面の笑みを浮かべて言った。

「面白い方。こんな面白い方、他にいなくてよ。一さん、わたくし、決めましたわ」

「は？決めたって、何を」

「わたくし、あなたの妻になります。覚悟していて下さいね」

そう言って彼女は、いつそう美しく微笑んだのだった。

その姿はいつそ見惚れるほどに美しく、その瞳は輝きに満ちていた。

(・・・厄介な事になっちまった)

思わぬ事態に、俺は嫌な予感的中した事を悟った。

やっぱりこのお嬢さんに関わっちゃいけないかった。

面倒な事になりそうな気配をビシビシ感じながら、俺は今日の見合
いを受けると言ってしまった事を、今更ながら後悔するのだった。

Act・59「魔性」

あの見合い以来、お嬢さん【三城院 千歳】さんじょういん ちとせは、しょっちゅう俺の前に姿を現すようになっていた。

「一さん、ごきげんよう」

サラリ。揺れる長い黒髪を掻きあげ、彼女は美しく微笑んだ。

今日の彼女は、あの日のような和装でなく洋装だ。綺麗なワインレッドのドレスワンピースに、上質な白いファーを纏い、開いた胸元には美しいダイヤのネックレスが輝いている。

恐らく彼女なら、たとえジーンズにTシャツというラフな服装も問題なく着こなしてしまう事だろう。まったく、美人というのは凄い。そんな、例えるなら大輪の薔薇のように美しい彼女を前に、俺はいつものごとくふうと溜め息を吐き、書類の束から視線を外さずに答えた。

「悪いが、今手が離せないんです。用がおありなら早くおっしゃって頂けませんか」

通常の会社業務を終え、夜になってから子会社のオーナー業務にとりかかっている俺には、正直このお嬢さんの相手をしてやれる時間も心の余裕もない。

早く片付けて、今日こそ沙織のところへ行って話したいのだ。

(沙織・・・・・・・・)

もう2週間近く、顔を見る事はおろか、話す事さえ出来ていない。アイツが何を考えているにしても、俺はもう限界だった。とにかく

会って話したい。

その為には、こんなお嬢さんの相手をしている暇など一分たりとも
ありはしない。

「ふふ。相変わらずお仕事熱心でいらっしやいますのね。わたくし、
そういう男性は嫌いじゃございませんことよ」

いかにも楽しそうな弾んだ声で言う彼女に、俺はあからさまに顔を
しかめた。

「それはどうも。しかしあのお話はあの場でお断りした筈です。い
い加減毎日ここにいらっしやるのはおやめ頂けませんか」

冷たく返すと、彼女はさも楽しそうに笑みを漏らした。

「ずいぶんつれないんですね。いいんですの？フィアンセである
わたくしにそんな態度をとり続けていると、いずれ後悔する事にな
るかもしれませんわよ？」

その言葉に、俺はピタリと手を仕事の手を止め、ギロリと睨みつけ
た。

「後悔ね……。面白い。どういう後悔をする事になるのか、教
えて頂きましょうか」

「やっとこちらを見て下さいましたわね。ふふ。そんな顔なさらな
いで。本当は最後まで手札は見せないつもりでしたけど、ワンサイ
ドゲームじゃつまりませんものね」

妖艶に笑う彼女に、ゾクリと悪寒が走る。

何だ？一体何を考えている？

「沙織さん……でしたかしら？あの方、最近富士乃宮のおじ様の系列病院を利用なさってるんですね」

どうして沙織の事を！？

まさか……。嫌な予感が駆け巡り、俺はツカツカと彼女に歩み寄った。

「……どうしてアンタがアイツの事を！？」

「ふふ。顔色が変わりましたわね。三城院の力で調べられない事な
どございませぬのよ？あの方と一さんがどういふ関係かも、ね……」

唇が近付き、甘い香りが香る。

「同じ女性として同情しますわ。あんな事、人に知られてはきつと生きていくのも辛くなりますもの」

「アンタっ、まさか……！」

ギリリと拳を握り締めた俺に、彼女はにっこり微笑んだ。

「ご安心なさって。まだ何もしておりませんわ。ただ……」

緊張が走る。目の前のお嬢さんは、相変わらず美しく微笑みながら言葉を続けた。

「……もし破談になるような事があつたら、このお話、誰かが広めてしまつかもしれませんわね」

「綺麗な顔して脅迫か。三城院家のご息女ともあるう方がそんな手段に出られるとはね」

ギロリと睨みつけたが、彼女はまったく動じた様子もなくサラリと返してきた。

「わたくし、欲しいものを手に入れるのに手段は選ばない主義なんですの」

サラリ。肩にかかる髪をかきあげ、妖艶に微笑む。
ソクリ。

悪寒が走る。怪しいまでの美しさがそこにあつた。

「ねえーさん、悪いお話ではないでしょう？わたくしと婚姻を交わせば、三城院の権力はいずれ貴方のもの。その上このわたくしも手に入る……」

白く細い両腕が首に絡みつき、その美しい顔が間近に寄せられた。

「……怖い顔。ふふ。何をお考えでいらっしやるのかしら？」

この女は、やると言ったら本当にやるだろう。躊躇いなく。

沙織……。

『おにいちゃん』

彼女の笑顔が、浮かんで、消えた。

「……………わかった」

低く呟くように言った後、すうっと一息吸い込み、目の前の魔女の瞳をまっすぐに見つめた。

「アンタと結婚しよう。ただし、アイツに手を出して見る。俺がアンタを、地獄に叩き落としてやる！！」

目の前の魔女は、満足そうに微笑み、唇を塞いだ。

ねっとり、味わうように絡むそれを、俺は無機質に受け止めた。

「……………ふふ。誓いの口付けです。ーさん、これから妻として宜しく願いますわね」

そう言って妖艶に微笑む彼女は、魔性そのものだった。

Act・60「冷たい別れ」

ふいに携帯電話のメロディが鳴り出した。

「あつ……」

乱暴に腕を引きはがされた千歳お嬢さんがこちらを恨めしそうに見たが、俺は構わず胸ポケットに入れていた携帯電話を取り出し、素早くそのディスプレイを見た。

「なっ!?!」

思わず驚愕の声をあげた。

無機質なディスプレイに表示されたそれは、沙織からのメールだった。

たった一言。

『さよなら』

と……。

すぐさま携帯電話のアドレス帳を開き、沙織の携帯電話へとかけた。

トゥルルルル……

響くコール音が異様に長く感じる。

5回ほど鳴った時だったろうか。

『……はい』

繋がったー！

安堵感と不安がごちゃ混ぜになり、俺は一気にまくしたてた。

「さっきのは何だよ!? 一体どういう意味だ! まさか……」

電話の向こう側から、深い溜め息が漏れるのが聞こえた。

『……そのままの意味。ごめん。あたしもう、耐えられそうにないから』

「耐えられそうにない? 何に?」

矢継ぎ早な問いかけに、彼女は暗く沈んだ声で答えた。

『苦しいの。これ以上一緒にいても、あたしきつと笑えない。だから……』

終わりにしよう。

殴られたような衝撃を覚えた。

どうして? 何でこんな事に!?

瞬間的に考えを巡らせたが、答えは出なかった。

「なあ、そんな事言わないでくれよ。俺はお前がいないとダメなんだ、頼むよ……」

半ば懇願するように言ったその時、横からひょいと携帯電話が奪われた。

「貴女が沙織さんですか? 初めまして。わたくし、一さんの婚約者

の三城院 千歳と申します」

「やめろ!!!返せ!!!」

奪い返そうとしたが、素早く逃げられ、その手を掴む事さえ叶わなかった。

「……ええ。一さんの事はこれからわたくしがしっかり支えていきますわ。ですから貴女は遠慮なくご自分の人生を生きて頂いて構いませんのよ」

笑みすら浮かべ、お嬢さんは静かにそう口にした。

「やめろ!!!」

思わずつかみかかり、強引に電話を奪い取った。

「沙織!!!違う!!!俺が好きなのはお前だけだ!!!」

『何が違うの?今そこで一緒にいる人と婚約したんでしょ?あたしの所に連絡一つよこさなかったのは、そういう……事だったんだよね。よく、わかったから……』

ズキン!

電話の向こう側から響く酷く無機質な声に、俺は心臓を掴まれたような痛みを覚えた。

まただ。また俺は、彼女を傷付けてしまった!!!

一番守りたい、守らなきゃいけない相手なのに!!!

「沙織!!!頼む!!!俺は、お前を、愛してるんだ!!!信じてくれ!

「！」

『信じるって何を？それともさっきの話は嘘なの？』

「それは……………」

頭の中に、色々な思いが駆け巡った。

今彼女に真実を打ち明けたら、きっと彼女は罪悪感にかられるだろう。

自分のせいで俺が望まぬ婚約を受け入れたなんて知ったら、優しい彼女は自分を責めるに決まってる。だけど、打ち明ければ俺の彼女への想いは嘘だと思われるってしまうだろう。そんな思いが俺を躊躇させた。

『もういい。わかったから。いいよ、あたしはもう、いいから。その人と、お幸せに』

さよなら。

ツーツーツー……………。

切れた。

「ちっ！！」

思わず舌打ちして走り出すと、後方からお嬢さんの声が響いた。

「一さん！？何処へ行かれるんですの!？」

無視して歩を進める。一刻も早く彼女のところへ行かなければ！！

焦る俺の手を、お嬢さんが掴んだ。

「あの方の元へ行かれるんですね!？」

「アンタには関係ない!」

掴まれた手を乱暴に振りほどき、まっしぐらに外へと向かう。今この時間なら、まだ道路は込んでいる。アイツの部屋へは、徒歩で行った方が早いだろう。そう思い、ビルの外へ飛び出した。

「お待ちになって!」

道路脇の歩道前で、お嬢さんに腕を掴まれた。

「離せ!!早く行かないと、アイツが!!」

「行かせません!!一さんの妻になるのはわたくしですよ!?!?他の方のところへ行くだなんて許せません!!」

「うるさい!!邪魔するな!!」

思わず乱暴に腕を振り払ったその時だった。

ドンッ!!

反動で、お嬢さんの身体が道路へと突き飛ばされた。

ププププーーーーッ!!!!!!

大きなクラクションが鳴り響いた直後だった。

目の前を、眩しい光が覆った。

ドンッ！！！！！

物凄い衝撃音と共に、お嬢さんの身体が宙を舞うのが見えた。

ギョルルルルル！！！！

響いたブレーキ音とタイヤの軋む音。

目の前に停まった大きなトラック。

少し先の道路の上、広がって行く血だまりが見えた。

叩きつけられるように下へ落ちたお嬢さんは、ダラリと手を広げ、その脚はあらぬ方向へ曲がっていた。

「お嬢さん！！」

夢中で駆け寄った。

「お嬢さん！！しっかりしろ！！お嬢さん！！」

広がっていく血の海の中、悲鳴のように叫ぶ俺の声が、虚しく響き渡っていた。

Act・61「誓い」

やがてトラック運転手が呼んだ救急車によって千歳お嬢さんは病院へと搬送された。

傍目で分かる程の大怪我を負った彼女は、直ぐに緊急手術となった。

「申し訳ございません！俺が、俺が彼女を……」

駆けつけた三城院会長の前で床に額をこすりつけて謝罪する俺の頭上で、彼の静かな声が響いた。

「……頭を上げなさい」

顔を上げると、彼は静かに、けれど固い声で言った。

「私は一方的に君だけに責任をなすりつけるつもりはない。今はとにかく、一緒にあの子が助かる事だけを祈ってくれないかね？」

俺は頷き、手術室の扉を見つめた。

助かって欲しい。ただそれだけを祈りながら……。

それからどれくらい経っただろう。やがて手術中のランプが消え、中から手術衣を身に纏った医師が現れた。

「先生、千歳は？」

静かに尋ねた三城院会長に、医師はぐつたりとした声で答えた。

「……安心して下さい。傷の縫合は完了しました。命の危険も

ありません」

ただ……と医師は言葉を濁らせた。

「なんですか？はつきりおっしゃって下さい」

静かに、しつかりした口調で言う三城院会長に、医師はゆっくりと告げた。

「……両脚を、複雑骨折していて、神経にも損傷が見られます。もしかしたら、今後障害が残るかもしれません……」

障害！！

「つまり先生、千歳は、あの子は……」

「……リハビリ次第では良くなる可能性も有りますが、最悪の場合、一生、歩けなくなるかもしれません」

白い廊下に、医師の言葉が、重く、響いた。

「三城院会長……」

「……一君、悪いが、今は帰って貰えないか。後ほどこちらから連絡させて貰う」

肩を震えさせ、こちらを振り向きもせずと言った彼に、俺はそれ以上何も言葉がかけられず、その場を後にするしか無かった。

翌日。

俺は三城院会長からの連絡で病院へとやって来た。
目覚めた千歳お嬢さんが俺を呼んでいるから、との事だった。

病室の前。俺はすうと息を吸い込み、ドアをノックした。

「どうぞ」と声がするのを確認し、ノブを回して扉を開けた。

そこは病室というには不相応なくらい広い、ホテルの一室のような造りの部屋だった。

ただっ広い豪華な部屋には、小型の冷蔵庫にお洒落なクローゼット、大型テレビに立派なソファ、テーブル、そしてクイーンサイズの大きなベッドが設置されていた。

上半分を起こした状態のそのベッドの上に、腰から下に布団をかけた患者服の千歳お嬢さんがいるのが見え、その横には、静かに佇む三城院会長の姿があった。

「ーさん、来て下さったのね」

ベッドの上のお嬢さんが、嬉しそうに笑った。

頭に包帯を巻かれ、綺麗な顔にも白い絆創膏が貼られているのが痛々しい。

そんなお嬢さんの隣に立っていた三城院会長が、こちらを見て静かに言った。

「・・・こちらへ来なさい」

「は、はい。失礼します」

俺は一礼し、中へと足を踏み入れた。

促されるまま千歳お嬢さんの傍らに置かれた椅子に腰かけると、彼女は嬉しそうに微笑んで口を開いた。

「ふふ。良かったですね。もうあの方の元へ行かれてしまったのか
と思いましたもの」

その笑顔を見て、複雑な気持ちになる。

確かにあの時までには沙織のところに行くつもりだった。あの後だつ
て、行こうと思えばすぐにでも行けた。だけど……。

「おじい様、ちょっと席を外して下さるかしら？」

「千歳、だが……」

躊躇う三城院会長に、千歳お嬢さんは真剣な顔で言った。

「お願い。一さんと二人で話したいの」

その表情を見て、三城院会長はしばらく黙っていたが、やがて頷き
部屋を出て行った。

パタリと部屋のドアが閉められ、だだっ広い病室には俺と千歳お嬢
さんの二人だけが残された。

お嬢さんはこちらを見てにっこりと微笑んだ。

「ようやく二人きりになれましたわね。一さん、聞きました？わた
くしの脚の事……」

俺は無言で頷いた。

「そうですね……」

目を伏せ、黙りこんだお嬢さんに、俺は何も言葉が掛けられず、重

い沈黙が流れた。

やがて静寂を打ち破り、お嬢さんは静かに口を開いた。

「……わたくし、もう、満足に歩く事さえ叶わないんですわね」

「……すまない。俺の所為でアンタは……」

思わずうつむくと、俺の頬をお嬢さんの手が包み、強引に上を向かせた。

お嬢さんはまっすぐに俺の目を見つめ、微笑みながら静かに言った。

「ねえーさん、そんな顔なならないで。貴方が傍にいて下さるならわたくし、例え歩けなくなっても構いませんの」

「えっ……」

驚く俺の口をお嬢さんが塞いだ。

そのまま歯列を割って熱い舌が口内へ入り込み、俺のそれと絡み合った。

熱い息が漏れ、しばらく後にようやく唇を解放された時、お嬢さんは頬を紅潮させながら静かに言った。

「……あの方の事はお忘れになって。本当にわたくしのものになって下さい。それで全ては帳消しにしますわ」

その目に宿る真剣な光を見た時、俺は覚悟を決めた。

「……お嬢さん。……わかった。約束する。アイツの事はもう……忘れる……」

その答えに、お嬢さんは満足そうに微笑んだ。

「ーさん、キスして下さいな。貴方から。私への誓いの証として」

その細い肩が微かに震えるているのを見た時、思わずドキリと心臓が跳ねた。

お嬢さんの顎をくいと掴み、上を向かせると、そのままその形の綺麗な紅い唇を塞ぐ。

歯列を割り、中へ滑り込ませた舌を、お嬢さんのそれと絡ませ、ゆっくりと時間をかけて熱を味わう。

「……………んっ……………ふっ……………」

甘い声が漏れ出したお嬢さんの上体をそっと抱き寄せた。

その細い身体が少しだけビクリと震え、それからスッと俺の背に腕が回った。

もう沙織には会えない。

その現実の冷たさを打ち消すように、俺はただ、貪るように熱に身を委ね続けるのだった。

あの事故の日から半年が過ぎた。

千歳お嬢さんはあれから必死にリハビリに励んでいたが、脚にはやはり障害が残り、車椅子生活を余儀なくされる事となった。

だが彼女は、そんなハンディなどものともせず毅然と振る舞っていた。

大輪の薔薇の如く気高く美しいその様は、例えどんな状況であれ人を魅了する。

婚約発表のレセプションパーティーで、彼女が車椅子でありながら堂々と振る舞うその様を目にした時、俺は密かに感動さえ覚えた。

「強いな、アンタは」

会場を後にした車の中でそう言ったら、彼女は一瞬驚いて、けれどすぐに妖艶に微笑みながらこう返した。

「ええ。わたくし、たとえどんな事になると、一さんがいて下さるならいくらでも強くなれますから」

その言葉に、俺は思わず胸を打たれ、初めて心から彼女を愛しいと思った。

「お嬢さん……」

「嫌ですわーさん。わたくし達、正式に婚約したんですのよ？いい加減お嬢さんではなく『千歳』とお呼びになって」

拗ねたようにそう言った彼女に、俺は躊躇いながらその名を口にし

た。

「……千歳……」

「はい。なんですか、一さん」

にっこりと嬉しそうに微笑む彼女に、そっと顔を近づけてキスをした。そっと触れただけの唇から熱が伝わり、彼女の細い身体を抱き寄せた。

「……んっ……」

熱い吐息が漏れ、俺はそのまま彼女の歯列を割って中へ侵入し、彼女のそれと絡めた。

背中に腕を回し、抱きしめる腕に力を込める。

そっと唇を離し、彼女の目を見つめると、潤んだ瞳で見つめ返して来た。

「……この先は、帰ってからにしよう」

彼女は頬を赤く染めながら、コクリと小さく頷いた。

あんな事にならなければ一緒になる筈がなかっただろう彼女。

けれど、案外こうなったのは運命だったのかもしれない。

そんなふうに思った。

三カ月後。俺達は正式に結婚した。

俺は富士乃宮グループの正式な後継として本社社長に就任し、富士乃宮グループを支えるトップとして仕事に忙殺される日々が続いた。

千歳は車椅子ながらも妻としての役目を十分に果たし、俺に尽くしてくれた。
時折訪れる心の痛みさえ、彼女の懸命な姿を見ていると忘れられるような気がした。

このまま俺達は夫婦として一生を過ごしていくのだろう。
そう、思っていた……。

二年後。

俺と千歳は新居で結婚生活を送っていた。

広い屋敷の中、使用人達に囲まれた何不自由ない生活。忙しくも、充実した毎日。

仕事を終えてクタクタに疲れて家に帰ると、千歳の温かい微笑みが待っている。

そんな平和な毎日を過ごしていたある日の事だった。

いつものように書斎で残務処理をしていると、車椅子の千歳が遠慮がちに入ってきて来た。

「一さん、ちょっといいかしら？ 少しお話があるんですが……」

「ああ、いいよ。仕事は丁度キリがついた所だし。どうした？」

千歳は躊躇いながら口を開いた。

「……ええ。あの、実はその、一さんに、一緒に病院へ行つて貰えないかと思ひまして」

「病院？ 急にどうした？ リハビリの付き添いなら毎週行ってるだろう？ 何処か具合でも悪いのか？」

尋ねた俺に、彼女はなお躊躇いがちに言った。

「……………違うんですの。あの、その……………」

珍しい。いつもきつぱりと物を言う彼女が、こんなに躊躇いがちに言葉を濁すなんて。

何かよっぽどいいにくい事なんだろうか。

「どうした？遠慮しないで言っくらん」

優しく言うと、彼女はゆっくり言葉を続けた。

「ええ……………、実は、その……………一さんに、検査を受けて頂きたいんですの」

「は？検査？」

突然出た言葉に驚く俺に、彼女は言った。

「わたくし達、子供がなかなか出来ませんでしょうか？だからわたくし、この間病院で検査を受けましたの。そしたら、今度は旦那様も検査を受けて下さいって……………」

それを聞いて、ようやく得心がいった。千歳が子供を欲しがっているのは知っていたし、子供が出来ない事に焦りを感じているのだから事も気付いていた。

。だがまさか、一人で医者に行くほど追い詰められていたとは……………。

「そうか……。分かった。じゃあ、俺も検査を受けよう。仕事のスケジュールもあるから、いつでもという訳にはいかないが……」

ぱあっと顔を輝かせた千歳に、俺はほっと心の中で安堵した。

この問題については、彼女だけに背負わせるつもりはなかったが、忙しくてなかなか彼女の話を書きちゃんと聞いてやる機会が持てず이었다。

病院に検査に行く事くらいでその穴埋めになるとは思わないが、それでも少しは彼女の力になれるなら。そう思った。

「次の土曜の午前中なら空いてるから、その日でも構わないか？」

「ええ！有難う一さん！病院に連絡しておきますわね」

そう言って嬉しそうに書齋を出て行った。

子供、か……。

ふと思い出す。かつて失った、沙織との間に出来た子供の事を。

沙織……。

最後に見たアイツの悲しげな顔が頭をよぎった。

子供を失って、一番辛かったのはきつとアイツなのに、俺は何もしてやれなかったどころか、アイツを更に深く傷付けてしまった。

今頃どうしているのか。また一人で泣いてるんじゃないか。そんな事を思つて、胸が苦しくなった。

あの事故の日からすぐ、沙織は会社を突然辞めた。

驚いて彼女の部屋を訪ねた時にはもう、そこはもぬけの殻だった。彼女に渡していた携帯電話と俺の部屋の合鍵は、それから3日後に送られて来た。

『さよなら』と一言だけ書かれた手紙と共に……。

目の前に置かれた仕事用パソコンの作業机にある、一番上の引き出しを開けた。

その隅にひっそりと置かれた一本の鍵を取り出して呟く。

「こんなもの、もう持っても仕方ないのにな……」

渡されたまま、返す事さえ叶わなかった合鍵。

二年経った今でも、俺はまだ捨てる事が出来ずにいた。

鍵を見つめながらゆっくりと大きな溜め息を吐き、俺は思考を停止させた。

これ以上考えても仕方ない。今大切なのは、千歳との生活だ。

彼女との間に子供をもうけ、幸せな家族になる。

それが今の俺に出来る、千歳への償いでもあるのだから。

そう思いながら鍵を元の場所へしまい込み、俺は書斎を後にしたのだった。

A c t ・ 6 3 「再会」

土曜日。俺は千歳と共に不妊治療の検査を受ける為、千歳の叔母が理事を務めている三城院グループの系列病院へ来ていた。

いつも千歳のリハビリで行っている富士乃宮市立病院も大きな病院ではあるが、隣の市にあるここは、あそこよりも更に大きな総合病院だ。

日本でも有数の大学付属病院であり、癌治療をはじめ、様々な最先端治療施設が整っており、医師も医学界で有名な名医ばかりが揃っているという。

それは不妊治療も例外ではなく、ここではその分野の第一人者と呼ばれる名医が担当を務めているらしい。

千歳は10年前に両親を事故で失くしている。当時まだ16歳だった千歳を、彼女の叔母さんが母親がわりとなって色々と面倒を見てくれたらしい。

そんな事があって、普段滅多な事では人に相談などしない千歳も、その叔母さんにだけは何でも打ち明けられるのだという。

だからこそ今回、その叔母さんが理事を務めるこの病院を紹介されたのだが。

(千歳に悪い事をしたな・・・)

叔母さんを信頼しているのは結婚当初から知っていたが、だからといってこんなデリケートな問題を打ち明けるのは、結構な勇気がいった事だろう。

仕事に忙殺され、最も身近な相談者であるべき立場の自分が彼女の相談に乗る時間をとれなかった事が今さらながら悔やまれた。

これからはもっとちゃんと夫婦の時間が持てるよう努力しよう。

あらためてそう思うのだった。

俺の病院での検査はわりと早く終わった。千歳の方はもう少しかかるとの事で、俺は彼女の検査が終わるまで検査室の外で待つ事になった。

しかし……。

白い壁。白い天井。

病院内に広がる景色はどこも似たようなもので、俺は廊下の椅子に腰かけながら、どうにも落ち着かない気持ちになった。

(千歳は、大丈夫なんだろうか？)

こう戻って来るのが遅いと、まさかとは思いが、また“あの時”のようになるのではとつい身構えてしまう。

昔の色々を思い出し、不安に駆られたその時だった。

「どうしました？何か顔色が優れないようですけど……」

受付にいた看護師が声をかけて来た。

「……あ、いえ、大丈夫、です」

「そうですか？もし具合が悪いようなら、ベッドをご用意しますから、遠慮なくおっしゃって下さいね」

心配そうに顔を覗き込む看護師に、俺は無理に笑顔を作って返した。

「有難うございます。本当に大丈夫です。ちょっと外の空気でも吸えばすぐ良くなると思いますから」

すると看護師は何かを察したように柔らかい微笑みを浮かべて言った。

「それじゃあ、屋上にでも行ってらしたらいかがでしょうか？今日は天気もいいですし、きっと気分も良くなると思いますよ」

「……屋上、ですか。有難うございます。早速行ってみます」

笑顔を返すと、看護師は「どういたしまして」と一礼して受付に戻って行った。

俺は椅子から立ち上がり、エレベーターホールに向かうと、そこから屋上へと向かった。

エレベーターを降りると、そこは金網のフェンスで囲まれたただっ広い場所で、物干し竿にひらひらと白いシーツがはためいているのが見えた。

病院の屋上へは、カヨが入院していた頃何度か来た事があったが、あそこはこの病院の屋上ほど広くはなかった。

さすが国内でも有数と言われるだけの大病院だなと、妙な感心をしていてその時だった。

誰がいる？

はためくシーツの向こう側、金網のフェンスに指をかけ、誰かが外を眺めているのが目に入った。

薄い水色の患者服を纏った、長いポニーテールの黒髪……。

まさか……！

胸が高鳴る。あの後ろ姿は、もしかして……。

恐る恐る、近付く。
コンクリートの床に、スリッパの音がパタパタと響く。
瞬間、振り返った。

「　　っ!？」

その顔に、驚愕の色が浮かぶ。
俺は思わず声を失い、足を止めた。

まさか、か、そん、な……………!!

「……………お、兄……………ちゃん……………?どうし、て……………!？」

振り返ったその人は、見間違う筈も無い。

三年近く前に別れたままの、あの、沙織だった!!

「さお……………り……………!？」

互いに動く事も出来ず、その場に立ちすくんだ。
一陣の風が吹き、バタバタと白いシャツがはためく。

これは、夢、なのか?

彼女が、いる。目の前に。

あんなに恋焦がれ、守りたいと思っていた彼女が。

「沙織!!」

駆け出し、抱きしめていた。

腕の中にある確かな温もりが、その存在を確かな物へ変えた。

「夢じゃ、ないよな！？お前なんだよな！？」

その頬を両手で包み、その目を見つめた。

その瞳に俺の姿が映り込み、じわりと滲んだ。

「…………お兄…………ちゃん…………」

みるみる内に滴が溢れ、ぽたぽたと落ちていく。

俺は堪らずその身体を抱き寄せ、強く抱きしめた。

「……………う……………あああああ！！！！」

泣きじゃくる彼女を、強く、強く、抱きしめ続けた。

澄み渡る青空が美しい、秋の日の事だった。

A c t ・ 6 4 「愛欲」 (前書き)

病気・医療・ドナー等に関する描写は現実と異なる場合がございます。

恐れ入りますが、予めご了承の上お読み頂きますようお願い致します。

Act・64「愛欲」

バタバタと白いシーツがはためく。

ひとしきり泣いた後、沙織は顔をあげた。

赤くなつた目が痛々しい。俺はその涙を拭い、もう一度抱きしめた。

「……………沙織……………会いたかつた……………」

ギョツと腕に力を込めると、沙織が苦しそうに呻いた。

「悪い、苦しかつたか？」

慌てて身体を離すと、沙織は苦笑を浮かべてこちらを見た。

「お兄ちゃん、少し、痩せた？」

「そうか？お前こそ、何か随分痩せたんじゃないか？ちゃんと食べてるのか？」

本当に、目の前の彼女の身体は、何だか随分細くなっているように感じた。

丸かつた筈の顔も、シャープになった、というか、何だか頬がこけたように見える。

「……………ん、あたしの事より、お兄ちゃんは？元気だつた？」

曖昧に濁された言葉に、何だか妙な不安を覚えた。

あの頃より随分痩せた彼女。着ている病院の患者服。まさか……………

「俺は、大丈夫だよ。元気にやってる。忙しくはあるけど。それよりお前、ここに入院してるのか？どうしたんだよ、どっか悪いのか？」

俺の問いに、彼女は「ん……」と曖昧に言葉を濁した。

「なあ、本当にどうしたんだよ？まさか……」

嫌な予感がよぎる。

“あの時”の力ヨと、目の前の彼女の姿が重なる。俺は堪らず、彼女の肩を掴んだ。

「なあ、頼むよ。正直に言ってくれ！嫌だよ俺、大切なやつが、知らないところでどうにかなるのは、もう……」

「お兄ちゃん……。分かったよ。本当はずっと話さないでいたかったんだけど……」

そう言っただけで、まっすぐ俺の目を見つめた。

「……あたしね、子宮癌だったの」

「なっ……。！し、子宮……。癌……。！？じゃあ、まさか……」

驚く俺の前で、彼女は静かに頷き、言葉を続けた。

「……うん。ごめんね、“あの時”のあれは、子宮外妊娠だけじゃないの。腫瘍があったんだよ。子宮に……」

「なんだよ、それ……。そんなの、俺、知らない……」
医師には、子宮外妊娠だとしか聞かされていなかった。まさか、そんな……。

「……先生には、黙っててっってお願ひしたの。あの時はまだ、悪性か良性かもわからなかったし、余計な心配かけたくなかったから」

それに。と彼女は続けた。

「カヨさんの事があるのに、もしあたしまでどうにかなったら、お兄ちゃん、今度こそ本当に死んじゃうじゃないかって、心配だったから……」

ああそうか。俺がカヨの後を追って自殺未遂した事を話したから、沙織はそんな心配を……。

「……ごめん。俺があんな事話さなければ、お前が一人でそんな事抱え込まなくて良かったのに」

「違うよ！あたしが勝手に黙ってたただけだもん。勝手に黙ってて、勝手に別れた。本当に、それだけなんだから……」

必死に否定する彼女に、俺は思わず涙が出そうになった。コイツは、いつだってそうだ。いつだって、何でも自分一人で抱えようとして、一人で泣いて……。

瞬間、俺は彼女を抱きしめていた。

「お兄ちゃん!？」

驚く彼女を抱き寄せたまま、片手で頭を優しく撫でながら静かに言った。

「……もういい。もう、いいから……」

辛かったよな。苦しかったよな。一人で、ずっと……。

「……何も言わなくていい。傍にいさせてくれ。頼む……」

「……お兄ちゃん……」

頭を撫でていた手を、そつと彼女の顎にかけた。上を向けさせ、その唇を塞ぐ。

温かい感触。熱が、彼女の唇から伝わる。懐かしい、彼女の温もり……。

「……んっ……ふう……」

漏れる熱い吐息に、ドキリと心臓が跳ねる。

夢中で歯列を割り、中へと侵入した。口内の隅々まで、味わうように蹂躪し、彼女のそれと絡ませてくすぐる。

互いの身体がどんどん熱を増して行き、熱い吐息が漏れる。

久しく味わっていなかった彼女の感触。鼓動。熱。匂い……。

鮮やかに蘇る感覚に、このまま、もっと先まで行きたい衝動に駆られる。

すぐそばではためくシーツを下に引っ張り、その影に隠れるように彼女を誘導した。

「沙織……愛してる……」

再び口付け、彼女の患者服の襟元から、その柔らかな身体の曲線に手を伸ばした。

「あつ……だめ、こんなところで……」

熱のこもった声が漏れ、彼女の手が僅かな抵抗を見せた。

俺はそれを強引に振り払い、片手で拘束した。

抑えられない衝動が、俺を突き動かしていた。

「愛してる……」

耳元に囁き、再び唇を塞いだ。

たとえどんな現実があつたとしても、今だけは

互いの熱で溶けてしまいたい。

その情欲だけが、俺を支配していた。

A c t ・ 6 5 「 願 い 」 (前 書 き)

病気・医療・ドナー等に関する描写は現実と異なる場合がございます。

恐れ入りますが、予めご了承の上お読み頂けますよう宜しくお願い致します。

Act・65「願い」

屋上で再会したその後、俺は彼女を病室に送って来た。
彼女の病室は、入院病棟の一角にある小さな個室だった。

「ありがとうね、お兄ちゃん」

髪をほだき、病室のベッドに横たわった彼女に、俺は幾分申し訳なさを覚えた。

「いや、いいんだ。ごめんな、無理させて」

「本当だよ。あたし一応病人なのに」

もう、と口をとがらせる彼女に、俺はずっと気になっていた事を尋ねた。

「なあ、お前、さつき“子宮癌だった”って言ったろ？今は、どうなんだ？」

すると彼女は、ふっと顔を曇らせた。

「……どうしても、聞きたい？」

「……ああ。お前の事だ。ちゃんと、聞いておきたい。あの時
みたく、本当の事を知らないままにいるのはもう、嫌だ」

きっぱりと言った俺に、彼女はふうと一つ溜め息を吐き、ゆっくりと話し出した。

「……わかった。話すよ。あの時の事も、ちゃんと、ね」

そうして語られた彼女の話は、あまりに残酷なものだった。

俺が子宮外妊娠だと聞かされていたあの手術の日、本当は腫瘍の摘出手術をしていた事。

俺が自分の部屋に戻った数日後、彼女が一人で病院に戻り、医師から腫瘍が悪性だった事を聞かされた事。

万が一戻れなくなる事を考えて、それからすぐに業者を手配して部屋の荷物を全部まとめて実家に送り、部屋を解約した事。そのまま会社を辞め、必要最低限の荷物だけを持って長期入院に入り、本格的に癌治療に入っていた事。

なんとか投薬治療が成功し、しばらくは普通の生活を送っていたものの、最近になってまた再発してしまった事……。

全てを語った彼女は、ふうと小さく溜め息を吐いた。

「今度は、子宮、全摘出しなきゃいけないって。だからもう……」

子供は、産めない。

消え入りそうな声で言った彼女に、俺はどうしていいか分からず、呟いた。

「……ごめん……」

ふいに彼女が身体を起こし、その腕をこちらに伸ばした。

昔より随分細くなった、彼女の、白い、腕……。

その白い腕の先にある彼女の小さな手が、優しく、俺の頭を撫でた。

「・・・沙織・・・」

彼女は黙って微笑み、ゆっくりと、ただ優しく俺の頭を撫で続けた。抱き寄せて、ギョツと抱きしめた。

鼓動が、伝わる。彼女の温もりが愛しくて、悲しかった。

どうして？どうしてコイツばかり・・・。

存在そのものを否定される苦しみの中で、それでも、生きて来たんだ。

自ら命を投げ出したいと思う程の痛みに耐えながら、それでも、懸命に！

なのに・・・。

ほどかれた髪を撫でた。昔よりは短くなったそれは、サラサラと指の隙間を流れた。

「お兄ちゃん、今のうちに、触っておいて。多分、もうじきこの髪も、またなくなっちゃうかもしれないから」

その言葉にハツとなる。そうだ。抗がん剤での治療が始まれば、副作用で・・・。

「ごめんね、お兄ちゃん、長い髪、好きなのに」

もう一度ギョツと抱きしめた。

「・・・沙織、俺は、お前がどんな姿だって、お前が好きだよ」

「・・・お兄ちゃん・・・」

少し掠れた声に、俺はそつと唇をよせ、囁いた。

「……………愛してる。お前の全部が、好きだ……………」

そのまま、唇を塞いだ。柔らかい沙織の唇から伝わる熱に、俺の身体が熱くなっていく。

「沙織……………」

躊躇いがちにその名を呼ぶと、彼女は潤んだ瞳で俺を見つめ、そのまま俺の唇を優しく塞いだ。

もう一度その背に腕を回し、その細い身体を抱きしめた。

「……………愛してる……………」

彼女は答えず、ただ俺の背に腕を回し、その手に力を込めた。

静かな病室に、二人きり。

ざわざわと風に揺れる木々の音に混じって、雨音が聞こえ始めた。

ふと振り返れば、窓の外、雨滴と共に降る、紅い葉の時雨が見えた。どうしてだろう。綺麗なのに、何処か胸が詰まるような、悲しい景色に思えた。

「また雨だね」

呟いた彼女に、俺は思い出す。

ああそうだ。コイツと二人でいると、いつも決まって雨が降るんだ。出会ったあの日も、初めてのデートも、あの初めての夜も……………。

「お前、雨女なんじゃねえの」

「えー、違うよ。お兄ちゃんが雨男なんだよ」

くすくす笑った。

その笑顔が愛しくて、もう一度抱きしめた。

「……お前が好きだ。お前と、離れたく、ない……」

この腕を離せば、また消えてしまいそうで、怖かった。

「……お兄ちゃん……」

そっと背に回された腕の細さが、余計に悲しくて、抱きしめる腕に力を込めた。

叶うなら、このまま……。

ずっと、一緒に……。

叶わないと知っていても、願わずには、いらなかった。

Act・66「止まらない想い」(前書き)

病気・医療・不妊治療・ドナー等に関する描写は現実と異なる場合がございます。

恐れ入りますが、予めご了承の上お読み頂きますようお願い致します。

Act・66「止まらない想い」

その日、俺は千歳と共に病院へと足を運んだ。

先日の検査の結果が出たから説明を聞きに来て欲しいと連絡が入ったからだ。

白い壁に囲まれたカンファレンス室の中、医師が告げた内容に、俺と千歳は一瞬言葉を失った。

「……それは、本当なんですか？」

震える声で問いかけた俺に、医師は真剣な顔で頷き、重い口調で答えた。

「……残念ながら。自然に妊娠する可能性はゼロではありませんが、非常に低いと言わざるを得ません」

医師が告げた事実。それは、俺の生殖能力が著しく低く、子供を残せる可能性が殆んど無いに等しいという事だった。

「そんな……。何とか、なりませんの？」

消え入りそうな声で言った千歳の問いに、医師は静かに、幾つかの手段がある事を説明した。

提示されたそれは、むしろ“自然に”では無く“人工的な”妊娠の方法を取った方がいいといった内容で、俺は自分が千歳の望みを叶えるに相応しくない男なのだと思いきらされるばかりだった。

「……悪い千歳。俺、ちょっと席外すよ。後の事は、君が聞いておいてくれないか」

ガタリと音を立てて席を立ち、そのまま千歳を残してその場を後にした。

千歳は何か言いたげにこちらを見たが、結局何も言わず、そのまま俺を見送ってくれた。

あのままあの場にいるのは、あまりに辛すぎた。

カンファレンス室を出た俺は、そのまま屋上へと向かう事にした。エレベーターに乗り込み、屋上のボタンを押す。動きだしたエレベーターの中で、一人考える。

子供が出来ないのは、俺の所為だったんだ。

その現実が苦しくて、いたたまれなかった。

男としての自信が、ガラガラと音をたてて崩れ去って行く。どうしていいか、わからなかった。

チンツ！

無機質な音をたて、エレベーターが開いた。

曇り空が広がる屋上は、秋の冷たい風が吹きすさんでいた。はためくシーツの向こう側、金網のフェンスまで歩いて行こうとした時、そこに一人の人影を見付けた。

「……沙織？」

振り向いたその顔は、やっぱり彼女だった。

「……お兄ちゃん。どうしたの？誰かのお見舞い？」

寂しそうな顔で笑う彼女を見て、胸の奥が痛んだ。

「お前に、会いたかったんだ」

「あたしに？本当？」

その顔が、喜びに彩られた。

昔に比べて全然細くて、色も白くなった気がする彼女。
もう子供は産めないのだと、悲しげに語った彼女。

俺も、子供は……。

悲しみとも怒りともつかない、何とも言えない感情が胸に渦巻く。
俺は彼女の元へ歩み寄り、ギュツと彼女を抱きしめた。

「お兄ちゃん？」

「悪い。しばらく、このまま……」

彼女は黙って俺の背に手を回し、優しく抱きしめ返してくれた。
その細い身体から伝わる鼓動と体温に、何だか無性に泣きたくなっ
た。

「……何か、あったの？」

「……何でも、ねえよ」

言える訳、無い。

あんな話、コイツに言っても悩ませるだけだ。
俺はコイツを守りたい。

例えばどんな事があっても、もう二度とコイツを一人で泣かせたりし

たくない。

抱きしめたまま顔を近づけ、その唇を塞いだ。

「…………ふっ…………んっ…………」

漏れる甘い吐息に、どんどん熱が増してく。

奥へと侵入し、熱い口内へ舌を這わせると、やがて彼女のそれが応えるように絡み合った。

甘い熱に侵され、だんだんと頭が真っ白になっていく。

すっかり熱を帯びた唇を離し、耳元に囁いた。

「悪い、俺もう、限界かも…………」

「…………あ…………ダメだよ、誰か来たら…………」

掠れるような声で言った彼女の耳に、ぺろりと舌を這わせた。

「ひゃん！」

甘い声で啼く彼女に、優しく囁く。

「大丈夫。そうそう人なんか来ねえよ」

そのままつうつと首筋に舌を這わせると、可愛い啼き声が漏れた。

「…………あっ、おにい…………ちゃん…………」

患者服の裾から手を入れ、スツと滑らせるようにその肢体の上へと指を這わせる。

そのままその付け根へと到達し、柔らかな布地越しにそこを刺激す

る。

「……んっ、んんっ……！」

官能に喘ぐその甘い声が外へ漏れないよう、もう一度唇を塞いだ。

ひと時でもいい。彼女をもっと感じたい。

たとえそれが、許され難い背徳なのだとしても、戻る気はもう、なかった……。

A c t ・ 6 6 「止まらない想い」（後書き）

< 作者より一言 >

最近本当に毎日何十人もの方が閲覧して下さっていて、しかも未だに一話から読んで下さっている方が多いのにとっても驚いています。読者の皆様、拙い文章ではありますが、物語はもうじきクライマックスを迎えます。

頑張って書きますので、どうか最後までお付き合い頂きますよう、宜しくお願い申し上げます。

追記：いつもアルファポリスに投票頂いている読者の皆様、本当に有難うございます。皆様の応援を励みに、いつも頑張れています。本当に有難うございます。この場を借りてお礼申し上げます。

A c t ・ 6 7 「 熱 」 （ 前 書 き ）

病気・医療・不妊治療・ドナー等に関する描写は現実と異なる場合がございます。

恐れ入りますが、予めご了承の上お読み頂きますようお願い致します。

Act・67「熱」

あの再会からもう二週間。

俺は毎日時間を作っては、沙織の病室を訪れていた。

「お兄ちゃん、こんなに毎日、お仕事は大丈夫なの？」

心配そうに尋ねる彼女の頭を、俺はくしゃくしゃと撫でまわした。

「心配すんな。何度も言ってるだろ。外での商談と商談の間とか、空いた時間に来てるんだって。だから、本当にお前が気にする必要はねえんだよ」

すると彼女は、ようやく安心したように頷いた。

「……うん。ありがとう、お兄ちゃん」

ふと、初めて会ったあの日を思い出した。

見た目はどうみても健康そのものの、大して細くもない身体なのに、触れたら消えるんじゃないかと思うくらい儚なげに見えたコイツ。

口を開いたらえらい粗野なやつで、儚げな印象なんて一瞬で消し飛んじまった。

だけど、知る度に解って来た。それがコイツなりの強がりなんだって事。

どれだけ辛い思いをしても、コイツはずっと一人で頑張って来たんだって。

上手な甘え方なんか知らず、ただただ自分で頑張る事だけを考えて、今まで生きて来たんだって。

それがどれほど辛い事か、俺は知ってる。

甘えたくても甘える相手がいない、そのやりきれなさ、孤独。

一人で立つ事の難しさ。気を抜くと支配される、心の闇……。

似てるんだ。コイツと俺は。
だから俺は、初めて会ったあの日からずっと、心の何処かでコイツの危うさを感じてた。

俺と同じ痛みを抱えながら、それでも一人で立とうとするコイツは、俺なんかよりずっと強い。だけど、その強さと同じくらい、脆い。コイツの強がりがどうしようもなく歯痒くて、だけど愛しくて、堪らなかった。

守りたかった。せめて俺の前でくらい、強がりと言わなくてすむように……。

「お兄ちゃん？」

ふと物思いにふけていた俺を、心配そうな瞳が見つめていた。

「……ああ、悪い。ちょっと考え事してた」

「考え事？何か、あったの？」

くしゃり。頭を撫でた。

「大丈夫。なんでもねえよ」

優しく微笑んだその時だった。

「お兄ちゃん……あのさ……」

躊躇いがちに口を開いた彼女に、俺は優しく問いかけた。

「ん？何だ？」

「……こうやって、来て貰えるのは嬉しいんだけどさ、その・
・奥さんは、いいの？」

その瞳に、不安と躊躇いの色が浮かんでいた。

俺は思わずその額めがけてピンツと指をはじいた。

「痛っ！もっ、いきなり何すんのお兄ちゃん！？」

「ばっか。お前が変な心配するからだろ。俺にはとこうしてお前と
過ごせる時間の方が大事なのにさ」

「そんな……。気持ち嬉しいけど、あたしのせいで奥さんに
嫌な思いさせる訳には……」

うつむき、黙り込んでしまった。

(ああ、まあた悪い癖が出たな)

何でもかんでも自分のせいにして自分を責めるのは、コイツの悪い
癖だ。

一緒にいて、散々そういう面を見て来た俺は、いつも歯痒い思いを
していた。

こういう時のコイツは、口で何を言っても無駄だ。

「沙織、ちょっとこっち向け」

言ってみたが、やっぱりうつむいたまま顔を上げようしない。

(仕方ないな……)

俺はおもむろに彼女の顎を掴み、強引に上を向かせた。
案の定、泣きそうな顔をしてる。

「まったくお前は、いつになったらそういう悪い癖が抜けるのかな
傍で見てるこっちの方が辛いっての」

「あ……。ごめん……」

「だから、謝るなって。お前が謝る必要なんかないんだからさ」

「ご、ごめん……あつ」

「まあた謝ってる。まったくもう。そういう子はお仕置き決定だな」
顔を近づけ、その唇を塞ぐ。

「……ふっ……んっ……」

漏れる甘い吐息に、どんどん熱が増してく。

そのままベッドに押し倒して、患者服の胸元へと手を伸ばした。

「んっ……んっ……」

ささやかな抵抗を見せたその腕を掴んで、片手で枕元に押さえ付け
た。

水色の患者服の襟元から手を入れ、彼女の柔らかな曲線を掌で優し
く包み込む。

そのまま身をよじって抵抗する彼女の肢体に手を伸ばし、その先に

ある場所を指で弄ぶ。

ビクリと彼女の身体が震え、塞いだ唇から甘い声が漏れた。すかさず塞いだ唇を離し、その耳元に甘く囁く。

「……沙織、やらしい」

俺の言葉に、彼女はかぁっと頬を紅く染め、小さく呟く。

「……やつ、そんな……事……」

潤んだ瞳と紅潮した頬が色っぽくて、クラクラする。

「沙織……」

懇願するように名を呼ぶと、彼女は掠れた声で答えた。

「……ダメ……見られ……ちゃう……」

「大丈夫。もうとつくに鍵、閉めてるから」

そう言っつて、もう一度唇を塞いだ。

もっと彼女を感じたい。それだけが、俺を支配していた。

伝わり合う温もりだけが、全てを忘れさせてくれる。

冷たく横たわる現実を見ないように、俺はそのまま、熱に身を任せ
た。

A c t ・ 6 8 「密かなる決意」(前書き)

病気・医療・不妊治療・ドナー等に関する描写は現実と異なる場合がございます。

恐れ入りますが、予めご了承の上お読み頂きますようお願い致します。

Act・68「密かなる決意」

出会った事を後悔しているかと聞かれたら、後悔など微塵も無いと断言出来る。

この胸を焦がすのは、アイツへの愛情と不安。そして、罪悪感……。

「一さん、お帰りなさい。遅かったんですね」

屋敷の広間で帰りを待っていてくれた千歳に、俺はスッと一枚の紙を差しだした。

「……一さん、これ!？」

「見ての通りだよ」

何の感情も込めず言い放った。

その紙きれを見つめる千歳の顔色がみるみる内に変わって行く。

「そんな!どうして!?!わたくし、何か至らない事でも!？」

渡したその薄っぺらい紙は、昼間俺が市役所から貰って来た離婚届だった。

「君の望みに、俺は応えられない。男として、君を幸せにはしてやれない。だから……」

「そんな……わ、わたくし……」

狼狽する千歳に、俺は出来るだけ感情を込めず言葉を続けた。

「千歳。君が子供を欲しがっていた事は知ってる。このまま不妊治療を続けても、俺の身体じゃ君の望みに応えられる可能性は低い。それは君だって分かってるだろ」

治療を始めてもう3カ月。つい先日、医師にも宣告されていた。

このまま治療を続けても、俺自身の能力では力が弱すぎて、自然妊娠はおろか、人工妊娠さえ難しいだろう、と。

「千歳。君はまだ十分若く魅力的だ。俺なんかより君に相応しい男がたくさんいるだろう。俺と別れて、健康な男と幸せになってくれ」

「そんな！一さん以外の方と結婚だなんて、考えたくもありません！！」

かぶりを振り、必死な表情で否定する彼女に、俺はなおも冷たく言い放つ。

「ならどうする？このままいけば、君は子供は望めない。他の男の協力を受けて、俺の目の前で俺以外の男の子を産むとでも？」

残された手段は少ない。自然性交はおろか、体外受精でも俺のものが役に立たないなら、他の男のものを代用するより他ない。

それは歴然とした事実であり、千歳自身もよく分かっている筈だった。

「……………それは……………でも、わたくしは……………」

うつむき、黙りこんでしまった千歳に背を向け、俺は無表情に言った。

「あの時俺は、君に不自由な生活を強いる事になった責任として、君を愛すると誓った。だが、他ならぬ俺が君を不幸にするのなら、最早君の傍にいる資格など、ない」

「……一さん、わたくし、あなたが傍にいて下さるなら、子供なんて……」

美しい黒曜石のような瞳から、ボロボロと涙が零れた。

「……千歳……」

車椅子の傍に寄り、そこに座る彼女の身体をそっと抱きしめた。

「……悪かった。苦しかったんだ。君の望みを叶えてやれないのが」

千歳は、俺の所為で不自由を強いられるようになった。

だからこそ、俺は彼女の為に、出来る事は何だっしてあげたいと思っただけだ。

なのに……。

「……いいんです。いいんです。わたくし、あなたがこうして傍にいて下さるだけで、十分幸せなんですから」

千歳の艶やかな黒髪を優しく撫でる。

この腕の中にいる彼女を、大事にしたいと思った。

始まりはどうであれ、俺は彼女を、間違いなく大切に思っている。

「じめん千歳、俺は……」

こうして抱く千歳の事を、大事だと思う。ただ俺は、ずっとその千歳を裏切つて、沙織と……。

「ーさん、謝らないで下さいな。ねえ、今夜は久しぶりにゆっくりワインでも飲みませんか？実は、ーさんが好きなアレ、用意してありますの」

千歳が言うアレは、俺が大好きな銘柄のワインだ。希少価値のある物であり手に入らない事もあり、俺達は結婚記念日や誕生日以外には飲まない事にしていた。

「どうして……」

記念日でもないのに、と訝しむ俺に、彼女は悪戯っぽく微笑んだ。

「ーさん、こここのところ落ち込んでましたでしょう？少しでも元気になればと思つて、内緒で手配しておきましたの」

それを聞き、俺は思わずもう一度千歳を抱きしめていた。

「……ありがとう、千歳」

千歳は、こんなにも俺を思ってくれる。

自分の事しか考えてないような、こんな、俺を……。

「どうしたんですのーさん、苦しいですわ……」

慌てて身体を離れた。

「ごめん。つい……」

千歳の気持ちだが、嬉しくて、辛かった。

こんな千歳を裏切っているのだと思うと、いたたまれなかった。

「ふふ。いいんですよ。一さんから抱きしめて下さるなんて、久しぶりですもの。ねえ、もう一度抱きしめて下さいな。今度は、優しく、ね」

悪戯っぽく笑う彼女を、優しく抱きしめた。

甘い薔薇の香りが香る。

千歳がいつもつけている、薔薇の、香水……。

「千歳、愛してる……」

そっと唇を重ねた。

柔らかなその唇から漏れる甘い吐息を感じながら、ふっと沙織の事を考えた。

病に侵され、未来さえ危うい彼女。

けれど俺は、この腕の中の千歳と、共に生きていかなければならぬ。

だから……。

密かな決意を胸に、俺は甘い香りに身を委ねるのだった。

A c t ・ 6 8 「密かなる決意」（後書き）

> 作者より一言 >

いつも【レインキス】を読んで下さって有難うございます

最近本当に一日何十人もの方にこの小説を読んで頂けているようで、心から嬉しく思います。

長く続いたこのシリーズも、もうじきファイナルを迎えます。

読者の皆様。相変わらず拙い文で甚だ恐縮ではございますが、最後までお楽しみ頂けるよう頑張って書かせて頂きますので、どうぞ宜しくお願い致します。

追記：

いつもアルファポリスなどランキングに投票して下さっている読者の皆様、本当に有難うございます。

投票されているのを見る度に励みになっております。

この場を借りてお礼申し上げます。 本当に有難うございます

A c t ・ 6 9 「 狂 気 」 （ 前 書 き ）

病気・医療・不妊治療・ドナー等に関する描写は現実と異なる場合がございます。

恐れ入りますが、予めご了承の上お読み頂きますようお願い致します。

Act・69「狂気」

翌日。

俺はいつものように仕事の合間を縫って沙織のいる病室を訪れた。彼女に、ある事を伝える為に……。

(ん?)

ドア越しに微かな話し声が聞こえ、俺は開けるのを躊躇った。

『 沙織さん、どうか治療を受けて下さいな。このままじゃあなた、本当に死んでしまいますのよ? 』

(この声は……千歳! ?)

ぼそぼそと聞こえてくるその声は、確かに千歳のものようだった。

(どうしてここに? それに治療って、一体何の話だ?)

意味深な言葉に興味を持った俺は、ドアの前で様子を伺う事にした。

『 出来ません。だって私は、お兄ちゃんの…… 』

沙織が何事か話した。声が小さくて、最後まで聞き取れない。

『 何ですって!! あなたまさか、だから治療を拒んでたんですの! 』

千歳の声が驚愕と怒気に彩られた。

(治療を拒む!?!?どういう事だ!?!?)

思わず耳を澄ませる。

『 ええ。私は・・・どうせ・・・から、せめて・・・だけでも・・・』

沙織の声は小さくて、途切れ途切れにしか聞こえない。

中へ踏み込もうとした時、扉の向こうから一際大きく千歳の声が響いた。

『 どうして!?!?どうしてアナタが!?!?一さんの妻は、わたくしですのに!?!?』

『 千歳さん!?!?』

次の瞬間、悲鳴のような千歳と沙織の叫び声と、争うような物音が響き、俺はたまらず病室へと踏み込んだ!

「沙織!?!千歳!?!?」

病室の中には、窓辺に立つ沙織と、果物ナイフを手に、“立っている”千歳の姿があった。

「どういう事だ!?!?千歳!?!?君は、歩けない筈じゃ・・・!?!?」

千歳はこちらを振り向き、妖艶に笑った。

「あらーさん、ちょうどいいところに。今、嘘つきの魔物を退治す

るところですよ」

その目に、いつもの気高さは無い。あるのは……

狂気！！

思わず叫ぶ。

「千歳！！やめろ！！沙織は悪くない！！悪いのは全部俺なんだ！！」

すると、千歳はさも可笑しそうに笑った。

「いやですわーさん。貴方はこの魔物にたぶらかされただけ。だって、子供が出来たから治療を受けたくないだなんて、そんな馬鹿みたいな嘘吐くんですよ？」

「なっ……子供……だって……！！？」

ツカツカと二人の方へ歩み寄りながら問いかけた。

「どういう事だ！？子供って、まさか俺の……？」

沙織はこちらを見て、震える声で答えた。

「ごめん……あたし……」

その声を遮り、千歳が金切り声をあげた。

「黙りなさい！！こ、子供だなんて！！ゆ、許せません！！アナタ

なんか、アナタなんか!!」

ナイフを持った千歳が、沙織に向かって歩を進める!

まずい!

全力で走り出す。

間に合え!!

滑り込むように沙織の前に立ちふさがり、手を広げた。

「……………ぐっ……………!!」

痛みが走る。

「お兄ちゃん!!」

後ろから沙織の悲痛な声が響いた。

俺はホッと安堵の息を吐き、振り向いた。

「……………良かった……………。無事……………で……………」

刺された腹が、焼けそうに熱い……………。

カラン!

ナイフが、目の前に落ちた。

「……………わ……………わたくし……………何……………を……………」

千歳は真つ青な顔で、震えながらこちらを見た。

「…………ちと…せ…………」

名を呼んだ。

直後、グラリと視界が揺れた。

「…………ごめ…ん…………約…束…………守れ…なく…………」

最後まで発せず、そのまま崩れ落ちた。

「…さん!?!」

瞬間、薔薇の香りに包まれた。

「…しっかりして下さいまし!?!…さああああん!?!…!」

微かに聞こえた、悲鳴のような呼び声。

嗅ぎ慣れた甘い香りの中、俺の意識は、途切れた…………。

Act・70「月下の告白」(前書き)

病気・医療・不妊治療・ドナー等に関する描写は現実と異なる場合がございます。

恐れ入りますが、予めご了承の上お読み頂きますようお願い致します。

Act・70「月下の告白」

目覚めた時、最初に目に映ったのは、ぼんやり見える白い天井だった。

やけに薄暗いその天井を見つめていると、すぐ傍で声が聞こえた。

「ーさん！目が覚めましたのね!？」

見ると、薄暗い部屋の中、傍らに千歳がいるのが目に入った。

「……千歳……俺は……うっ！」

起き上がるうと身体を捻ると、ズキツと鋭い痛みが走った。

「いけません！まだ動いては！傷口が開いてしまいます！」

傷口？

言われて、思い出した。

そうだ。確か俺は、あの時沙織を庇って千歳に……。

「ごめんなさいーさん、わたくし……」

その美しい黒曜石のような瞳から、みるみる内に大粒の滴が溢れだした。

俺は、その滴を拭おうと手を伸ばした。

「くっ……!」

途端に、痛みが走る。

「ーさんっ!!」

慌てて千歳が俺を制した。

「ダメです!動いては!」

心配そうにその美しい眉をしかめた彼女に、俺は苦笑いを浮かべながら言った。

「・・・大・・・丈夫・・・」

痛みを堪えて上半身を起こした。

窓の外を見ると、すっかり日が落ちて、冴え冴えと光る満月が見えた。

俺はそのまま千歳に手を伸ばし、その頬に伝う滴を拭った。月光に照らされた薄暗い部屋の中でも、その目が赤く染まっているのが見て取れた。

「・・・ごめん・・・。心配、かけたな・・・」

そう言うと、また彼女の目から大粒の滴がぼろぼろ零れた。

「・・・そんな・・・ごめんなさい・・・わたくし・・・わたくしが・・・」

その細い肩を抱き寄せ、優しく頭を撫でた。
サラリ。

千歳の長い髪が、指の隙間を流れる。

「……いいんだ。いいんだよ、千歳……。悪いのは、俺だ。……」

思わずくつと齒噛みした。

彼女をあそこまで追い詰めたのは、他ならぬ俺自身なのだ。

「……ううっ……。ー……。さん……」

みるみる内に、熱い滴が俺の胸を濡らしていく。

車椅子生活での不自由な生活を強いられながら、一度たりとて泣きごとを零す事無く、ずっと俺を支えてくれた千歳。周囲に後継ぎを望まれながら、子供が出来ないプレッシャーに、ずっと一人で耐えて来たのだから千歳。夫婦の時間さえろくにとれず、あるうことか他の女性と過ごしていた俺に、恐らくずっと気付いていて、それでも何も言わずにいてくれたのだから千歳。その千歳が、今、俺の胸で、肩を震わせ、泣いている……。

「……千歳……。すまない……。……」

思わず謝ると、彼女はふいに顔をあげ、涙で顔をぐしゃぐしゃにししながら、掠れた声で言った。

「……いいえーさん、悪いのはわたくしです。だってわたくし、本当はあなたに酷い嘘を……」

「嘘？ 一体何の事だ？」

尋ねた俺に、彼女は躊躇いがちに目を伏せ、少しの沈黙の後、ゆっくりと口を開いた。

「……わたくしの、脚……。本当は、とっくに治っていたんです!」

「っ!」

思わず言葉を失った俺の前で、彼女は言葉を続けた。

「怖かったです!脚が治れば、もう一緒にいて下さらないのではないかと!だから、だからわたくし……」

ポロポロと涙を零しながらかぶりを振った彼女を前に、俺は頭が真っ白になった。

「そんな……。ウソ……。だろ……。?一体、いつから……」

「ずっと……。です。わたくしの脚は、最初から、半年あれば治る怪我だったんです。でもわたくし、主治医に嘘をつかせて、ずっとあなたを、騙し続けて来たんです!」

信じたく、無かった。

始まりはどうであれ、俺は千歳を、本当に愛しいと思っていた。大事にしたかった。千歳を。共に過ごす時間を。彼女の想いを。だからこそ決意した。捨てようと。この胸を焦がす、アイツへの想いを。

ようやく決めただ!アイツに別れを告げ、千歳と共に生きて行くんだと!

なのに……!」

「なんで……。どうして、そんな……。!」

「手に入れたかった！失いたくなかった！だって、初めてだったんです！わたくしに三城院の娘としての価値を求めなかった人は！」

まっすぐに俺の目を見つめ、千歳は必死な声で続けた。

「あなたは求めなかった！誰もが・・・おじい様や叔母様でさえ、わたくしに三城院の娘としての役割を求めてましたのに・・・。だから、だからわたくし・・・。」

ポロポロと大粒の涙が零れた。

結婚してからでさえ、頑なに教えようとはしなかった、彼女が俺と結婚を決めた理由・・・。

それがまさか、こういう事だったとは。

「・・・・・・・・少し、一人に・・・してくれないか・・・。」

「・・・・・・・・一さん・・・・・・・・。」

すぐるようなその瞳を前に、俺は無機質な声で告げた。

「・・・・・・・・出て行って、くれ。頼む・・・・・・・・。」

そんな俺を前に、千歳は黙って涙を拭い、一礼すると部屋を出て行った。

彼女が病室を出るのを見送った後、俺はただ茫然と、窓の外を見た。暗い空に、ぽっかり浮かんだ、白い、月・・・。

白いベッドの上、声もなくただ、泣いた。

一人きりの病室で、月だけが、静かに、見ていた・・・。

A c t ・ 7 1 「決意の先」(前書き)

病気・医療・不妊治療・ドナー等に関する描写は現実と異なる場合がございます。

恐れ入りますが、予めご了承の上お読み頂きますようお願い致します。

A c t ・ 7 1 「決意の先」

それから俺は、こっそりと病室を抜けだし、病院の屋上へと向かった。

白い病室の中になると、どうにも辛くて堪らなかった。外の空気でも吸って、ゆっくり考えたかった。

エレベーターを使い、屋上へと出た。

冷たい夜風が吹く中、俺は広い屋上の奥、エレベーターとは反対側にあるフェンスに手をかけ、空を見上げた。

病室から見えたのと同じ満月が、夜の闇空にぼっかり浮かんで見える。

その冷たくも穏やかな光を受けながら、俺はゆっくりと溜め息を漏らした。

千歳……。

沙織の事で俺を脅迫して、揚句、あんな嘘まで吐いて。

そこまで俺を必要としていた彼女の心情を思うと、堪らなかった。

かつて、婚約者だったカヨが病に伏したあの時。俺はカヨを救う為、それまでろくに会った事さえ無かった祖父の跡を継ぎ、富士乃宮グループを支えて行く決意を固めた。

家柄。血筋……。その鎖の前では、個人の意思や感情など無力なのだ、嫌になるくらい思い知らされた。

だけど俺は、あの時までには、確かにただの一般人だった。千歳とは、違う。

生まれながらに三城院の息女として育てられた千歳は、きっと、俺なんかより遥かに強く、上流階級の家にも生まれた者の宿命に、縛ら

れ続けて来たのだろう。
気丈で、美しい千歳が、ずっと隠して来たのだろう苦しみ、悲しみ、孤独……。

『手に入れたかった！失いたくなかった！だって、初めてだったんです！わたくしに三城院の娘としての価値を求めなかった人は！』

必死に訴えた千歳の、悲しげなああの声と、瞳……。
それを思うと、どうしても彼女を責める気にはなれなかった。

空に浮かぶ月を見上げ、俺はもう一度ふうと大きな溜め息を吐いた。

やっぱり、俺は……。

決意を胸に、俺は屋上を後にした。

翌日。

俺は千歳に、大事な話があるから一緒に来てほしいとお願いし、沙織の病室を訪れていた。

「沙織。今日は、大事な話があるんだ」

まっすぐにこちらを見つめる沙織に、俺はゆっくりと言葉を続けた。

「……ごめん。俺、もう」

そこまで言った時だった。

「待って下さい！ーさん、そこから先はおっしゃらないで」

千歳に遮られた。

「千歳？何を……」

千歳は沙織をまっすぐに見つめ、口を開いた。

「沙織さん、ごめんなさい!!」

突然、沙織に向かって千歳が頭を下げた。

「貴女に言った、一さんが貴女よりもわたくしを好きになって結婚したというあの話、本当は違うんですの!」

驚く沙織の目をまっすぐ見つめ、千歳は続けた。

「……本当は、わたくしが無理矢理一さんを脅したんです。沙織さんが子供を墮胎された事を公表されたくなければ、わたくしと結婚するようにと。だから……」

本当に一さんが好きなのは、沙織さんなんです。

そう言っつて、頭を下げた。

「やめて下さい!そんな、私なんかに頭を下げるなんて!!」

その声に千歳は顔をあげ、今度は俺をまっすぐ見つめて言った。

「一さん、ごめんなさい。わたくし、沙織さんの事で、あなたに隠していた事があるんです」

「沙織の事で？一体何を……」

真剣な千歳の目に、俺は思わず構えた。

「全てお話ししますわ。もう、隠しごとはしたくありませんもの」

千歳の言葉に、沙織が突然叫んだ。

「ダメ！！言わないで下さい！！」

懇願するような沙織に、千歳はゆっくり彼女を見て言った。

「……沙織さん、もう、隠さなくても宜しいでしょう？わたくし、一さんにも貴女にも、これ以上隠しごとはしたくありませんの。お願いします……」

千歳の真剣な声に、沙織は黙り込み、やがて悲しそうな目で静かに頷いた。

「……ありがとうございます。一さん、これから、本当の事をお話しします。あなたが御存じない、全てを……」

そうして千歳は、ゆっくりと語り出したのだった。

Act・72「嘘と現実」

「……三年前。あの事故の後の事ですわ。わたくし、沙織さんに病室へ来て頂けるようお願いしましたの」

静かな病室に、千歳の凜とした声が響く。

ゆっくりと語るその目は真剣そのもので、俺は思わず息を飲んだ。

「そして、お願いしたんです。一さんは貴女よりもわたくしを好きになって結婚したいと言って下さった。だから、今後は二度と会わないで頂きたい、と……」

そんな事があつたなんて……。

思わず沙織を見ると、彼女は酷く辛そうな表情を浮かべ、じっと千歳を見つめていた。

「沙織さんはわたくしにおっしゃったんです。自分は本当は癌で、死ぬかもしれない。だからもう、二度と会うつもりはない、と……」

千歳はそこで目を閉じ、少しの沈黙の後、ゆっくり言葉を続けた。

「……わたくし、迷いました。一さんに本当の事を伝えるべきか。でも沙織さんは、そんなわたくしにおっしゃったんです。自分の代わりに一さんを支えて欲しい、と」

思わず沙織を見やると、彼女は悲しそうに目を細め、じっと千歳を見つめていた。

「だからわたくし、決めましたの。一さんを支え、同じように沙織さんも支えていこうと。それが、沙織さんから一さんを奪ったわたくしに出来る、唯一の償いだと……」

沙織がこの病院にいたのは偶然では無かった。全ては千歳が手配し、沙織を影から支援し、尽力していたのだ。

驚く俺に向かつて、千歳はバツと頭を下げた。

「ごめんなさい！わたくし、脚の事といい、あなたを欺いてばかり……あの事故だって、元々わたくしのせいで……」

「やめろ千歳！！もういい……もう、いいから……」

思わず制した。

「……俺が悪いんだ。婚約した筈の君を置いて、沙織に会いに行こうとしたから」

あの時。沙織に別れを告げられた俺は、すぐに沙織に会いに行こうとした。

それを止めようとして、千歳は……。

「いいえ！わたくしがいけないんです。一さんを無理矢理奪って、もう歩けないなんて酷い嘘で縛って……。ごめんなさい沙織さん、わたくし、貴女にも酷い事を……」

千歳のその言葉に、それまで黙っていた沙織が、たまらないように口を開いた。

「千歳さんは悪くありません！あたしこそ！もう会わないって約束

したのに、お兄ちゃんと……。ごめんなさい……。」

唇をかみ、うつむいた沙織に、千歳はふるふると頭を振った。

「謝らないで下さい！悪いのはわたくし。貴女から一さんを奪ったくせに、お世話をする事で許されようなんて、虫のいい事考えていたから……。」

そう言うと、千歳は手元に持っていたバッグから一枚の紙を取り出して俺に渡した。

「千歳!!これ!?!」

渡されたその紙は、俺があの時千歳に渡し、破棄したと思っていた離婚届だった。

「……見てのとおりですわ。ごめんなさい。もっと早くこうするべきでしたのに、勇気が持てなくて……。」

そう言って、真剣な目で沙織を見つめた。

「……沙織さん。一さんは貴女にお返しします。その代わりに、一つだけ、どうしてもお願いしたい事があるんですの。」

「……千歳さん?一体、何を……。」

戸惑う沙織の前で、千歳は沙織の手を掴み、まっすぐに彼女の目を見つめて言った。

「お願いします!貴女のお腹の中の子供を、わたくしに下さい!!」

「 なつ、千歳さん！？何を言って……」

驚く沙織に、千歳は真剣な顔で続けた。

「このままじゃ、貴女もお腹の子供も助かりませんわ。わたくしなら、子供を育てる事も出来ます！！」

「千歳、まさか君は、代理母になるつもりか！？」

俺の問いに、千歳はこちらを振り向いて頷き、それから沙織に向き直って言葉を続けた。

「ねえ沙織さん、お願いです。わたくしに子供を下さい！そして、貴女はちゃんと手術を受けて、生きて下さい！一さんの為にも！！」

つまり千歳は、沙織と子供を両方助ける為、自分のお腹に沙織の子供を移し、代理母となって子供を産み育てると、そう言っているのだ。

まさか千歳が、そんな事を考えていたなんて……。

「沙織さん、お願いです！！迷ってる内にも、子供は大きくなっていきますのよ！？貴女の病気だって……。お願いです。もう一さんを、悲しませないで……」

すがるような瞳でそう言った千歳に、沙織は一瞬躊躇い、それからゆっくりと頷いた。

「……分かりました。千歳さん、この子を、よろしく願います……」

愛しそうにお腹を撫でる沙織の身体を、千歳は優しく抱きしめた。

「……………ええ。わたくし、絶対無事に産んでみせますから……………」

千歳の腕に抱かれながら、沙織は静かに涙を零した。

「……………ありがとう、千歳さん……………」

こうして千歳は、沙織のお腹の子供の代理母になる事となった。

一日も早くしなければ、子供も沙織ももたない。

その判断から、代理母の手術と手続きの準備は急ピッチで進められ、沙織と千歳は数日後に渡米する事が決まったのだった。

その傍ら、俺と千歳は正式に離婚手続きをすませ、俺は離婚の慰謝料の一つとして、千歳に屋敷を譲る事を決めた。

「一さんはどうするんですの？住む所、決まっていますの？」

「ああ、大丈夫。すまない。こんな事になってしまって……………」

すると千歳は、困ったように微笑んだ。

「そんな顔なさらないで。大丈夫。わたくし、一人じゃありませんもの。だって、これから先、一さんの子供の母親になれるんですから」

「……………千歳……………」

それ以上言葉がかけられず、俺は黙って頭を下げ、その場を後にしたのだった。

一本の鍵を、その手に握り締めて……。

A c t ・ 7 3 「雨の絆」(前書き)

病気・医療・不妊治療・ドナー等に関する描写は現実と異なる場合がございます。

恐れ入りますが、予めご了承の上お読み頂きますようお願い致します。

Act・73「雨の絆」

屋敷を出た俺は、沙織のいる病院へと向かった。もう通い慣れた病室までの道のり。この廊下も、随分見慣れた。見慣れたドアの前でコンコンとノックすると、耳慣れた「どうぞ」という声が返って来た。

ドアを開けると、沙織の笑顔が迎えてくれた。

「沙織、具合、どうだ？」

「ん、大丈夫。今日は大分いいから」

彼女が横たわるベッドに歩み寄り、傍らに置かれた椅子に腰かけて彼女を見た。

「渡米の準備、終わった？」

「準備って言っても、荷物は元々、ここに持って来てる分しかないから」

「そっか……」

短く頷き、俺はじっと沙織の目を見つめた。

「なあ沙織、俺、ちょっと渡したいもんがあるんだけど」

「渡したいもの？」

首を傾げる沙織を前に、俺はポケットを探り、それを取り出した。

「手、出して」

「じじっ？」

素直に差し出された手の上にそれを落とした。

「えっ！？お兄ちゃん、これ……」

それは、ずっと引き出しの奥に眠っていた、あの鍵だった。

「返す。お前のだからな」

俺の言葉に、彼女の顔がみるみる内に曇った。

「……ごめん。ずっと、持っていてくれたんだね」

うつむく彼女の頭をくしゃりと撫でた。

「ばあか。んな顔すんな。約束しただろ。一緒に笑って生きるって」

「……ん、ごめん」

「まあた謝ってる。謝るなつつたる。そんな子にはお仕置き決定」
言うなり、唇を塞いだ。

「……んっ……んんっ……！」

熱い吐息が漏れる彼女の口内を悪戯にかき回しながら、そっとポケ

ツトからもう一つ隠していたものを出し、それをスツと彼女の指に嵌めた。

「……………えっ?」

唇を解放された彼女は、自分の指を見て目を見開いた。
そこには、キラリと輝くダイヤの指輪があった。

「婚約指輪。言ったる。お前のだって」

あの日、送られて来たまま捨てられなかったその指輪が、今、再び彼女の指にある。

その光景が嬉しくて、俺は思わず目を細めた。

「……………お兄ちゃん……………」

目をうるませた彼女に、もう一度優しく口付けた。

「……………愛してる。今度こそ本当の、奥さんになって欲しい」

彼女は口元に手を当て、その目から大粒の滴を溢れさせながら頷く。
その細い身体を優しく抱きよせ、耳元にそっと囁いた。

「……………愛してる。ずっと一緒にいよう」

もう二度と離さない。そう誓いながら、再び唇を重ねた。

翌日。

俺達は、病院の屋上でささやかな結婚式をあげる事になった。

言いだしたのは千歳だ。沙織の身体の事もあって大きな式は無理だが、それでもドレスを着て指輪を交換するくらいなら出来るだろう、と。

俺達に内緒で病院に相談し、ドレスや花束まで手配してくれたのだ。

『わたくしのせいでお二人の時間をたくさん奪ってしまったんですもの。これくらい、させて下さいな』

そう言って、とびきり美しく微笑んだ。

その後、千歳はリハビリを担当していた主治医からプロポーズを受け、電撃婚約した。

彼女の嘘に協力し続けたのは、三城院の娘だったからではなく、他ならぬ千歳だったからなのだと言われたらしい。

千歳がずっと望んでいた、家柄や血筋でない、彼女自身を見てくれる存在は、実はずっと近くにいたのだ。それを知った時、俺は何だか、自分の事のように嬉しかった。

『千歳、幸せになれよ』

『ええ。勿論ですわ。わたくし達、一さんと沙織さんに負けないくらい、素敵な夫婦になってみせますからね』

そう言って、幸せそうに笑った。

最初は数人の友人や担当の医師や看護師のみの出席予定だった式は、いつの間にか他の医師や看護師、患者達も駆けつけ、たくさんのお客様に囲まれたものとなった。

「新郎新婦は誓いのキスを」

神父役の山田さんが嬉しそうに言った。

「山田さん、顔、ニヤけてますよ。もっと神父らしくして下さい」

「何を言うか！俺くらい神父らしい男もいないだろ？」

そう言っただけ胸をはられ、「早くしろ」と促された。

仕方ないなと小さく溜め息を吐き、俺は再びドレス姿の沙織に向き直った。

そのベールをあげた時、晴れ空からパラパラと滴が降り出した。それは陽に照らされ、キラキラ輝いて見えた。

「キレイ……」

顔をあげて微笑んだ沙織に、俺はため息交じりに笑って言った。

「まったく……。お前とは本当、雨ばっかだな。知ってるか？」

こういうの、“きつねの嫁いり”って言うんだぞ」

「あはは。それじゃあ、きつねさん？」

悪戯っぽく微笑んだ彼女に、優しくキスした。

瞬間、わあっと歓声が沸いた。

どこまでも雨で彩られた、俺達らしい結婚式だな。

そんな事を思いながら、俺は再び、キスの雨を降らせたのだった。

Act・73「雨の絆」(後書き)

<作者より一言>

第一話からここまでずっと読んで来て下さってる読者の皆様、本当にいつも有難うございます!!

次回はいよいよラストエピソード

愛故に悩み、苦しみ、悲しみ、それでも懸命に生き来たイチ、沙織、千歳。

それぞれの思いの果てはいかに？

次回【レインキス】エピソード

お楽しみに

エピソード（前書き）

病気・医療・不妊治療・ドナー等に関する描写は現実と異なる場合がございます。

恐れ入りますが、予めご了承の上お読み頂きますようお願い致します。

エピソード

空を見てた。

紺碧の中にちらりと見える雲の白さがまた美しい、紛れもない夏の晴れ空。

『雨の降る日に逢ったやつとは、大概いつも長い付き合いになるんだ。』

だからきつと、あんたともそうだな』

初めて逢ったあの日の声が、鮮やかに蘇る。

あの時からずっと、二人の思い出は、雨にばかり彩られてる。

初めてのデート。初めてのキス。初めての夜。再会したあの日。そしてあの、幸せな結婚式……。

お兄ちゃん

「沙織っ!？」

慌てて振り向いた。

ただそこには誰もおらず、ただソヨリと、優しい風が吹き抜けるのみだった。

「………いるわけ、ないよな」

呟き、もう一度向き直った。

目の前には、さきほど磨いたばかりの御影石に、備えたばかりの線香と花束。

あれから間もなく。代理母への卵子提供を終えた沙織は、そのまま

手術を受ける事なくこの世を去った。

満足そうに笑顔を浮かべた、安らかな最期だった。

遠くから声がした。

俺はその声に向かつて応え、こちらへ手招きした。

それに気付いた彼女が、ゆっくりとこちらに歩いて来た。

「……………久しぶりですわね、一さん。お元気でした？」

黒い服を着た小さな女の子を伴ってやって来た彼女は、懐かしそうに目を細め、柔らかく微笑んだ。

「ああ、久しぶりだな。元気だったか、千歳。大きくなったな、沙良ちゃん」

千歳の手を握る小さな女の子の頭を撫でると、その子はギュッと千歳にしがみついた。

「沙良ったら、もう……………。ごめんなさいね、この子相変わらず人見知りで」

千歳が申し訳なさそうにその眉をしかめた。

「いや、いいんだ。ありがとう、連れて来てくれて。アイツも、喜んでると思う」

千歳は何も言わず、ただ黙って、寂しげに微笑んだ。

それからおもむろに眼前の御影石に向かつて手を合わせ、傍らの小さな女の子にも同じようにするよう促した。

「ご挨拶なさい。元気ですって」

女の子は頷き、石の前で手を合わせた。

俺はその様子を穏やかに見つめ、それからもう一度空を見上げた。

沙織、見てるか？

語りかけたその時、ふいに雨が降り出した。

空は綺麗な晴れ空のままだというのに……。

ああ、お前なんだな。

ここにいるよと、聞こえた気がした。

大丈夫。俺も、子供も、千歳も、皆元気だ。

そよそよと風が吹き、雨が止んだ。

「あ、かあさま、みて！にじだよ！！」

小さな指で示された先を見ると、遠い向こうの空に、綺麗な虹がかかって見えた。

「まあ本当。綺麗ね……」

虹を見て喜ぶその子を見て、俺と千歳は穏やかに微笑んだ。

「千歳、これからもその子、よろしく頼むな」

「ええ。沙良はわたくしとあの人、それに一さんと沙織さん、4人

の娘ですもの」

愛しそうに子を見つめるその瞳は、すっかり母親のそれだった。

時は、ゆっくり流れて行く。

俺も、千歳も、そして沙良も、時と共に変わって行くだろう。

移り行く時の中で、俺は笑って生きよう。

それがきつと、空で見てるカヨや沙織への、一番の恩返しだから。

ありがとう。

吹き抜けた風によって、聞こえた気がした。

歩き出そう。思い出を胸に。

いつかまた、誰かとキスの雨を降らす、その日まで……。

エピソード（後書き）

<作者より一言>

最後まで【レインキス】をお読み頂き誠に有難うございます。

もともと体験談に基づくセミフィクション小説として、記憶の保管を目的に始めたこの小説ですが、途中から完全フィクションの小説となりました。

書き始めた当初は数人にしか読まれていなかったのですが、いつの間にか一日何十人もの方が読んで下さるようになり、作者として大変嬉しく、皆様の存在が執筆の励みとなっております。

これまでこの作品を読んで下さった全ての皆様。皆様のおかげでここまで頑張って執筆を進める事が出来ました！

アルファポリスなどに投票して下さい下さった皆様には、事の他感謝申し上げます。

この作品を読んで下さった全ての皆様。本当に有難うございました！

【レインキス】はここで終わりを迎えました。今後は沙織が主人公の【ドロップ】を書きすすめていきたいと思っております。

もし宜しければそちらの方もご覧頂けると大変嬉しく思います。

まだまだ拙い文章力しかなく、甚だ恐縮ではございますが、今後とも私の作品をお読み頂けるよう努力していきたいと思っております。

読者の皆様、どうぞ今後とも宜しくお願い申し上げます。

追記：

この作品を書くにあたり、お力添え頂いた水無月 岳様。

貴方様の若く鋭い感性には、幾度となく感心させられ、物語を書き

すすめるにあたり大変な力となりました。
色々とお助力いただき本当に感謝に尽きません。この場を借りてお礼申
し上げます。本当に有難うございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5645n/>

レインキス

2011年10月8日00時13分発行